

長野県松本市

松本城下町跡

*ISEMACHI*

# 伊勢町

—第 29 次発掘調査報告書—

2020.3

松本市教育委員会



## 例 言

- 1 本書は、平成30年6月7日～7月30日に実施された、長野県松本市中央1丁目109-2ほかに所在する松本城下町跡伊勢町の第29次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、ホテル建設事業に伴う緊急発掘調査であり、上高地みそ株式会社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査、整理・報告書作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆分担は次のとおりである。  
第Ⅰ章を宮下亮、第Ⅱ章第2節を吉澤せり子、第Ⅲ章第4節1～3を竹内靖長、第Ⅲ章第4節4を壬生量子、第Ⅲ章第4節6を小山奈津実、その他を原田健司が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。  
遺物洗浄・注記・保存処理・接合復元 内田和子・中澤温子・洞澤文江・三澤栄子  
遺物実測・トレース（土器・陶磁器、瓦、羽口）柏原佳子・久保田瑞恵・竹内直美・竹平悦子・宮本章江  
（木製品）富岡享子・丸山恵（石製品）原田健司・宮下亮  
（金属製品）古幡大治朗・洞澤文江・前沢里江  
陶磁器デジタルカラー実測 直井由加理 遺構図整理・トレース・一覧表作成 荒井留美子  
写真撮影（遺構）原田健司・宮下亮（遺物）宮嶋洋一  
DTP・編集 荒井留美子、直井由加理、原田健司、前沢里江、丸山恵
- 5 本書で用いた略記は次のとおりである。  
第○号鍛冶炉跡→鍛冶炉○、第○号溝状遺構→溝○、第○号土坑→土○
- 6 図中で使用した方位は真北を示す。なお、図表中には調査時に設定した任意の座標系の数字を用いた箇所がある。国家座標との対応関係は第Ⅲ章第2節3を参照されたい。
- 7 本書では以下のものを遺構図にスクリーン tone で表した。  
 焼土  炭化物・灰  攪乱  推定ライン
- 8 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 9 土器・陶磁器実測図の断面の塗り分けは、白：土師質土器・瓦、黒：陶磁器である。
- 10 発掘調査実施と報告書作成にあたり次の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申しあげる。  
後藤芳孝、菅沼加那、南山孝、宮島義和
- 11 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒399-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に保管している。

## 目 次

例言・目次	3
第Ⅰ章 調査の経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史	5
第Ⅲ章 調査の方法と成果	
第1節 過去の調査	10
第2節 調査の方法	10
第3節 遺構	12
第4節 遺物	
1 土器・陶磁器	21
2 瓦	33
3 鍛冶関連遺物	33
4 木製品	36
5 石製品	39
6 金属製品	41
第Ⅳ章 調査のまとめ	45
参考文献	46
写真図版	
報告書抄録	

## 図目次

図1 調査地の位置と周辺遺跡	5
図2 『享保十三年秋改松本城下絵図』復元図	7
図3 『享保十三年秋改松本城下絵図』にみる伊勢町	8
図4 過去調査地の位置図	9
図5 事業対象地と調査区の範囲	11
図6 土層断面図	11
図7・8 I～IV検 全体図	15
図9～12 I～IV検 遺構図	17
図13～19 土器・陶磁器(1)～(7)	26
図20 瓦	34
図21 羽口	35
図22 木製品	38
図23 石製品	40
図24・25 金属製品(1)・(2)	43
図26 これまでの発掘成果から復元した鍛冶屋の様子	45

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査の経緯

大和情報サービス株式会社（以下「大和情報サービス」という。）により松本市中心 1 丁目 109-2 ほかでホテル建設工事が計画されたが、予定地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である松本城下町跡（伊勢町）に該当していた。松本市教育委員会（以下「市教委」という。）ではホテル建設に先立ち、予定地の土層状況を確認するため、平成 30 年 5 月 10 日～5 月 11 日に事業地内で試掘調査を実施した。試掘調査で近世の土層が確認されたため、施工業者である大和ハウス工業株式会社と保護協議を行った。発掘調査とこれに係る事務処理については市教委が実施することとし、平成 30 年 6 月 1 日付で土地所有者の上高地みそ株式会社（以下「上高地みそ」という。）と松本市の間に発掘調査業務の委託契約が締結された。平成 30 年 7 月 18 日付で文化財保護法 93 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が大和情報サービスから長野県教育委員会（以下「県教委」という。）宛に提出された。

現地での発掘調査は平成 30 年 6 月 7 日～7 月 30 日に実施し、調査終了後、平成 30 年 8 月 7 日付で県教委に発掘調査終了報告書を提出した。また、7 月 30 日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、8 月 8 日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け平成 31 年 3 月 7 日付で出土文化財譲与申請書を県教委に提出し、3 月 19 日付で出土文化財の譲与についての通知を受けた。

本発掘調査に係る文書等の記録は以下のとおりである。

### <平成 30 年度>

- 5 月 8・10 日 埋蔵文化財保護協議実施
- 5 月 10 日～5 月 11 日 市教委が試掘調査実施
- 6 月 1 日 上高地みそと松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
- 6 月 7 日～7 月 30 日 市教委が発掘調査実施
- 7 月 30 日 「埋蔵物発見届」「埋蔵文化財保管証」を市教委が松本警察署、県教委に提出
- 8 月 7 日 「発掘調査終了報告書」を市教委が県教委に提出
- 8 月 8 日 「文化財の認定及び県帰属について」県教委から市教委に通知
- 3 月 7 日 「出土文化財譲与申請書」を市教委が県教委へ提出
- 3 月 13 日 上高地みそと松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約に関する変更契約を締結
- 3 月 19 日 「出土文化財の譲与について」県教委から市教委に通知
- 3 月 19 日 松本市が上高地みそに埋蔵文化財発掘調査完了報告書提出

### <令和元年度>

- 4 月 1 日 上高地みそと松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結（整理作業・報告書刊行）

## 第 2 節 調査体制

### <平成 30 年度（発掘調査）>

- 調査団長：赤羽郁夫（松本市教育長）
- 調査担当者：原田健司（主事）、宮下亮（嘱託）
- 発掘協力者：伊藤節子、加藤旻、加藤朝夫、金井秀雄、小岩井洋、清水陽子、鈴木高、曾根原裕、田中勇一郎、鳥井和幸、西原達雄、原弘、降旗弘雄、三谷久美子、百瀬二三子、柳さおり
- 整理協力者：内田和子、中澤温子、宮本章江
- 事務局：大竹永明（課長）、三村竜一（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

### <令和元年度（整理作業・報告書刊行）>

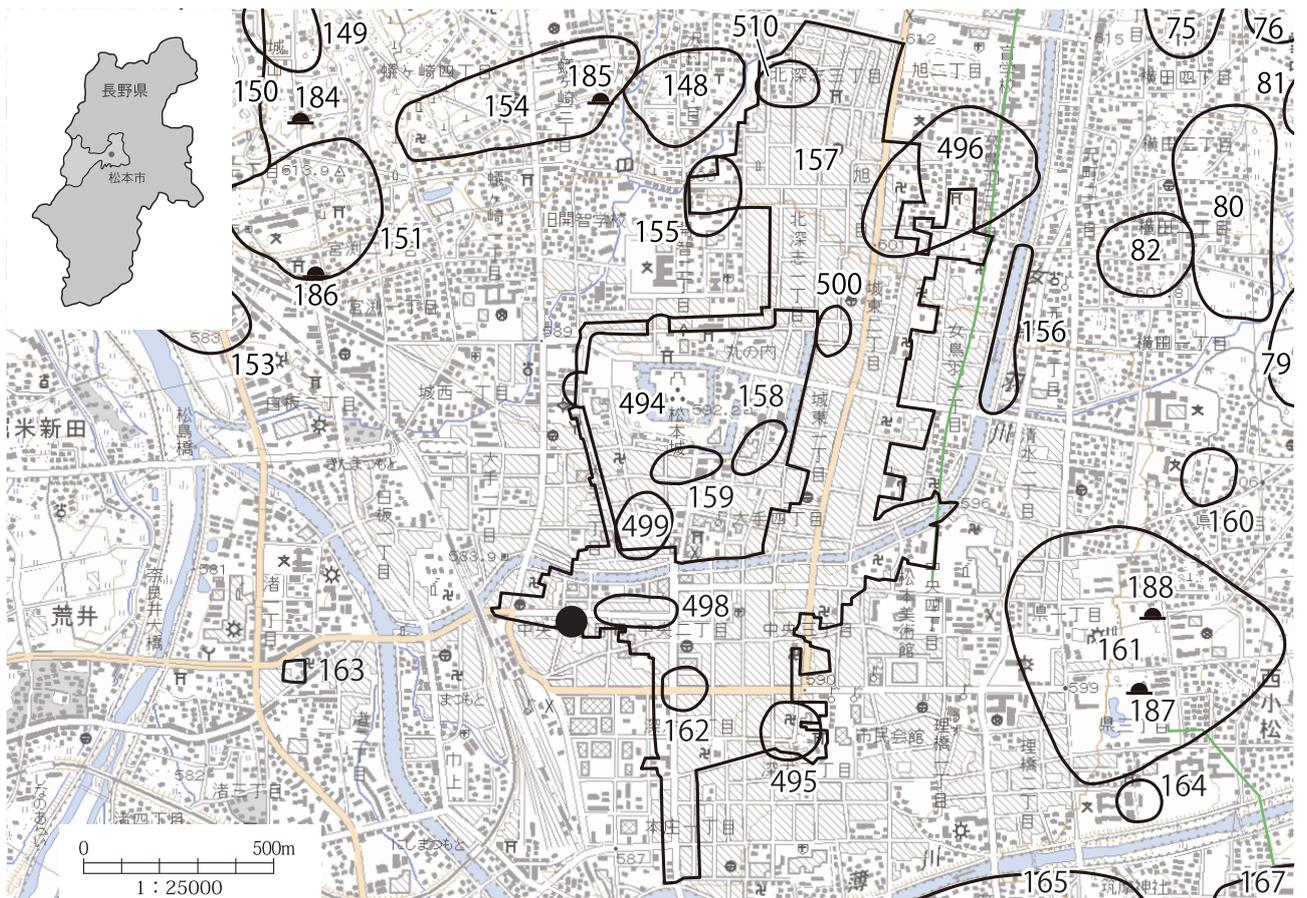
- 調査団長：赤羽郁夫（松本市教育長）
- 報告書担当：原田健司（主事）、宮下亮（嘱託） 調査員：宮嶋洋一
- 整理協力者：荒井留美子、内田和子、柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、富岡享子、直井由加里、中澤温子、古幡大治朗、洞澤文江、前沢里江、丸山恵、三澤栄子、宮本章江
- 事務局：大竹永明（課長）、竹内靖長（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史

### 第1節 地理的環境

今回の調査地は、松本城天守閣の南約 630m、西約 300m の地点に位置する。調査地の北約 130m には女鳥羽川が流れている。松本市街地は標高 600m の等高線が円形に取り囲み、付近では最も標高が低くなっている。ここに女鳥羽川や薄川、田川などの河川が流れ込み、複合扇状地を形成している。周辺の地盤は比較的軟弱なものであり、ある程度の地盤沈下が起きている。これまでの発掘調査では伊勢町付近で年 1.6～1.7mm の速さで沈下していることが判明している。

今回の発掘調査地点は松本市中央 1 丁目にある。調査地付近の旧地形は基本的には北東から南西にかけて緩やかに傾斜している。地山面を約 1.7m 覆う土壌は、すべて戦国時代～現代までの整地客土層である。その基本構成は、現地表から -0.6～-1.0m が近・現代の客土で、それ以下が江戸時代後半以前の整地土層である。-0.6～-1.1m は、遺物等から安政 6 年（1659）以降の火災層と考えられ、第Ⅰ検出面とした。約 -1.1m で第Ⅱ検出面（18 世紀中頃～19 世紀中頃）、約 -1.4m で第Ⅲ検出面（17 世紀前半～中頃または 18 世紀後半～19 世紀前半）、約 -1.7m で第Ⅳ検出面（戦国時代か）の生活面を検出し、第Ⅳ検出面以下は葎等の植物が混入する自然堆積層である。



75 大輔原遺跡	148 沢村遺跡	155 田町遺跡	161 県町遺跡	184 開き松古墳	495 天神西遺跡
76 大村立石遺跡	149 放光寺遺跡	156 女鳥羽川遺跡	162 本町南遺跡	185 饅頭塚古墳	496 岡の宮遺跡
79 宮北遺跡	150 犬甘城址	157 松本城下町跡	163 渚城址	186 勢多賀神社裏古墳	498 伊勢町遺跡
80 横田遺跡	151 城山腰遺跡	158 丸の内遺跡	164 埋橋遺跡	187 県塚 1 号古墳	499 土居尻遺跡
81 大村塚田遺跡	153 宮瀬本村遺跡	159 大名町遺跡	165 筑摩遺跡	188 県塚 2 号古墳	500 片端遺跡
82 横田古屋敷遺跡	154 蟻ヶ崎遺跡	160 四ツ谷遺跡	167 筑摩北川原遺跡	494 松本城跡	510 堂町遺跡

図 1 調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000)

## 第2節 歴史的環境

### 1 松本城下町と伊勢町の概要

近世の松本城下町は武家地・町人地・寺社地に大別することができる。そのうち町人地は、北国脇往還（善行寺街道）に沿った本町・中町・東町の親町3町と、親町から枝分かれする枝町10町の計13町を中心に成り立っている。今回の調査地である伊勢町は町人地に含まれ、本町から飛騨（岐阜県北部）へ向かう野麦道（野麦街道）に沿って発展した枝町である。

伊勢町は、東西に伸びる野麦道を挟むように町家が並んでおり、その範囲は東西475m、南北63～84mほどであった。南北にはそれぞれ南蛇川、北蛇川と呼ばれる水路が流れており、排水路としての機能だけでなく、南北の屋敷地を区画する用途も兼ねていた。また、町の西端には木戸のほか、城下町の東西南北の要所に設置される地蔵堂（十王堂）が置かれていた。伊勢町の地蔵堂は、町の北に位置する浄土宗浄林寺からの差配を受けていた。元禄9年（1696）に記された「伊勢町中軒数改帳」によると、伊勢町の町家は89軒にもおよび、それぞれ間口2～4間の奥行きが長い短冊形をしていたという。この地割りは現在までほとんど変わることなく受け継がれている。

### 2 伊勢町の成立

天正10年（1582）7月小笠原貞慶が深志城に入ると、城名を松本城と改め、城下の形成が進められた。貞慶が本格的な城下町の形成に着手したのは、天正13年（1585）頃からであり、これが松本城下町の原形といわれている。

「信府統記」によると、当初、伊勢町は「西口」と呼ばれており、貞慶による城下町整備の過程で「伊勢町」の名に改められたという。「伊勢町」という町名の由来としては、天正11年（1583）、貞慶が亡き父長時の菩提を弔うため、木沢山に正麟寺を建立した際、木沢山に古くからあった伊勢太神宮を西口の地に移したことによるものと「松本記」に記されている。

貞慶の城下町整備では親町・枝町の地割りがなされ、町名がつけられたものの、まだ町並みはまばらで、村々の様子と変わりはなかったという。小笠原氏の後の城主石川数正も城下町の整備を続け、その子康長の時代になると、都市集住化が進み、多くの町屋が建設されていった。石川父子の二代で城下町の築造は飛躍的に進展したといえる。それ以降、松本城下町の建設事業は、水野氏の代にあたる17世紀半ばには一応の完成をみるにいたった。

これまでの発掘調査において、16世紀後半の松本城築城時期にあたる遺構が確認されたのは、伊勢町の東側のみであった。このことから、小笠原氏時代の伊勢町は、主として本町側（東側）が先行して形成され、町家が並ぶ江戸時代の町人地特有の町並みが形成されていったのは、石川氏時代以降であると考えられる。

### 3 職人の町伊勢町

親町3町は商人町の様相を呈するとともに、「三宿」ともいわれ、宿場町としての機能が整っていた。これに対し、枝町10町は商人町であると同時に、職人町としての性格をもつ町が多かった。

中藤淳氏の川辺文書の研究によれば、寛文9年（1669）および享保9年（1724）の記録から、伊勢町には鍛冶屋が多く住んでいたものと推定されている。絵図等からも、伊勢町では商人のほか、多くの職人、特に鍛冶屋の存在が目立っていたことが確認できる。

水野家史料の「松本市中之記」によると、伊勢町は博労町とともに鍛冶頭が置かれていたことから、藩主水野氏の時代には伊勢町は鍛冶の中心地として認識されていたことがうかがえる。江戸時代後半になると、



各町の特徴的な職人の活動により、町のイメージが定着してくるようになり、伊勢町の鍛冶屋も同様の影響力をもっていた。

現在までに行われてきた伊勢町の発掘調査では、町屋の推定地から鍛冶炉跡や鉄滓などの鍛冶産業に関連する遺構・遺物が数多く見つまっている。文献に限らず、考古学的にも伊勢町の鍛冶屋の盛栄をうかがい知ることができる。

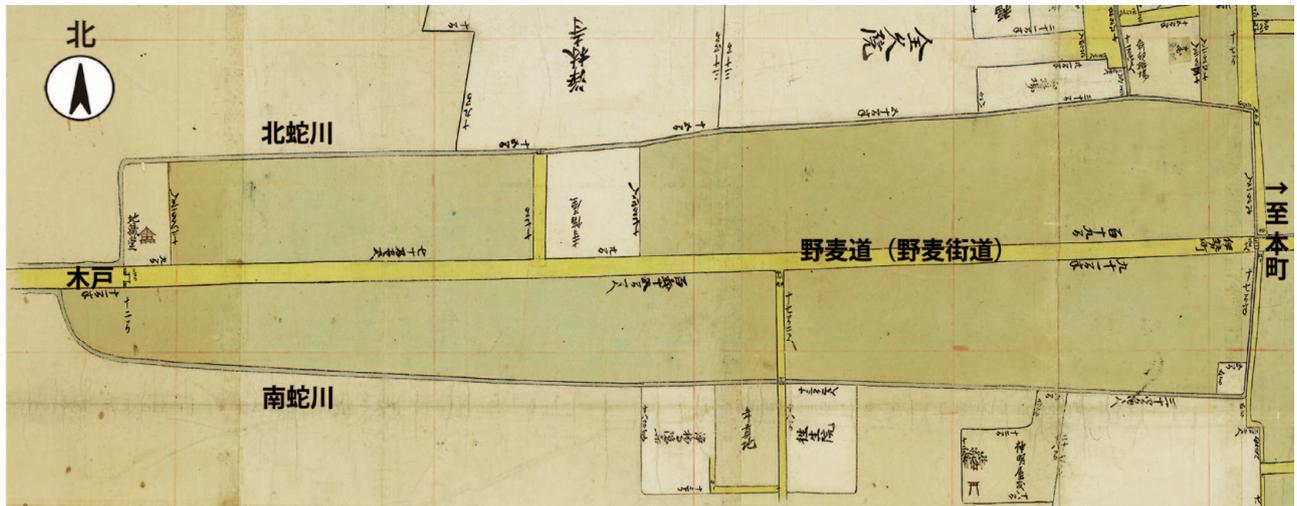


図3 『享保十三年秋改松本城下絵図』にみる伊勢町（部分・松本城管理事務所所蔵）

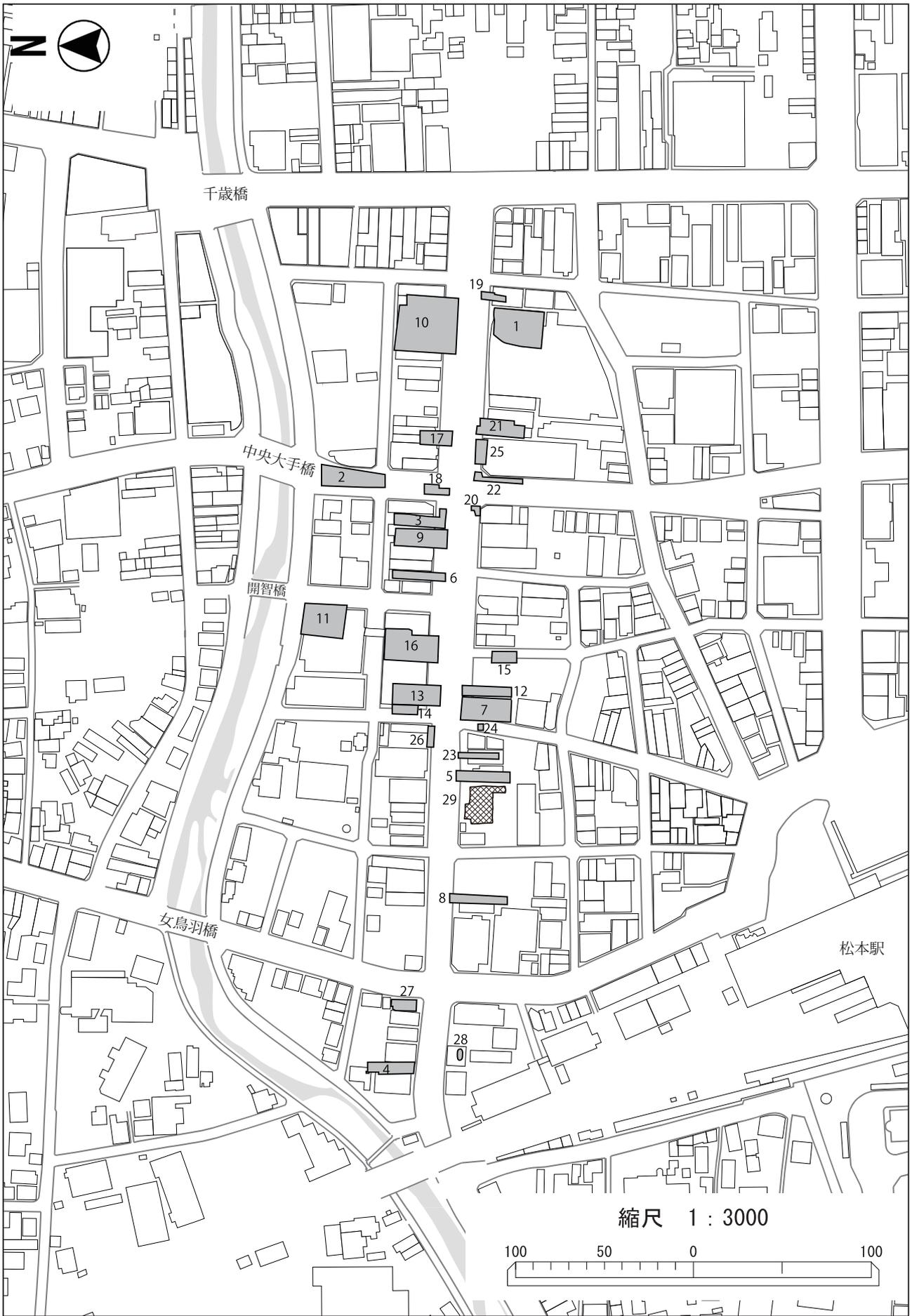
#### 4 西の玄関口

文禄年間（1592～1596）、城下の建設事業を推進した石川康長は、城の鎮護と城下の安泰祈願、町方と在方との境界標として、松本城下の東西南北の4カ所に十王堂（地藏堂）を配置した。それらは松本城下町の範囲を示す機能ももち、城下町の西端は伊勢町の地藏堂までとされていた。また、小笠原貞慶の整備が行われる以前、この地は「西口」と呼ばれていたことなどからも、伊勢町は松本城下町における西の玄関口であったことがうかがえる。

伊勢町の基盤となる野麦道は、本町にある牛つなぎ石を起点に北国脇往還（善行寺街道）から分岐して、伊勢町から巾上・渚・島立・新村を通して波田へ抜ける道である。この道は松本から飛騨へ行く「ひだみち」であるが、飛騨方面からすれば「ぜんこうじ道」でもあった。そのため、伊勢町には奈川（旧北安曇郡奈川村）の牛方などが利用したものと推測される「牛宿」が置かれていた。また、野麦道は信濃と飛騨高山・江戸とを結ぶ政治的な道、信濃と北陸地域を結ぶ交易の道として情報や物資が行き来し、江戸中期以降に重要視されるようになった。

#### 5 災害と城下町

江戸時代を通して、松本城下町は数多くの災害に見舞われている。中でも家屋が密集している城下町では火災の被害が甚大であり、伊勢町も例外ではなかった。伊勢町に関わる火災は、資料で確認できるものだけでも享保5年（1720）、延享4年（1747）9月、安永5年（1776）12月、天明2年（1782）3月、文化5年（1808）4月、安政4年（1857）9月、同年10月、元治元年（1864）12月と多数みられる。特に「綿屋火事」と称された安永5年の火災は伊勢町だけでなく、出火元の中町、本町、小池町、飯田町、東町、安原町、三の丸にまでおよぶ大火となった。このときの伊勢町の様子は、下今井村の筒井庄左衛門が書き記した記録の中で「伊勢町入口少しのこり候、浄林寺より西方のこり」と綴られている。松本城下町はこのような度重なる火災によって被害をうけ、その都度新しい町並みがつくりあげられていった。



※数字は調査次を表す。

図4 過去調査地の位置図

# 第Ⅲ章 調査の方法と成果

## 第1節 過去の調査

伊勢町では、松本市中央西土地区画整理事業に伴って、これまでに28回の発掘調査が実施されている。各調査次の詳細は図4・表1を参照されたい。

表1 過去の調査一覧

調査次	年度	調査原因	調査面積	特記事項 / 調査概要
1	H6	松本市中央西土地区画整理事業	920㎡×4	近世町屋跡の発掘調査は長野県内初。16～19世紀の間に、150cmも人工的に盛土されていたことがわかった。
2	H6		110㎡×3	調査地点は石川氏の極楽寺、水野氏の春了寺、戸田氏の全久院と、通じての寺院地で、I～III検で寺院関連の遺構を検出。
3	H6		18㎡×2	I検では火災を受けたと思われる住居跡と、土蔵の基礎を確認。II検は調査面積が小さく、生活面の存在だけを確認。
4	H7		35㎡×1	十王堂の推定値であったが、近世の整地層、遺構、遺物は発見されなかった。
5	H7		65㎡×3	川辺文書等の記述で鍛冶屋がいたと推定されていた場所であり、考古学的にも裏付ける形になった。非常に遺存状態の良い鍛冶跡を検出。
6	H7		28㎡×3	近世末～近代の焼土面2面を確認。(大火の痕跡か?)
7	H7		90㎡×2	I検の建物址は、遺存状況が良い。1間がほぼ180cmで現在のものと同様である。ゴミ穴からは多量の遺物が出土。
8	H8		10.2㎡×4	17世紀前半～19世紀前半の4つの生活面を確認。II検では、石組みの鍛冶跡を検出。
9	H8		61.5㎡×4	16世紀後半～18世紀の整地層を確認。16世紀末の初期の町割りを確認できた。
10	H8		170㎡×9	幕末～明治期の土蔵の基礎や排水溝を検出。排水溝は露天部分は間知石で仕切られた溝で、地上に出ない部分は木製の樋を利用していた。
11	H8		153㎡×4	4層を調査した。絵図によると、今回調査地は浄林寺の旧境内地の一部と思われるが、それに関わる遺構はなかった。
12	H8		125㎡×4	17世紀後半～19世紀の4つの生活面を確認。町屋のほぼ1軒分の範囲を調査。鍛冶跡が検出された。幕末期の一分銀の土製模造品が出土。
13	H8		90㎡×5	I・II検からは小垣堀、III・IV検からは鞆の羽口・鉄滓が多量に出土し、この地には幕末から明治にかけては鋳掛屋が、江戸中期には鍛冶屋があったと推定される。屋敷地が、時代を経て道路沿いから北へ広がっていることがわかった。
14	H9		90㎡×5	17世紀前半～19世紀後半の整地層5層を確認。羽口・垣堀・鉄滓が多量に出土し、焼土面が多量検出された。
15	H9		70㎡×4	17世紀後半～20世紀初頭の整地層4層を確認。大正期と江戸後期の水道遺構が発見され、近世と近代の水道施設が比較できる点で注目される。
16	H9		382㎡×4	16世紀後半～19世紀後半の整地層4層を確認。16世紀後半以前と17世紀前半以降の町割りが大きく変えられていることが確認。
17	H9		80㎡×4	16世紀後半～19世紀前半の整地層4層を確認。詰められた粘土が被熱する土坑から、鉄滓・対蝸などが出土した。鋳掛に関連すると考えられる。
18	H10		のべ131㎡	町屋敷の“中央部”のみの調査に留まった。鉄滓と、フイゴの羽口をわずかに採集。
19	H10		60㎡×6	16世紀後半～19世紀後半の整地層6層を確認。水野氏の家紋がある金箔煙管が出土。VI検から16世紀後半の築城時期にあたる遺構が検出。
20	H10		80㎡×5	伊勢町通り沿いまで調査し、建物の基礎石群のほか、工房群を検出。そこからは、“焼土捨て場”と多量の“鉄滓”“フイゴの羽口片”が出土。
21	H11		110.4㎡×4	16世紀～19世紀とみられる整地層5面を確認。屋敷地2軒分ほぼ全体を調査し得た。各面で埋設桶が多くみられた。
22	H11		のべ173.8㎡	18世紀～19世紀とみられる整地層6面を確認。屋敷地の杭列、ゴミ穴を検出。中庭とみられる部分で池址と推定される遺構を検出。
23	H12		のべ238.5㎡	調査区北端はI～VII層を、そのほかはII～IV層を確認。大量の鉄滓、多数の羽口、残存状態の良い鍛冶炉、金床石が出土。
24	H12		12.3×5㎡	整地層5層を確認。裏手部分のみであるため、建物址は、3面での土蔵基礎とみられるもののみで、IV検以前の土坑はゴミ穴とみられる。
25	H12		のべ467.5㎡	中世～近世の遺構を確認。VIII・IX面から12～13世紀の遺構・遺物を確認し、中世の集落がこの付近に存在したことが明らかになった。
26	H13		159㎡×5	絵図によれば浄林寺門前と記されており、幕末期には飯屋となっている。6面の生活面を確認。II面からは鉄滓や羽口が出土。
27	H13		164.4㎡×3	絵図によれば江戸時代後半までは伊勢町の範囲外となっている。江戸時代の生活面を5面確認。いずれも江戸時代後半以降に属する面であった。
28	H13		50.5㎡×5	本調査地は江戸時代末の絵図によれば、伊勢町の範囲外であるが、近代以降の面より下層から江戸時代の生活面を4面確認。

## 第2節 調査の方法

### 1 調査区の設定

今回の事業予定地は954.45㎡におよぶものであった。事前に試掘調査を実施し、遺構面が残存している範囲を確認し、建物の建設予定範囲を中心に319㎡を調査区として設定した。

### 2 発掘手順

パワーショベルを使用して、アスファルト舗装や攪乱土を除去し、最上面で検出された生活面を第I検出面とした。その後、人力による検出を行い、検出が完了した遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。なお、遺構番号は検出面ごとに1号から順に命名した。掘り下げの終了した遺構は写真と測量図を作成し、記録を行った。すべての遺構の掘り下げと記録が終了した後、重機を使用して第II検出面までの掘り下げを行った。その後、第IV検出面まで同様の手順を繰り返した。なお、発掘調査終了後すぐに建設工事に着手する予定であったため、埋め戻しは行わず、発掘調査の現場における工程を終了した。

### 3 測量・写真記録

遺構測量に係る基準は国家座標(世界測地系・第8系・東北太平洋沖地震後の補正值)を用いた。調査地周辺にある街区多角点を基に調査地内に基準点を設置し、これを基に3mグリッドを設定した。測量基準点はX=25975.000、Y=-48050.000をNS0、EW0とした。平面図は簡易遣り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則とし、詳細図が必要なものは1/10で作成した。写真は発掘調査の各調査段階と遺構等の遺物出土状況および完掘状況を35mm一眼レフカメラ(リバーサル、白黒フィルム)とデジタルカメラで撮影した。

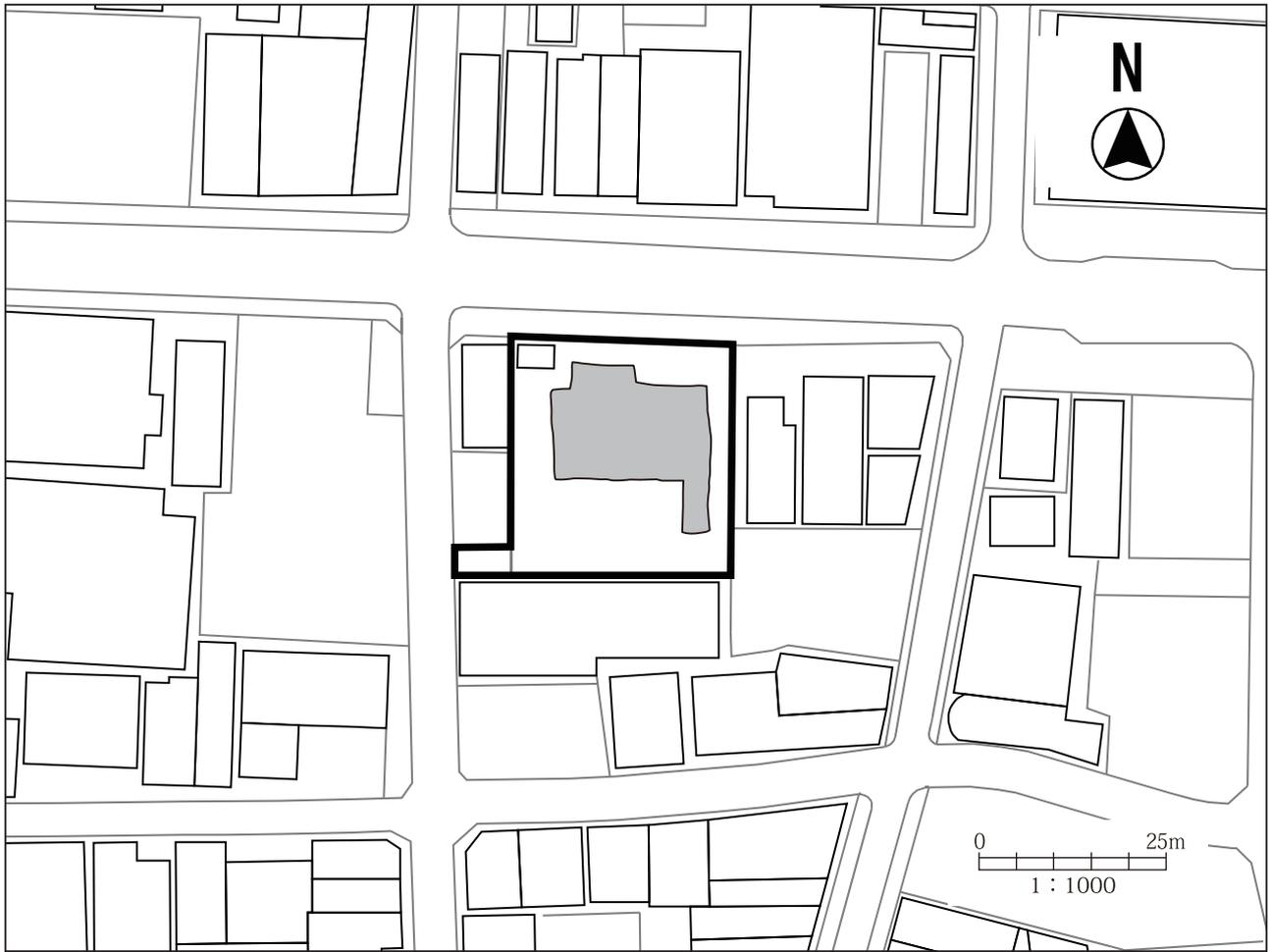
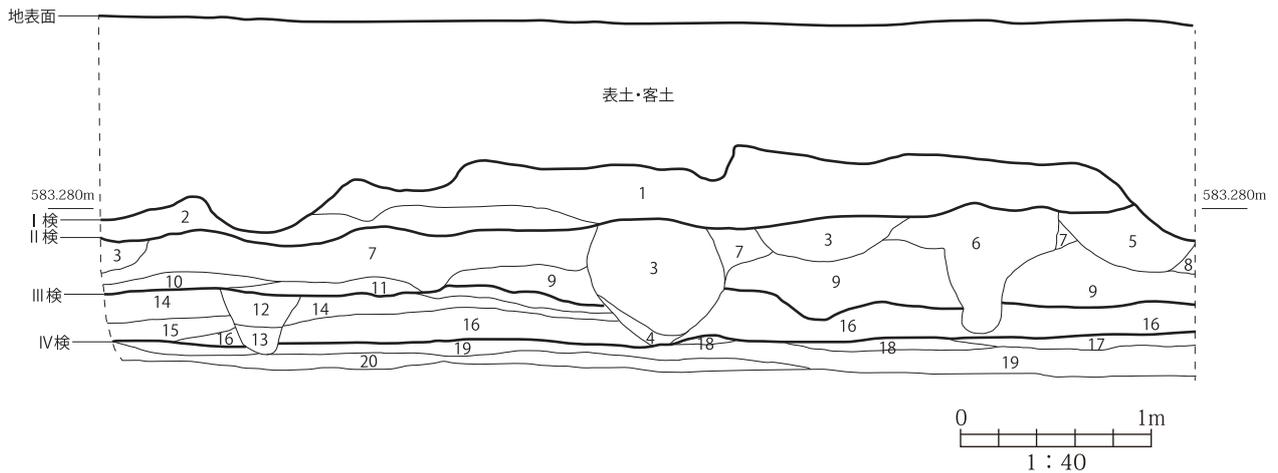


図5 事業対象地と調査区の範囲 (S=1/1,000)

東壁断面図



- |   |   |
|---|---|
| 1: 10YR4/2 灰黄褐シルト (鉄分多、炭化物中、φ ~20cm 礫中)     | 11: 10YR3/2 黒褐砂質シルト (黄色土粒中、φ ~10cm 礫中、炭化物少) |
| 2: 火災層 (焼土塊多、炭化物多)                          | 12: 10YR2/2 黒褐シルト (φ ~5cm 礫中)               |
| 3: 10YR4/3 にぶい黄褐シルト (鉄分多、φ ~20cm 礫多、炭化物中)   | 13: 10YR2/3 黒褐粘質シルト                         |
| 4: 10YR4/1 褐灰粘質シルト (鉄分中、炭化物少、φ ~10cm 礫少)    | 14: 10YR2/1 黒粘質シルト                          |
| 5: 10YR4/3 にぶい黄褐シルト (鉄分多、φ ~20cm 礫多、炭化物中)   | 15: 10YR4/2 灰黄褐粘質シルト                        |
| 6: 10YR4/3 にぶい黄褐シルト (鉄分多、φ ~20cm 礫多、炭化物中)   | 16: 10YR4/1 褐灰粘質シルト (鉄分中、炭化物少、φ ~10cm 礫少)   |
| 7: 10YR3/3 暗褐シルト (黄色土粒中、鉄分中、炭化物少、φ ~5cm 礫少) | 17: 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト (細砂混じる)                |
| 8: 10YR4/1 褐灰粘質シルト (鉄分中、炭化物少、φ ~10cm 礫少)    | 18: 2.5Y4/2 暗灰黄粘質シルト (植物片中)                 |
| 9: 10YR3/2 黒褐シルト (黄色土粒中、φ ~10cm 礫中、炭化物少)    | 19: 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト (細砂混じる)                |
| 10: 10YR3/2 黒褐粘質シルト (黄色土粒中、φ ~10cm 礫中、炭化物少) | 20: 2.5Y4/2 暗灰黄粘質シルト (植物片中)                 |

図6 土層断面図

## 第3節 遺構

今回の調査では119の遺構を検出し、遺構番号を付した。鍛冶炉跡と溝状遺構以外は、規模の大小にかかわらず、単独の穴を土坑とした。しかし、中には整地土中の土質の差を遺構として認定した可能性のある遺構があると考えられる。本書では現場段階で欠番とした遺構以外はすべて全体図に掲載した。

### 1 第Ⅰ検出面

調査区北半分程が焼土塊と炭化物が多量に混じった土で覆われており、周辺での発掘調査成果を鑑みて、火災層と判断した。Ⅱ検の建物があったと想定できる範囲の直上に広がっていたことやⅡ検の帰属時期と近いことなどから、当該面はⅡ検段階に起きた火災で堆積したものとする。火災層は、人力で掘り下げをし、遺物の回収を行った。Ⅰ検ではほかに、3基の鍛冶炉跡が検出されたが、堆積状況から火災層が形成された後の遺構で、出土遺物から近代に帰属すると考えられる。

#### (1) 火災層

厚い箇所では、40cm程火災層が堆積していた。出土遺物は、18世紀中頃から19世紀中頃の陶磁器を中心に数多く認められ、また、まとめて出土する状況が複数箇所で見られた。火災層の形成時期は、出土陶磁器の中に年号が刻印されているもの(図15-75)があり、安政6年以降に起きた火災であることがわかる。

#### (2) 鍛冶炉跡

3基が切り合う状況で検出された。いずれも炉跡の火床部分が検出されたのみで、切り合い関係は不明瞭であった。火床の中心部と考えられる硬化や白色化した部分が3カ所で確認できたため、3基の炉跡が存在すると推定した。絵図等から当地は近世をとおして鍛冶職人の町屋と推定され、この3基の鍛冶炉跡はその時々により作り替えられた形跡と言える。

**鍛冶炉1** 鍛冶炉2・3よりも若干高い位置にその火床面が検出され、火床面脇に拳大程に割った礫が並べられてあった。

**鍛冶炉2** 鍛冶炉3の西脇に、90度角度を変えて位置している。東端部に直径40cm程の掘り込みがみられ、その埋土は溶融物が付着し硬化した粗砂であった。掘り込みから西側は、煉瓦状に割った角礫が敷き詰められていた。

**鍛冶炉3** 3基中一番古い鍛冶炉跡である。北側は調査区外に延びており、全形がうかがえないが、残存部だけでも、長軸336cm、短軸80～104cmと長細い形状をしているため、刀のような長い形状の金属製品を鋳造していた可能性がある。鍛冶炉1・2と同様にその火床面脇には角礫が配置されている。

### 2 第Ⅱ検出面

土坑を43基検出した。そのうち9基が南北方向に一直線に並ぶため、特に土坑列として扱う。出土遺物から、当該面は18世紀中頃から19世紀中頃の生活面と考えられる。

#### (1) 土坑

**土3・4・35・52** いずれも覆土は浅く、礫が投げ込まれた土坑である。

**土8・10・11・14** いずれも柱穴痕と考えられる土坑で、調査区の東部に集中して検出された。土10・11・14は、柱材が残っており、その柱材を固定するために礫が充填されていた。土8は、柱材は残っていなかったが、土層断面から柱穴痕と判断される。

**土56** 合計72kg以上の大量の鉄滓が出土した土坑である。精錬工程で産出した鉄滓を廃棄したゴミ穴と考えられる。

## (2) 土坑列

調査区中央やや西寄り、9基の土坑(土38～46)が南北方向に並んで検出された。各土坑の間隔に規則性は見られず、掘り込まれた深さもばらつきがあった。いくつかの土坑の覆土には焼土塊や炭化物が多く混じるものもあった。南北に並んで長く検出されたことから、屋敷境や敷地内の空間を仕切るための遺構と推定される。

## 3 第Ⅲ検出面

溝状遺構1条と土坑54基を検出した。Ⅱ検で確認されたような屋敷境にかかるような遺構は認められなかった。当該面の帰属時期は、出土陶磁器の製作年代から、18世紀後半から19世紀前半と、17世紀前半から中頃の2時期が考えられる。

### (1) 溝状遺構

今回の調査で検出された唯一の溝状遺構である。土27・29に切られる。その規模は幅約50cm、深さ約10cmで、南北方向に延びる。

### (2) 土坑

土7 北半分程度が調査区外に続くが、残存部での直径は200cm以上で、深さも74cmに達する大形の廃棄土坑である。出土遺物は、羽口や砥石等が見つかっており、鍛冶に使用されたと考えられる遺物が多い。

土12 長さ25.1cm、幅9.6cm、厚さ17.2cm程の短い角材のような木材が2つ平行するように据えられていた。木材の間や周辺には礫が詰められていた。何らかの基礎と考えられるが、詳細は不明である。

土27・47・74・77 木桶が埋設された土坑であり、いずれも調査区南半で検出された。土27は、比較的遺存状況が良く、側板や底板が認められた。桶の中からは、磁器製の碗や皿、御神酒徳利や、碁石、寛永通宝等が出土した。土47は、木桶の底に近い方の箍のみが検出された。土74は、土77に切られ平面形のプランは明瞭にとらえきれず、底板が部分的に残存していただけであった。土77は、北半分では掘方が浅くなり、平面形のプランが不明瞭であった。木桶は側板の一部と底板が残っていた。

土43・61 いずれも礫が詰められた土坑である。土43は、直径70cm、深さ21cmの中に大量の礫が投げ入れられていた。土61は、土坑底面から検出面の間に礫が直線状に重なるように検出された。

土50 検出時は、長楕円形のプランをした土坑2基が切り合うと考えたが、土層観察の結果、切り合いが生じないと判断され、1つの土坑として扱った。埋土の状況から廃棄土坑と考えられ、2カ所で掘った穴が繋がったと推定される。

土42・54・56 それぞれ鉄滓が大量に廃棄された土坑である。土54は直径180cm、深さ42cmの比較的大形の土坑で、Ⅲ検で最も多くの鉄滓が出土し、その量は60kgを超える。

## 4 Ⅳ検出面

出土遺物が無いため、当該面の帰属時期の特定は難しいが、自然堆積層上に遺構が掘り込まれていることや、遺構密度が薄いこと、周辺遺跡の成果から、戦国時代頃の生活面と考えられる。Ⅲ検とⅣ検の間は、整地層が1～3層あるのみで生活面は認められず、大きな時期の隔たりが存在する。

合計で18基の土坑が検出され、そのうち16基が調査区西半分で検出されている。

土4 柱穴と考えられ、穴の底には礎盤と考えられる扁平な礫が据えられていた。

土11 深さ30cm程の穴の中央に、柱材と考えられる幅約10cmの角材が打ち込まれていた。

表 2 鍛冶炉跡一覧表

No.	検出面	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
			長軸	短軸	深さ	本址より旧	本址より新	
1	I	長楕円形か	(108)	(36)	14	鍛冶炉 2・3		
2	I	不明	(144)	(92)	20	鍛冶炉 3	鍛冶炉 1	
3	I	長楕円形か	(336)	104	22		鍛冶炉 1・2	

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

表 3 溝状遺構一覧表

No.	検出面	新旧関係		備考
		本址より旧	本址より新	
1	Ⅲ		± 27・± 29	調査区

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

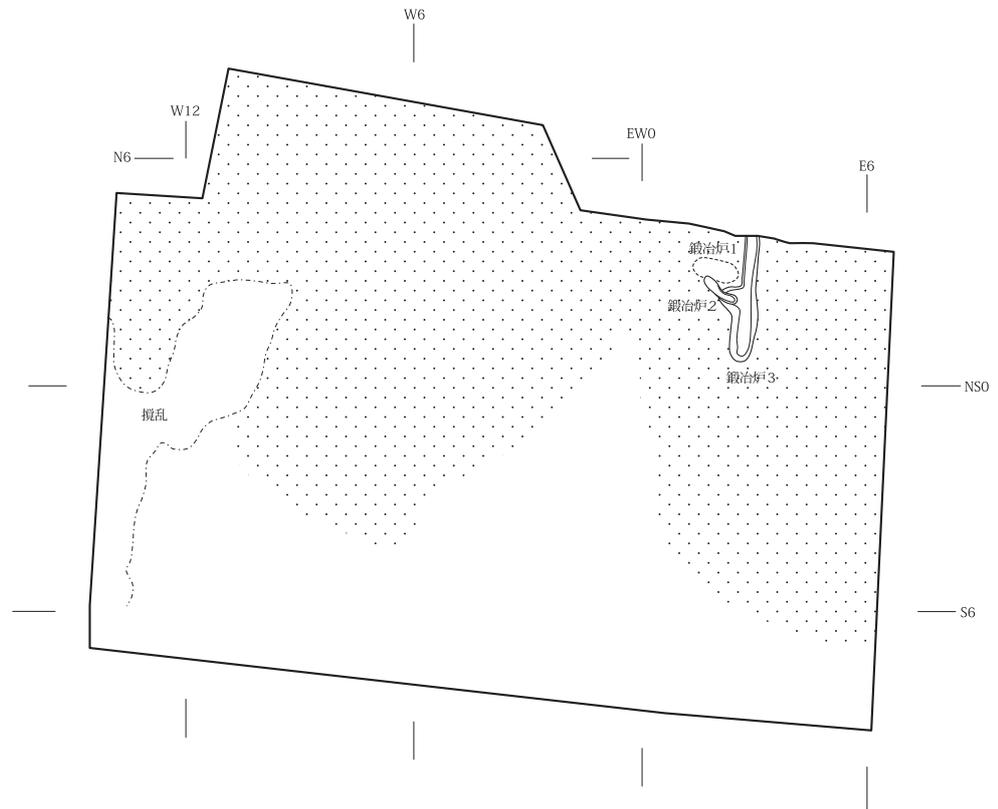
表 4 土坑一覧表

No.	検出面	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
			長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新	
1	Ⅱ	円形	36	32	5			
2	Ⅱ	円形	30	28	8	± 3		
3	Ⅱ	隅丸方形	92	82	25		± 2	
4	Ⅱ	円形	44	37	20	± 37		
6	Ⅱ	不整形	76	50	9			
7	Ⅱ	円形	38	31	15			
8	Ⅱ	楕円形	88	68	50			柱穴か
10	Ⅱ	円形	51	46	46			杭
11	Ⅱ	円形	62	54	48			杭
12	Ⅱ	楕円形	60	42	51			
13	Ⅱ	円形	68	68	14			
14	Ⅱ	円形	64	64	54			杭
15	Ⅱ	楕円形	78	50	41			
16	Ⅱ	楕円形	82	(60)	10			
17	Ⅱ	円形	70	70	15	± 39		
20	Ⅱ	円形	25	23	7			
22	Ⅱ	円形	52	42	13			
23	Ⅱ	楕円形	35	26	7			石
24	Ⅱ	楕円形	108	64	20			
25	Ⅱ	楕円形	162	56	21			
26	Ⅱ		(106)	48	26		± 54	
28	Ⅱ	楕円形か	(56)	(30)	11	± 29		調査区
29	Ⅱ	円形か	(60)	(30)	15		± 28	調査区
31	Ⅱ	円形	58	56	8			
32	Ⅱ	楕円形	49	36	5			
33	Ⅱ	楕円形	58	45	10			
35	Ⅱ	円形	53	52	25			
36	Ⅱ	楕円形	(111)	68	20			
37	Ⅱ	円形	(84)	82	21		± 4	
38	Ⅱ					± 39か		土抗列
39	Ⅱ	円形	74	66	14		± 17・38か	土抗列
40	Ⅱ	楕円形	70	50	10			土抗列
41	Ⅱ	円形	(60)	80	17			土抗列
42	Ⅱ	円形	68	64	16			土抗列
43	Ⅱ	円形	64	54	17			土抗列
44	Ⅱ	円形	54	50	12			土抗列
45	Ⅱ	楕円形	70	56	18			土抗列
46	Ⅱ	楕円形	84	62	4			土抗列
52	Ⅱ	隅丸方形	78	74	13			
53	Ⅱ	楕円形	76	57	18			攪乱
54	Ⅱ	不整形	170	82	19	± 26		礫多
55	Ⅱ	円形	96	94	16			
56	Ⅱ	楕円形	268	124	32			攪乱
1	Ⅲ	楕円形か	138	(52)	20			調査区
6	Ⅲ	楕円形か	28	(22)	6			調査区
7	Ⅲ	円形か	(212)	(148)	74			調査区
8	Ⅲ	楕円形	82	76	15			
9	Ⅲ	楕円形	88	84	6			
11	Ⅲ	楕円形	36	28	6			
12	Ⅲ	円形	58	56	29			杭

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

No.	検出面	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
			長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新	
13	Ⅲ	円形か	33	(26)	10			調査区
14	Ⅲ	円形	28	26	15			
15	Ⅲ	円形	42	40	12			
16	Ⅲ	円形	54	48	22			
17	Ⅲ	不整形	314	124	17			
18	Ⅲ	円形	40	35	5			
19	Ⅲ	円形	28	24	6			
20	Ⅲ	円形	35	32	4			
22	Ⅲ	楕円形	94	66	7			
23	Ⅲ	円形	36	31	9			
24	Ⅲ	楕円形	130	90	11			
25	Ⅲ	楕円形	52	31	8			
27	Ⅲ	円形	102	98	35	± 28・29・溝 1		桶
28	Ⅲ	円形				± 29	± 27	未掘
29	Ⅲ	楕円形	(150)	(64)	16		溝 1	
30	Ⅲ	円形	36	32	12			桶
32	Ⅲ	楕円形	164	92	15	± 78	Ⅱ 検土 55	
36	Ⅲ	円形	72	66	8			桶
37	Ⅲ	不整形	246	148	28			
39	Ⅲ	楕円形	182	150	22			
42	Ⅲ	円形	30	26	17			
43	Ⅲ	楕円形	70	54	21			
45	Ⅲ	円形	30	30	8			
46	Ⅲ	円形	40	36	15			
47	Ⅲ	円形	122	108	38			桶箍
48	Ⅲ							未掘
49	Ⅲ	不整形	(144)	(144)	24			
50	Ⅲ	不整形	360	83	26			
52	Ⅲ							未掘
54	Ⅲ	楕円形	182	130	42			調査区
55	Ⅲ							未掘
56	Ⅲ	不整形	208	106	22			
58	Ⅲ	円形	36	32	36			
61	Ⅲ	円形	40	34	16			
62	Ⅲ	円形	22	20	5			
65	Ⅲ	円形	28	26	3			
66	Ⅲ	楕円形	44	26	5			
69	Ⅲ	楕円形	124	(52)	15			調査区
70	Ⅲ	円形	32	(22)	10			
72	Ⅲ							
74	Ⅲ	不整形	254	(200)	(48)	± 77		桶
75	Ⅲ	円形	41	36	12			
76	Ⅲ	楕円形	106	70	39			
77	Ⅲ	円形	(80)	(80)	14		± 74	桶
78	Ⅲ	楕円形	148	110	23		± 32	
1	Ⅳ	円形	33	25	8			
2	Ⅳ	円形	20	20	1			
3	Ⅳ	円形	40	32	12			
4	Ⅳ	円形	38	32	5			平石
5	Ⅳ	楕円形	46	32	12			
6	Ⅳ	円形	32	30	7			
7	Ⅳ	円形	30	28	8			
8	Ⅳ	円形	34	31	22			
9	Ⅳ	楕円形	63	48	9			
10	Ⅳ	円形	31	30	11			
11	Ⅳ	楕円形	78	70	30			杭
12	Ⅳ	円形	18	18	10	± 16		
13	Ⅳ	楕円形	74	51	15			
14	Ⅳ	円形	32	24	26			
15	Ⅳ	楕円形	40	(26)	22			
16	Ⅳ	円形	34	28	6		± 12	
18	Ⅳ	円形	(31)	30	24			攪乱
19	Ⅳ	円形	26	22	8			攪乱

I 検



II 検

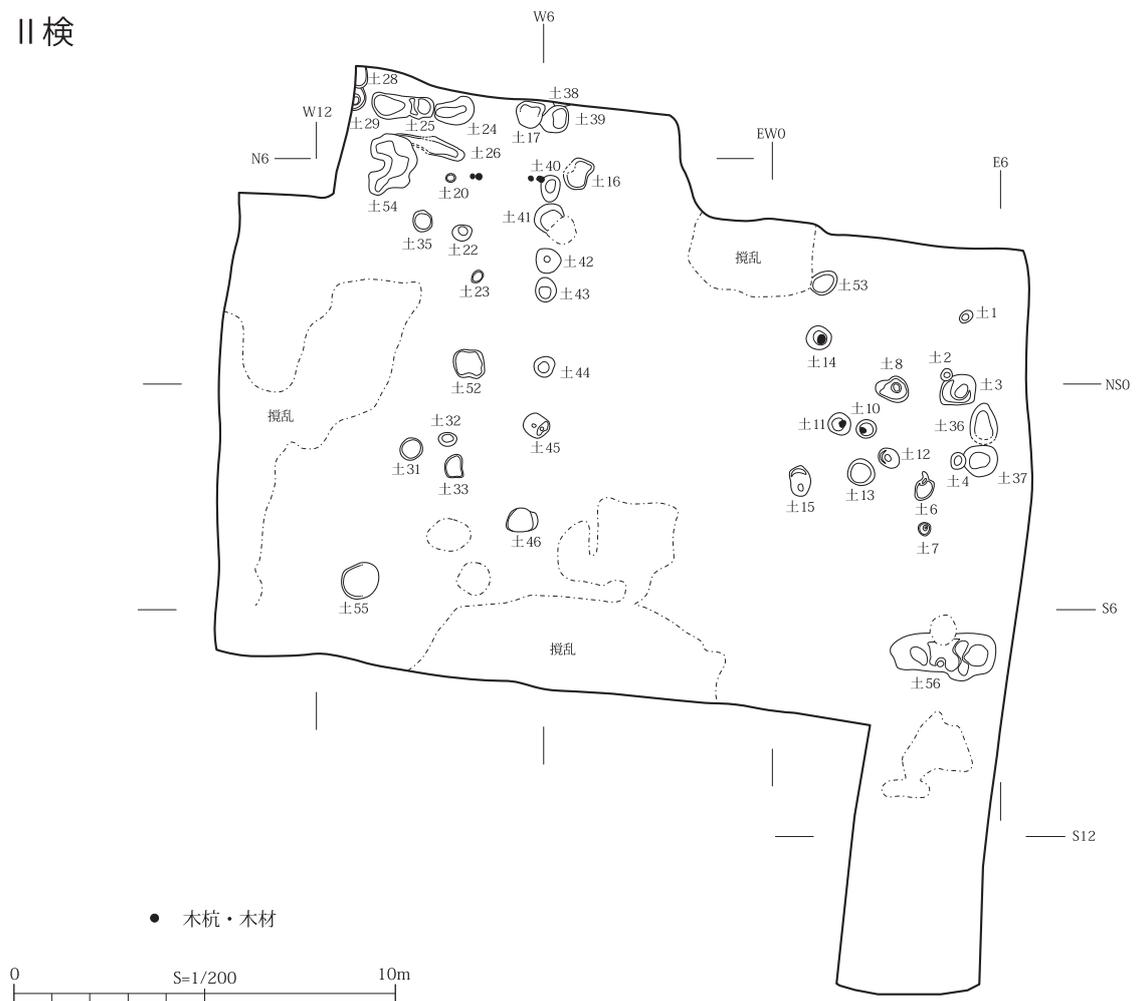
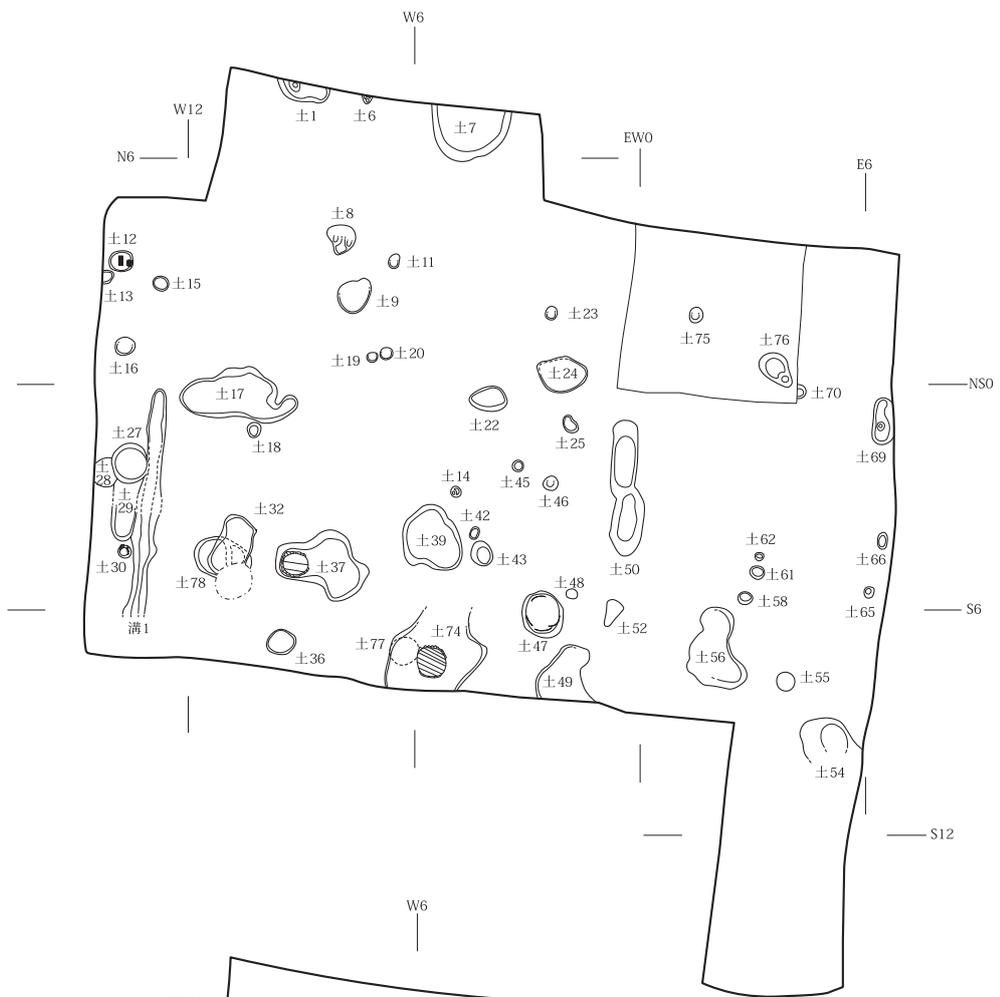
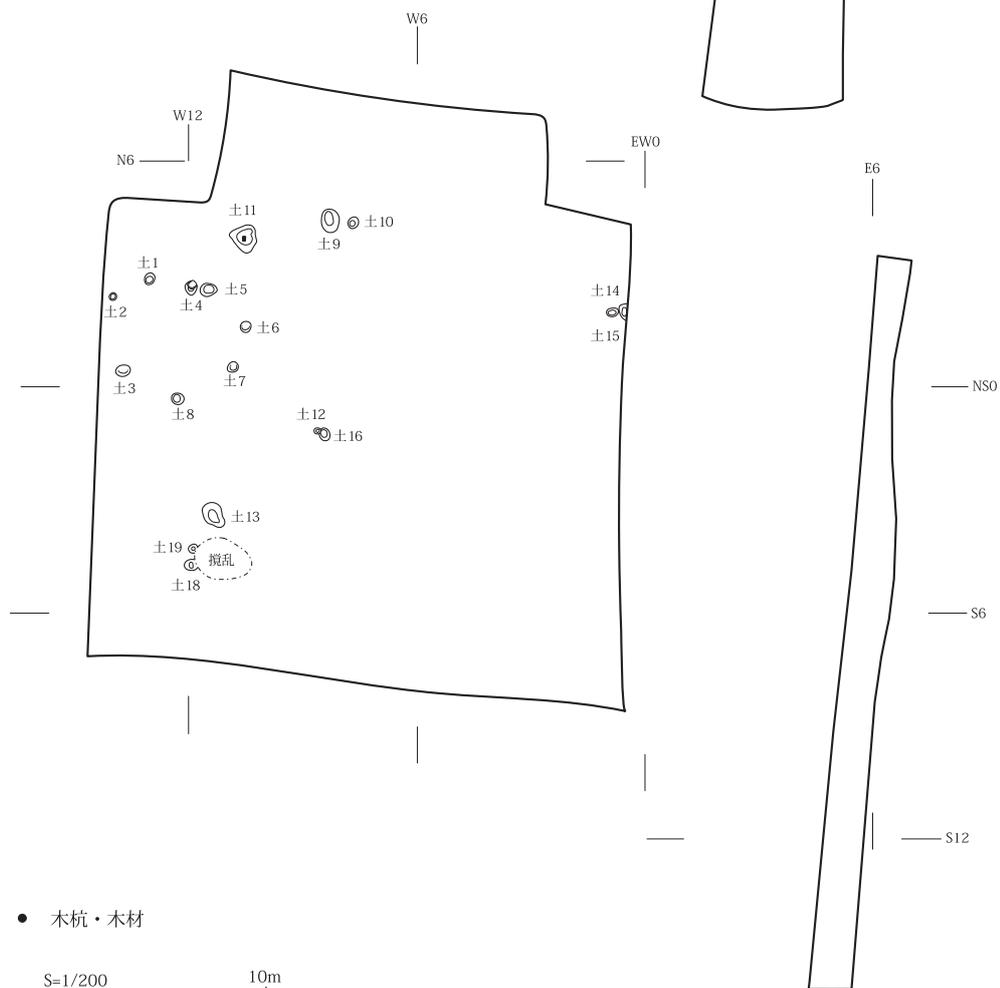


図7 I・II検 全体図

III 検



IV 検



● 木杭・木材

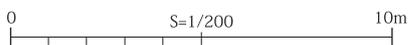
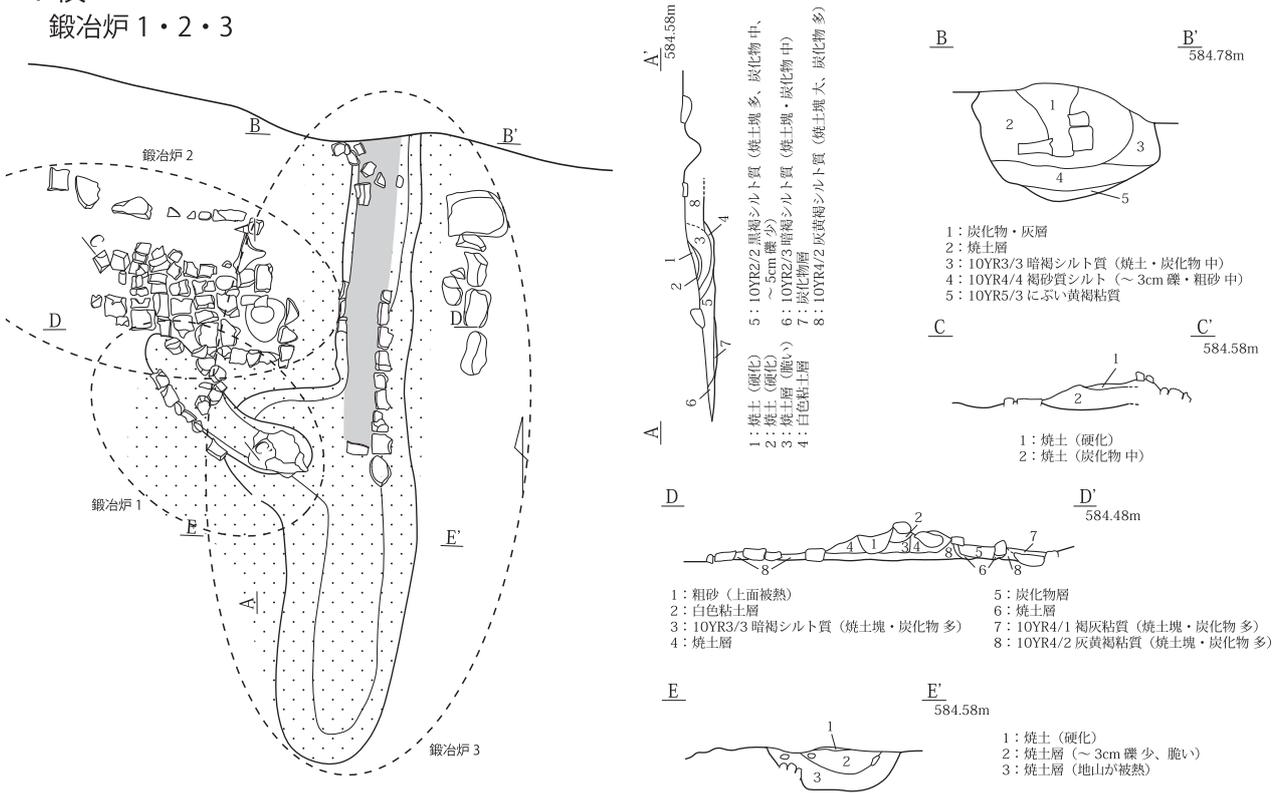


図8 III・IV検 全体図

# I 検

## 鍛冶炉 1・2・3



# II 検

## 土抗列 1

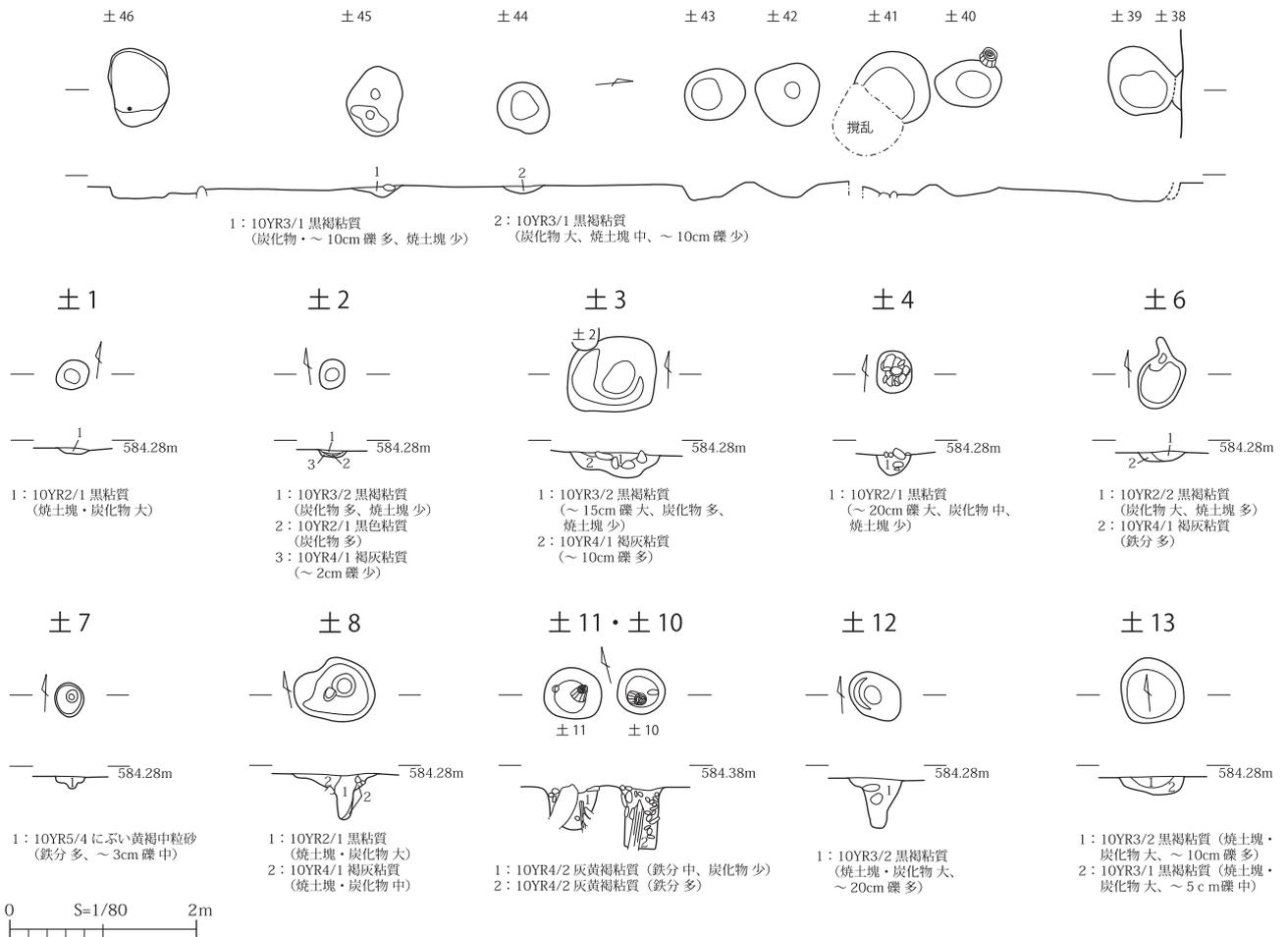


図9 I・II検 遺構図

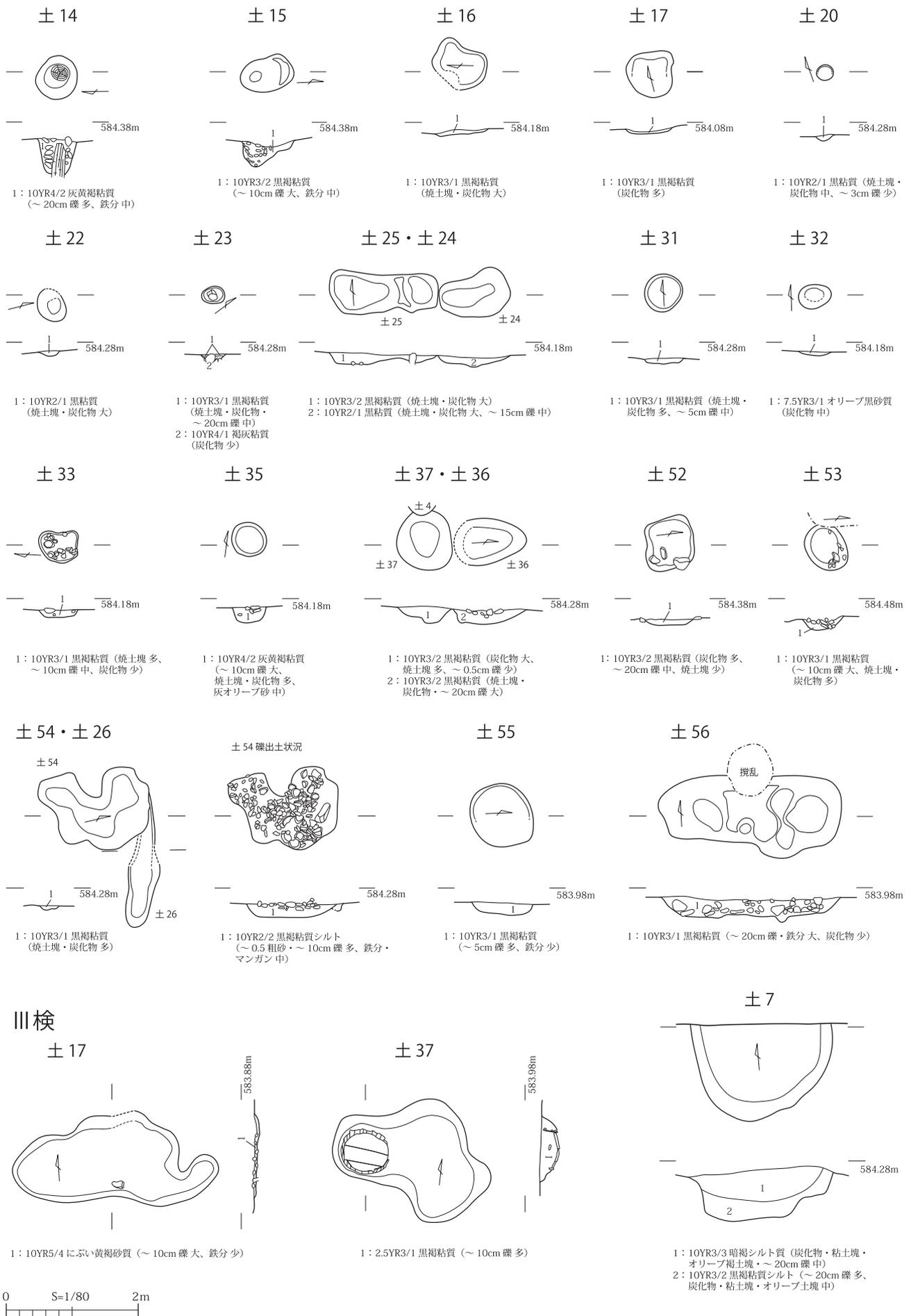


図 10 II・III 検 遺構図

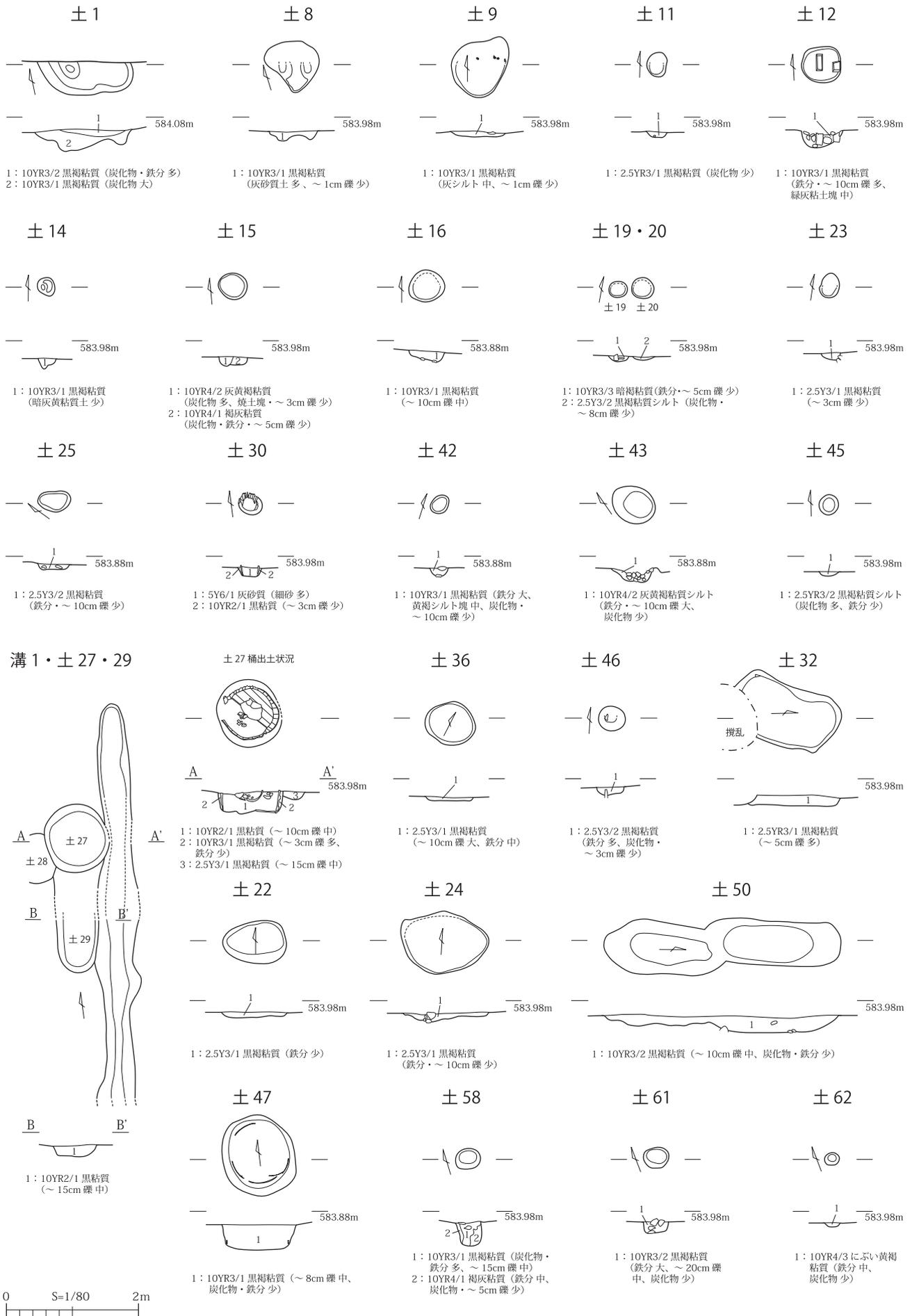
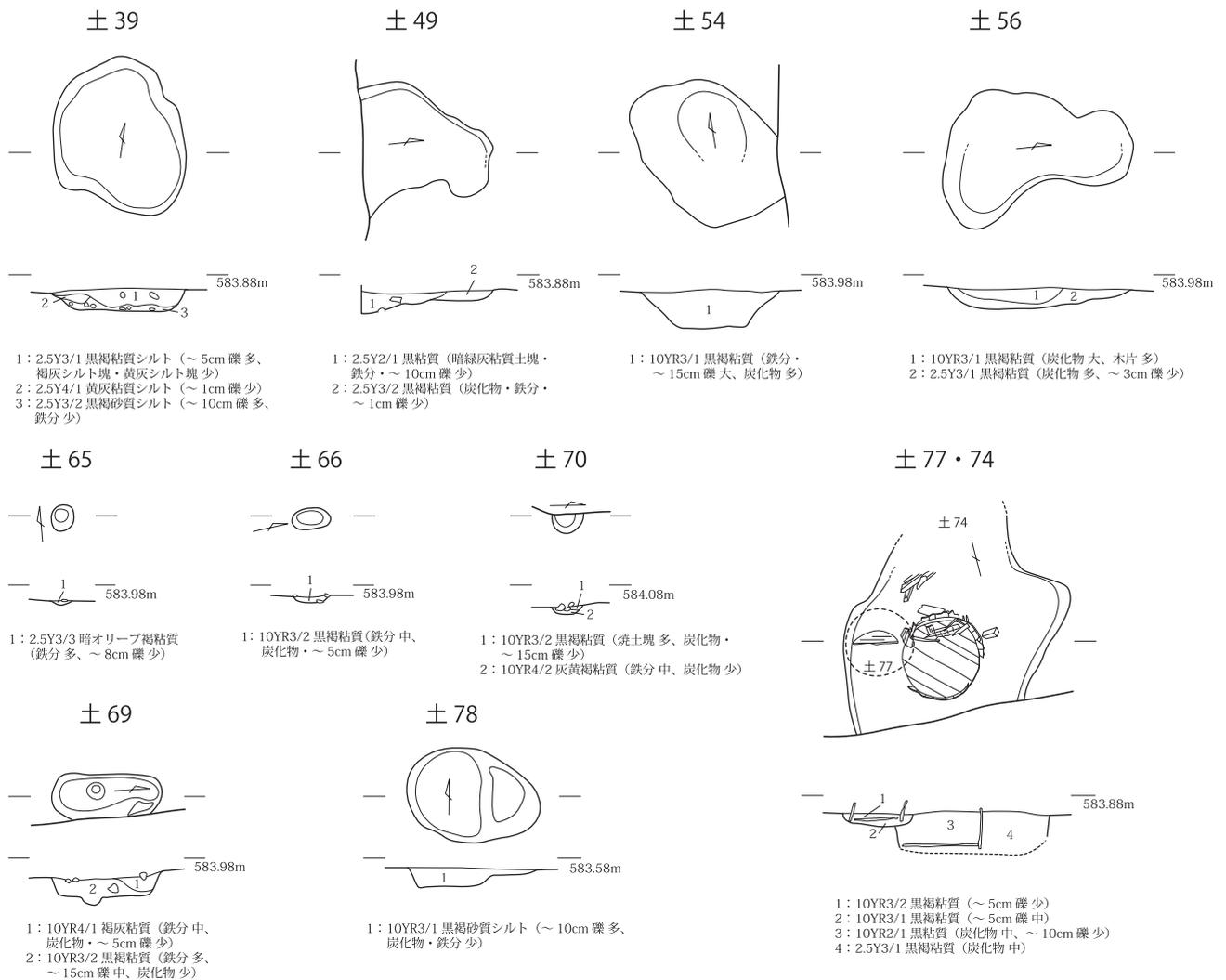


図 11 Ⅲ 検 遺構図



#### IV 検

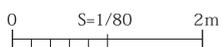
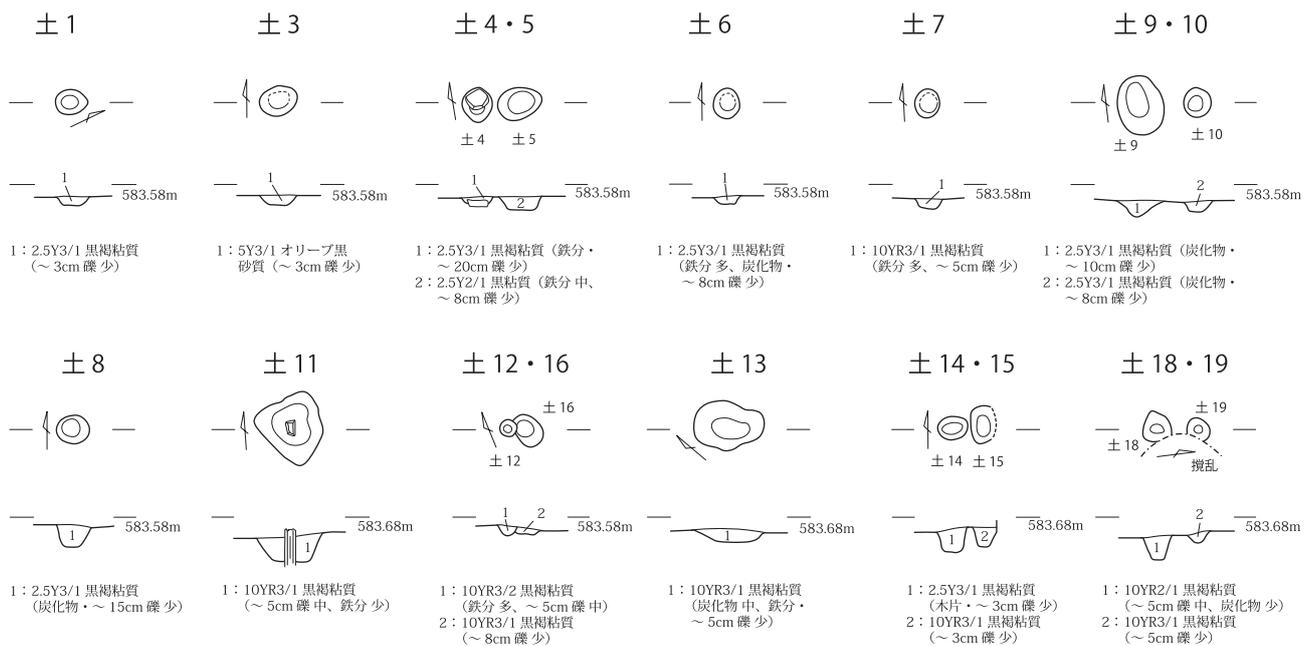


図 12 III・IV 検 遺構図

## 第4節 遺物

### 1 土器・陶磁器（表5、図13～19、写真図版7）

今回の調査では、3層の整地層および各面の遺構から土器・陶磁器が出土した。これらは可能な限り図化し、167点を提示した。種別内訳は、陶器91点、磁器63点、土器12点、瓦質土器1点である。以下、検出面ごとに概要を記述する。

#### 第Ⅰ検出面

Ⅰ検から出土した土器・陶磁器の個体数は、77点である。種別は、磁器・陶器・瓦質土器・土器である。これらの推定産地は、瀬戸・美濃、肥前、在地産である。瀬戸・美濃産が主体となり、49点で全体の63.6%を占める。種別内訳は、陶器31点、磁器が18点である。陶器は碗・皿類が主体で、他に灯明皿・灯明受皿・鉢・播鉢・練鉢・植木鉢などがある。碗・皿類の特徴は、陶胎染付皿（53～55）・螺旋文碗（46）・拳骨茶碗（48）であるため、主体は登窯第8～9小期（18世紀中～19世紀中）の時期と考えられる。

肥前産と推定される資料は18点ある。内訳は、磁器が10点、陶器が8点である。ただし33～36の京焼風肥前陶器は、他とは異なり17世紀中頃～後半の古い年代観（製作時期）に位置付けられる。

磁器では、蛇ノ目凹型高台の鉢（20）や広東碗（4）など、肥前V期18世紀末～19世紀中頃に比定される。

その他の土器・瓦質土器では産地の推定が難しいが、75は風也焼（在地産）涼炉の底部とみられる。底裏に「安政六稔未六月下旬製之」の刻書が確認できる。安政6年（1859）という製作年が記された貴重な資料である。胎土・類似資料との比較（土居尻第2次調査など）から、風也焼の可能性が高いと判断した。77は、手焙りと考えられる。外面はケズリのちミガキ調整され、体部中央やや上位に、大きな円孔があげられている。内面調整は、粗い指ナデが施されている。

#### 第Ⅱ検出面

Ⅱ検出土資料は12点を提示した。内訳は、磁器5点、陶器6点、土師器1点である。磁器は、81・82・86・87が肥前産の染付碗である。81は二重網目文の碗である。いずれも肥前編年V期（18世紀中頃～19世紀中）に比定されるものである。

陶器はすべて瀬戸・美濃産である。85は内面見込部に摺絵がみられる。88は、鉄釉と灰釉を掛け分けたもので、灰釉部分に呉須絵が施されている。89は天目碗の口縁部の破片である。

資料点数が少ないが、18世紀中頃から19世紀初頭の年代が推定できる。

#### 第Ⅲ検出面

60点を図化提示した。内訳は、磁器19点、陶器39点、土器2点である。Ⅲ検の土器・陶磁器群の資料をみると、大きく2時期（製作年代）に分けられる。

第1群は、18世紀後半～19世紀前半に比定されるもので、瀬戸産磁器染付碗（94・95）が確認できる。陶器では、瀬戸・美濃産の拳骨茶碗（93）、銅緑釉が掛かる植木鉢（134・135）や火入れ（137）などがある。

第2群は、17世紀前～中頃に比定される一群である。唐津向付（112）、唐津刷毛目碗（126）、織部向付（113）、長石釉皿（117・129）、笠原鉢（136）、肥前産捻子花文染付皿（142）などがある。

このほか、14世紀代と考えられる古瀬戸卸皿（102）や、幕末～明治期の風也焼の十能（166・把手部分に「ふうや」と刻印あり）がある。

表5 土器・陶磁器一覧表

No.	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
						口径	底径	器高					
1	I	I 検 炉 1 ~ 3-1	鍛冶炉・攪乱	磁器	蓋	10.6			外面体部青磁、白色釉で鳳凰、外面天井部呉須文字、天井部内面呉須草文	白	透明釉	19c 後半	瀬戸
2	I	I 検 炉 2-1	鍛冶炉 2	土器	円盤状土製品	(23.4)			全体的に被熱、上面釉葉状付着、中心部に径 2cm の円孔	暗褐	—	不明	不明
3	I	I 検 炉 3-1	鍛冶炉 3	土器	円盤状土製品	(23.6)			全面ヘラケズリ調整	暗褐	—	不明	不明
4	I	I 検 検 -1	検出面	磁器	碗 (広東碗)	(11.6)	5.2	6.1	内面：圏線・見込部に文様、外面：圏線	白	透明釉	19c	瀬戸
5	I	I 検 検 -2	検出面	磁器	湯呑碗	(7.2)	(3.8)	6.3	口縁外面に雷文	白	透明釉	18c 後半	肥前
6	I	I 検 検 -3	検出面	磁器	碗		(4.0)		内面：竹文 (松竹梅か)、外面：氷裂文、底裏にも文様あり	白	透明釉	19c 前半	瀬戸
7	I	I 検 検 -4	検出面	磁器	湯呑碗			3.2	内面見込部および外面文様不明	白	透明釉	19c	瀬戸
8	I	I 検 検 -5	検出面	磁器	碗				内面見込鳥文 (線刻し、濃み)、外面腰部線刻 (線刻の上に濃み)	白	透明釉	19 c	不明
9	I	I 検 検 -6	検出面	磁器	碗 (端反碗)	10.2			口縁内面に雷文、外面：銀杏・花文、被熱痕あり	白	透明釉	19c 前半	瀬戸
10	I	I 検 検 -7	検出面	磁器	皿	13.6	7.0	3.0	口縁、内面：簡略した山水画、底裏：蛇ノ目凹型高台、形打ち成形	白	透明釉	19c 前半	瀬戸
11	I	I 検 検 -8	検出面	磁器	皿	(13.6)	(7.6)	3.8	色絵 (赤・青・緑)、内面：青海波文	白	透明釉	18c か	不明
12	I	I 検 検 -9	検出面	磁器	灯明皿	7.6	2.4	1.9	口縁部の一部を打ち欠き、灯芯を置く場所としている、一部煤付着	白	透明釉	19c	瀬戸
13	I	I 検 検 -10	検出面	磁器	皿	(8.6)	(6.2)	(2.9)	高台四角形、底部付け高台、型打ち製品、内面見込部に陽刻の花文	白	透明釉	19 c	瀬戸
14	I	I 検 検 -11	検出面	磁器	皿	(13.8)	(6.2)	(2.9)	型打ち成形、輪花	灰	透明釉	18c 後半	肥前
15	I	I 検 検 -12	検出面	磁器	皿	(10.4)	(6.8)	(1.8)	印判手	白	透明釉	19c 後半	瀬戸
16	I	I 検 検 -13	検出面	磁器	皿	(10.6)	6.0	2.2	口鏝、型打ち成形	白	透明釉	19c 前半	瀬戸
17	I	I 検 検 -14	検出面	磁器	皿	(14.0)			焼き継ぎ痕あり、口鏝、型打ち成形、菊皿	白	透明釉	18c 後半	肥前
18	I	I 検 検 -15	検出面	磁器	灯明受皿	(9.9)	3.0	1.7	底部露出、内面立ち上がり部の一部に切込み	白	透明釉	19c	瀬戸
19	I	I 検 検 -16	検出面	磁器	鉢	(11.0)	4.6	6.0	色絵 (赤・黄など)、口縁内面に楡垣文 (赤絵)、内面見込部に山水図	白	上絵付	19c	瀬戸
20	I	I 検 検 -17	検出面	磁器	鉢	(15.0)	(8.4)	(5.1)	内面染付、外面青磁、底部蛇ノ目凹型高台	灰	透明・青磁	18c 後半	肥前
21	I	I 検 検 -18	検出面	磁器	鉢	(12.2)	6.0	5.7	内面見込部に花文・建物絵、外面菱形文	白	透明釉	19c	瀬戸
22	I	I 検 検 -19	検出面	磁器	酒環	4.3	2.0	2.9	外面一部に簡略化された帆掛け船絵	白	透明釉	18c 後半	肥前
23	I	I 検 検 -20	検出面	磁器	酒環	(5.1)	(1.8)	2.5	外面：芙蓉手、内面無文	白	透明釉	18c 後半	肥前
24	I	I 検 検 -21	検出面	磁器	酒環	(7.1)	2.6	3.7	被熱痕あり	白	透明釉	19c	瀬戸
25	I	I 検 検 -22	検出面	磁器	御神酒徳利	(1.8)	4.0	12.0	外面全面瑠璃釉、高台に煤付着	白	透明釉・瑠璃釉	19c	瀬戸
26	I	I 検 検 -23	検出面	磁器	紅猪口	(4.6)	1.2	1.0	形打ち成形、口縁端部から内面に透明釉	白	透明釉	18c 後半	肥前
27	I	I 検 検 -24	検出面	磁器	戸車	外径 (3.4)	中心孔径 (1.0)	厚さ 0.7	外面のみ施釉	白	透明釉	18c 後半	肥前
28	I	I 検 検 -25	検出面	磁器	皿		(6.6)		内面見込部に陰刻文	灰	青磁	18c	肥前
29	I	I 検 検 -26	検出面	磁器	瓶類		(5.4)		内面露胎	灰	青磁	18c	肥前
30	I	I 検 検 -27	検出面	陶器	碗	(7.2)	(3.0)	(4.7)	天体的に被熱	灰	灰釉	18c	肥前
31	I	I 検 検 -28	検出面	陶器	碗 (端反り碗)	(9.5)	(3.2)	5.0	口縁端部の一部に呉須	黄白	透明釉	19c	瀬戸
32	I	I 検 検 -29	検出面	陶器	碗	(9.2)	4.0	(3.7)	口縁端部のみ施釉、削り出し高台、歪みあり	黄白	灰釉	19c	瀬戸
33	I	I 検 検 -30	検出面	陶器	碗 (京焼風肥前陶器)	(12.8)			底部高台裏に刻印あり	黄白	透明	17c 中	肥前
34	I	I 検 検 -31	検出面	陶器	碗 (京焼風肥前陶器)		4.6		底部中央付近に刻印あり	黄白	透明	17c 中	肥前
35	I	I 検 検 -32	検出面	陶器	碗 (京焼風肥前陶器)		4.6		底部中央付近に浅い円刻あり、円刻部分に「清水」刻印あり、内面見込に錆絵	黄白	透明	17c 中	肥前
36	I	I 検 検 -33	検出面	陶器	碗 (京焼風肥前陶器)		4.6		底部中央付近に浅い円刻あり、円刻部分に「清水」刻印あり、内面見込に錆絵、被熱痕あり	黄白	透明	17c 中	肥前
37	I	I 検 検 -34	検出面	陶器	碗	(10.0)			口縁部残存僅かで輪花単位不明、色気 (赤・緑)	黄白	透明・色絵	18c	瀬戸・美濃
38	I	I 検 検 -35	検出面	陶器	碗	(10.2)	4.0	6.4	高台端部のみ露胎	黄白	灰釉	18c	瀬戸・美濃

No.	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
						口径	底径	器高					
39	I	I 検 検 -36	検出面	陶器	碗	10.3	4.1	6.9	陶胎染付(呉須)、絵柄は滲んでおり不明瞭	白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
40	I	I 検 検 -37	検出面	陶器	碗	10.3	3.6	6.9	高台端部露胎	白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
41	I	I 検 検 -38	検出面	陶器	碗	(11.4)	5.8	7.1	内面見込部に目跡3カ所、腰部から底部まで回転ヘラ削り痕明瞭	青白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
42	I	I 検 検 -39	検出面	陶器	碗	(15.4)			被熱、染付の絵柄黒色に変色	白	透明	18c	肥前
43	I	I 検 検 -40	検出面	陶器	碗	(7.6)			内面見込部に目跡3カ所、被熱して変色、見込部に鉄絵	灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
44	I	I 検 検 -41	検出面	陶器	碗	13.4	4.4	5.2	外面に煤付着、断面に漆継ぎ痕あり、内面目跡2カ所残存、底裏に刻印あり	淡灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
45	I	I 検 検 -42	検出面	陶器	碗		5.9		高台端部露胎	灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
46	I	I 検 検 -43	検出面	陶器	螺旋文碗	10.0	4.2	6.7	被熱痕あり	灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
47	I	I 検 検 -44	検出面	陶器	碗		5.6		高台部に煤付着	黄白	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
48	I	I 検 検 -45	検出面	陶器	拳骨茶碗		4.3		内面見込部に目跡3カ所	淡灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
49	I	I 検 検 -46	検出面	陶器	薬味入れ	6.2				淡灰	鉄釉	18c か	瀬戸・美濃
50	I	I 検 検 -47	検出面	陶器	皿	12.2	4.8	3.5	見込部蛇の目剥ぎ、高台露胎、内野山北窯か	白灰	銅緑・灰釉	17c 後半	肥前
51	I	I 検 検 -48	検出面	陶器	皿	(13.6)	5.4	3.1	見込部中央に呉須刷絵(型紙刷)	灰	灰釉・呉須	18c	瀬戸・美濃
52	I	I 検 検 -49	検出面	陶器	皿	(13.3)	7.0	2.7	見込部中央に鉄釉刷絵、襷皿	白	長石釉	17c 後半	瀬戸・美濃
53	I	I 検 検 -50	検出面	陶器	皿	(13.2)	(7.4)	2.5	陶胎染付(呉須花文)	灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
54	I	I 検 検 -51	検出面	陶器	皿	(13.2)	(7.4)	2.9	陶胎染付(呉須花文)	灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
55	I	I 検 検 -52	検出面	陶器	皿		7.4		陶胎染付(呉須花文)	灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
56	I	I 検 検 -53	検出面	陶器	木瓜型皿	14.6	5.4	3.2	御深井皿、型打ち成形、魚文	淡黄白	御深井釉	17c 中	美濃
57	I	I 検 検 -54	検出面	陶器	灯明皿	(9.7)			外面煤付着、外面回転ヘラケズリ明瞭	淡黄白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
58	I	I 検 検 -55	検出面	陶器	灯明受皿	(6.4)			外面回転ヘラケズリ明瞭	淡黄白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
59	I	I 検 検 -56	検出面	陶器	灯明受皿	(10.5)			一部穿孔あり	黄白	錆釉	18c	瀬戸・美濃
60	I	I 検 検 -57	検出面	陶器	灯明受皿	(9.8)			一部穿孔あり	灰	長石釉	19c	瀬戸・美濃
61	I	I 検 検 -58	検出面	陶器	皿	(22.0)	(8.4)	5.1	内面見込目跡あり	灰	錆・銅緑	18c	肥前
62	I	I 検 検 -59	検出面	陶器	仏飯器				陶胎染付、漆継ぎ痕あり	灰	呉須・灰釉	18c	瀬戸・美濃
63	I	I 検 検 -60	検出面	陶器	ままごと道具(紅猪口)	2.0	1.0	0.5	見込部長石釉と銅緑釉の掛け分け、型打整形	褐	長石・銅緑釉	不明	不明
64	I	I 検 検 -61	検出面	陶器	鉢		(9.6)		底裏に目跡あり、被熱痕あり	灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
65	I	I 検 検 -62	検出面	陶器	擂鉢	(34.8)				淡黄白	錆釉	18c	瀬戸・美濃
66	I	I 検 検 -63	検出面	陶器	擂鉢		(10.0)			淡黄白	錆釉	18c	瀬戸・美濃
67	I	I 検 検 -64	検出面	陶器	植木鉢	(24.6)				灰～褐	長石釉	18c	瀬戸・美濃
68	I	I 検 検 -65	検出面	陶器	練鉢	(26.6)	(14.8)	12.9	見込部に目跡あり、内外面煤付着	淡黄白	灰釉・銅緑釉	19c	瀬戸・美濃
69	I	I 検 検 -66	検出面	陶器	練鉢	(29.8)	(16.0)	(13.7)		黄白	灰釉	19c	瀬戸・美濃
70	I	I 検 検 -67	検出面	磁器	皿	(9.4)	(5.2)	(2.5)	形打ち成形、内面見込部に陰刻文(女性の姿)	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
71	I	I 検 検 -68	検出面	磁器	仏飯器		3.4			白	透明	19c	瀬戸・美濃
72	I	I 検 検 -69	検出面	磁器	植木鉢	(15.6)	(8.4)	(11.2)	脚部3足か、底部穿孔	白	透明	19c	瀬戸・美濃
73	I	I 検 検 -70	検出面	土器	皿	8.6	5.8	2.1	内面体部立ち上がり部に強いロクロナデ、底部回転糸切痕	褐	—	19c	在地産
74	I	I 検 検 -71	検出面	土器	目皿	(10.0)	(1.1)		円形の小孔多数、円盤状	暗褐	—	不明	不明
75	I	I 検 検 -72	検出面	土器	涼炉		16.2		体部側面に円孔1カ所、底裏に刻書「安政六稔未六月下旬製之」	暗灰	—	不明	在地
76	I	I 検 検 -73	検出面	土器	焔炉風の風口	長辺 22.2			上面に近い箇所に円孔、その下部に方形の窓を有する箱形のもの、焔炉類の部品	灰	—	不明	不明
77	I	I 検 検 -74	検出面	土器	手焙り		(7.4)		外面ケズリのちミガキ調整、体部中央やや上位に円孔、内面全面に指ナデ	褐	—	18c 後半以降	不明

No.	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
						口径	底径	器高					
78	I・II	I 検 検 -75	I 検 検 出 面・II 検 土 26	土器	火鉢				長銅の火鉢、火消し壺の可能性もあり、体部上部に径3cmの円孔あり、外面：ケズリのちミガキ、内面：指頭圧痕のち工具ナデ痕	暗褐	—	不明	不明
79	I・II	I 検 検 -76	I 検 検 出 面・II 検 土 25、土 26	瓦質土器	炉形土器	(41.6)	(26.2)	(29.0)	上面を開口する立方体の体部、開口部周囲に鑄がめぐる、粘土板を貼り合わせて組み立てられている、表面の調整は不定方向のナデのみ、底部は平坦、瓦質	灰・暗灰	—	不明	不明
80	II	土 24-1	土坑 24	陶器	灯明受皿	9.2	3.7	2.0	立ち上がり部に1カ所切込み、内面全面施釉、外面口縁部のみ施釉	灰	灰釉	19c	瀬戸・美濃
81	II	土 54-1	土坑 54	磁器	碗	(9.0)	(3.4)	4.8	二重網目文、見込中央部に花文、高台外面圏線	灰	透明釉	18c	肥前
82	II	土 54-2	土坑 54	磁器	碗	(10.8)			底部厚い、外面一部染付	灰	透明釉	19c	肥前
83	II	土 54-3	土坑 54	陶器	片口鉢	(13.2)			漆継ぎ痕あり、内面見込部に目跡あり	灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
84	II	土 54-4	土坑 54	陶器	碗		4.1		蛇ノ目状高台、高台端部のみ露胎	灰	灰釉	18c 後半	瀬戸・美濃
85	II	土 54-5	土坑 54	陶器	皿	(12.7)	7.0	(2.7)	見込中央部に摺繪、被熱痕あり	黄白色	透明釉	18c	瀬戸・美濃
86	II	土 54-6	土坑 54	磁器	碗	15.0			外面染付、全面的に被熱	白	透明釉	18c	肥前
87	II	II 検 検 -1	検出面	磁器	碗	(10.2)	(3.8)	6.2	外面草花文	白	透明釉	18c	肥前
88	II	II 検 検 -2	検出面	陶器	灰吹?	2.9	6.1	7.8	灰釉と鉄釉の掛け分け、灰釉部分に呉須絵あり	白	灰釉・鉄釉・呉須	18c	瀬戸・美濃
89	II	II 検 検 -3	検出面	陶器	天目碗	(11.4)				黄灰	鉄釉	17c	瀬戸・美濃
90	II	II 検 検 -4	検出面	磁器	人形(狐か)				上絵付(赤)	白	透明・上絵	18c	肥前か
91	III	土 1-1	土坑 1	陶器	小杯	(5.9)	(2.8)	2.7	内面見込部に目跡1カ所、被熱痕あり	白	鉄釉	17c	瀬戸
92	III	土 7-1	土坑 7	陶器	皿		5.1		内面見込部に目跡1カ所	白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
93	III	土 7-2	土坑 7	陶器	拳骨茶碗	(10.7)			外面一部：鉄釉の上に長石釉	淡灰	鉄釉・長石釉	18c 末～19c 初	瀬戸・美濃
94	III	土 27-1	土坑 27	磁器	碗	10.2	4.4	5.5	漆継ぎ痕あり、口縁内面楡垣文、外面花文、内面見込吉祥文字、漆継ぎ痕あり	白	透明	19c	瀬戸・美濃
95	III	土 27-2	土坑 27	磁器	碗	9.8	3.2	5.4	外面に松葉文・菊花文、内面見込に寿文	白	透明	19c	瀬戸・美濃
96	III	土 27-3	土坑 27	磁器	皿	(9.2)	(5.5)	2.1		白	透明	18c	肥前
97	III	土 27-4	土坑 27	磁器	茶碗	(7.2)			口縁口鎖、焼き継ぎ痕あり	白	透明	19c	瀬戸・美濃
98	III	土 27-5	土坑 27	磁器	皿	(10.4)	(5.5)	1.8	内面見込：線刻文に呉須	白	透明	19c	瀬戸・美濃
99	III	土 27-6	土坑 27	磁器	御神酒徳利	(1.5)			体部側面に文様2カ所(五弁花・笹文)	白	透明	19c	瀬戸・美濃
100	III	土 29-1	土坑 29	磁器	小杯	(7.3)	(3.3)	3.9	端反り口縁、内外呉須絵	白	透明	18c 末～19c	肥前
101	III	土 29-2	土坑 29	陶器	灯明受皿	9.6	4.2	2.2	内面立ち上がり部1カ所に切込みあり	灰	灰釉	18c 後半～19c 初	瀬戸・美濃
102	III	土 29-3	土坑 29	陶器	卸皿				古瀬戸後期、底部回転糸切痕、見込部卸目は線刻	白	灰釉	15c	瀬戸・美濃
103	III	土 29-4	土坑 29	陶器	捏鉢	33.5	17.1	18.5	底裏・見込部に挟み具痕あり	暗灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
104	III	土 32-1	土坑 32	陶器	皿		(3.4)		陶胎染付、高台端部のみ露胎、内面呉須絵(五弁花)	白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
105	III	土 55-1	土坑 55	陶器	碗	(11.4)	(4.8)	(6.6)	被熱痕あり	淡灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
106	III	土 55-2	土坑 55	陶器	碗		(4.4)		一部被熱	淡灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
107	III	土 47-1	土坑 47	陶器	折縁皿				古瀬戸II、被熱痕あり	淡灰	灰釉	15c	瀬戸・美濃
108	III	土 49-1	土坑 49	磁器	小杯		(2.6)		上絵付(赤絵・金彩・緑)	白	透明	18c 後半～19c 初	肥前
109	III	土 50-1	土坑 50	陶器	碗	(12.6)	(5.1)	7.3	底裏に目跡あり、被熱痕あり煤付着	淡黄灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
110	III	土 50-2	土坑 50	陶器	鉢	(14.5)	(9.1)	9.2	底部露胎、被熱痕あり	暗灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
111	III	土 50-3	土坑 50	磁器	皿	(12.2)	(4.8)	2.5	高台端部砂目付着、捻子花文様	白	透明	17c 前半	肥前
112	III	土 54-1	土坑 54	陶器	向付				内面鉄絵、唐津	暗灰	灰釉	17c 初	肥前
113	III	土 54-2	土坑 54	陶器	向付				織部、型打ち成形、布目圧痕、脚部半環足	灰白	灰釉・銅緑・鉄絵	17c 初	美濃
114	III	土 56-1	土坑 56	陶器	碗		(4.9)		灰釉白濁、高台露胎	淡黄褐	灰釉	18c	肥前
115	II	土 56-2	土坑 56	土器	かわらけ	9.2	6.0	2.1	玉縁状口縁、口縁一部煤付着	暗褐	—	19c	在地
116	III	土 74-1	土坑 74	陶器	仏飯器	(6.9)			脚部端部露胎	白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
117	III	土 78-1	土坑 78	陶器	皿		(6.0)		内面見込部に圏線	白	長石	17c	美濃
118	III	III 検 検 -1	検出面	陶器	碗(天目碗)	(10.9)				白	鉄釉	17c	瀬戸・美濃
119	III	III 検 検 -2	検出面	陶器	碗		(5.0)		底部削り出し高台	白	鉄釉	17c	瀬戸・美濃
120	III	III 検 検 -3	検出面	陶器	碗		(4.8)		底裏面は施釉	白	灰釉	18c 前半	瀬戸・美濃
121	III	III 検 検 -4	検出面	陶器	碗		(5.2)			淡黄白	灰釉	18c 前半	瀬戸・美濃
122	III	III 検 検 -5	検出面	陶器	碗		(9.6)			淡黄灰	灰釉	18c 前半	瀬戸・美濃
123	III	III 検 検 -6	検出面	陶器	碗		(5.7)			淡黄灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
124	III	III 検 検 -7	検出面	陶器	碗	(9.2)	(3.6)	5.9	陶胎染付、口縁部のみ呉須、端反碗	白	透明釉	18c	瀬戸・美濃
125	III	III 検 検 -8	検出面	陶器	碗	(9.1)	(3.4)	5.1	外面に鉄絵、高台脇から底部露胎	淡灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
126	III	III 検 検 -9	検出面	陶器	碗		(3.7)		刷毛目碗	淡褐	白泥・透明釉	17c 後半	肥前

No.	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
						口径	底径	器高					
127	Ⅲ	Ⅲ検 検-10	検出面	陶器	皿	(10.2)			大窯製品	白	灰釉	16c 後半	美濃
128	Ⅲ	Ⅲ検 検-11	検出面	陶器	皿	(11.6)	(7.4)	2.1	志野、連房期、被熱痕あり	白	長石釉	17c 前半	美濃
129	Ⅲ	Ⅲ検 検-12	検出面	陶器	皿	(11.4)	(7.0)		二重圏線内に笹文、連房期	白	長石釉	17c 中	瀬戸・美濃
130	Ⅲ	Ⅲ検 検-13	検出面	陶器	蓋	7.4			つまみ部は犬を模る	淡灰	長石・透明	19c	瀬戸・美濃
131	Ⅲ	Ⅲ検 検-14	検出面	陶器	秉燭		(3.2)		灯芯立て欠損、底部に径3mmの小孔	淡黄灰	鉄釉	18c	瀬戸・美濃
132	Ⅲ	Ⅲ検 検-15	検出面	陶器	瓶類				徳利または花瓶	褐	—	19c	不明
133	Ⅲ	Ⅲ検 検-16	検出面	陶器	甗	(15.3)			茶系鉄釉に一部黒色鉄釉2度掛け	白	鉄釉	19c	瀬戸・美濃
134	Ⅲ	Ⅲ検 検-17	検出面	陶器	植木鉢	(23.8)			外面刻印あり、外面錆釉のち銅緑釉、内面錆釉刷毛塗り	白	錆・銅緑釉	19c	瀬戸・美濃
135	Ⅲ	Ⅲ検 検-18	検出面	陶器	植木鉢		816.0)		内面見込部に重ね焼き痕、底裏に目跡3カ所	淡黄白	鉄釉	19c	瀬戸・美濃
136	Ⅲ	Ⅲ検 検-19	検出面	陶器	鉢	(37.0)			内面鉄絵・銅緑釉流し掛け	淡灰	鉄・銅緑・灰釉	17c 後半	瀬戸・美濃
137	Ⅲ	Ⅲ検 検-20	検出面	陶器	火入れ		(10.0)		体部上半および下半に菊花状の連続刻印、体部中央部に櫛目文	淡黄白	銅緑釉	19c	瀬戸・美濃
138	Ⅲ	Ⅲ検 検-21	検出面	陶器	搦鉢	(24.5)			内面摩滅し使用痕明瞭	黄白	錆釉	16c 後半	瀬戸・美濃
139	Ⅲ	Ⅲ検 検-22	検出面	陶器	搦鉢		(15.0)		内面目跡4カ所あり	淡褐・淡灰	鉄釉	19c	瀬戸・美濃
140	Ⅲ	Ⅲ検 検-23	検出面	磁器	蓋		(5.9)		外面唐草文、内面天井部に草花文・圏線	白	透明釉	18c	肥前
141	Ⅲ	Ⅲ検 検-24	検出面	磁器	皿		(5.4)		内面に簡略した山水文	白	透明釉	18c 前半	肥前
142	Ⅲ	Ⅲ検 検-25	検出面	磁器	皿		(6.0)		初期伊万里、捻子花文	白	透明釉	17c 前半	肥前
143	Ⅲ	Ⅲ検 検-26	検出面	磁器	皿	(10.0)	(5.8)	2.0	形打成形、内面見込部に陰刻文	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
144	Ⅲ	Ⅲ検 検-27	検出面	磁器	皿	(9.4)	(4.9)	2.4	形打成形、内面見込部に御須、焼継痕あり、底裏に焼継印あり	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
145	Ⅲ	Ⅲ検 検-28	検出面	磁器	皿		(4.8)		内面見込部に蛇の目釉剥ぎ、高台部砂目付着	灰白	透明釉	18c	肥前
146	Ⅲ	Ⅲ検 検-29	検出面	磁器	皿		4.2	2.4	形打成形、高台方形、見込部鳥形	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
147	Ⅲ	Ⅲ検 検-30	検出面	磁器	段重		(8.9)		腰部段は露胎	白	透明釉	18c 後半	肥前
148	Ⅲ	Ⅲ検 検-31	検出面	磁器	蓋	(10.3)			外面蛸唐草、口縁端部内面露胎、つまみ部欠損	白	透明釉	19c	肥前
149	Ⅲ	Ⅲ検 検-32	検出面	磁器	水滴				形打ち成形、上半部のみで下半部欠損	白	透明釉	不明	肥前
150	Ⅲ	Ⅲ検 検-33	検出面	土器	皿	(11.1)	(6.4)	3.1	ロウロ成形、底部回転糸切痕	褐	—	17c	在地産
151	Ⅲ	Ⅲ検 検-34	検出面	土器	搦鉢				土師質摺鉢、内面線刻による摺目、口縁端部ヨコナデ、体部内面不定方向ナデ	暗褐	—	15c	在地産か
152		壁面-1	壁面	磁器	煎茶碗	(6.3)	(2.9)	4.6	外面に漢詩、鬼文	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
153		壁面-2	壁面	磁器	水滴				底部のみ残存、底裏に墨書あり、側面1カ所円孔、底部内面に指ナデ痕明瞭	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
154		壁面-3	壁面	陶器	碗		4.4			白	灰釉	18c～19c	瀬戸・美濃
155		壁面-4	壁面	陶器	碗				青織部碗	白	銅緑	17c 前半	美濃
156		壁面-5	壁面	磁器	皿				型打ち成形、内面見込部に沈線状の龍文	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
157		壁面-6	壁面	陶器	髪油壺	1.6			陶胎染付、外面呉須絵(草花文)	黄白	灰釉	18c	瀬戸・美濃
158		壁面-7	壁面	陶器	植木鉢	(30.0)	(17.2)	21.7	漆継ぎ痕、底部墨書、内面錆釉下地塗り	白	鉄釉	18c～19c	瀬戸・美濃
159		壁面-8	壁面	磁器	碗	(10.2)	(3.9)	5.6	くらわんか碗	灰白	透明釉	18c	肥前
160		表-1	表土	磁器	碗	(6.9)			外面染付	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
161		表-2	表土	磁器	皿	(7.7)	3.8	2.4	型打ち成形、方形皿、内面見込陽刻文(唐草文・花文)	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
162		表-3	表土	磁器	皿	(8.0)	(3.8)	2.3	型打ち成形、方形皿、内面見込陽刻文	白	透明釉	19c	瀬戸・美濃
163		表-4	表土	磁器	蓋(段重)	(13.8)			外面染付文	白	透明釉	18c	肥前
164		表-5	表土	陶器	拳骨茶碗		4.7		底部のみ、刻印なし	黄灰	鉄釉	18c 末～19c	瀬戸・美濃
165		表-6	表土	陶器	花瓶		4.8		内面底部の一部に灰釉付着	黄灰	—	不明	瀬戸・美濃
166		表-7	表土	土器	十能か				取手裏面に墨書「亥二月」、刻印「ふ〇〇」(ふうや):風也焼	淡褐～暗褐	—	19c	在地
167		排土-1	排土	磁器	皿		9.3		内面に松竹梅繋ぎ文、蛇ノ目凹型高台	白	透明	18c 後半	肥前

※ ( ) 内数値は復元した際の推定値を表す。

I 検

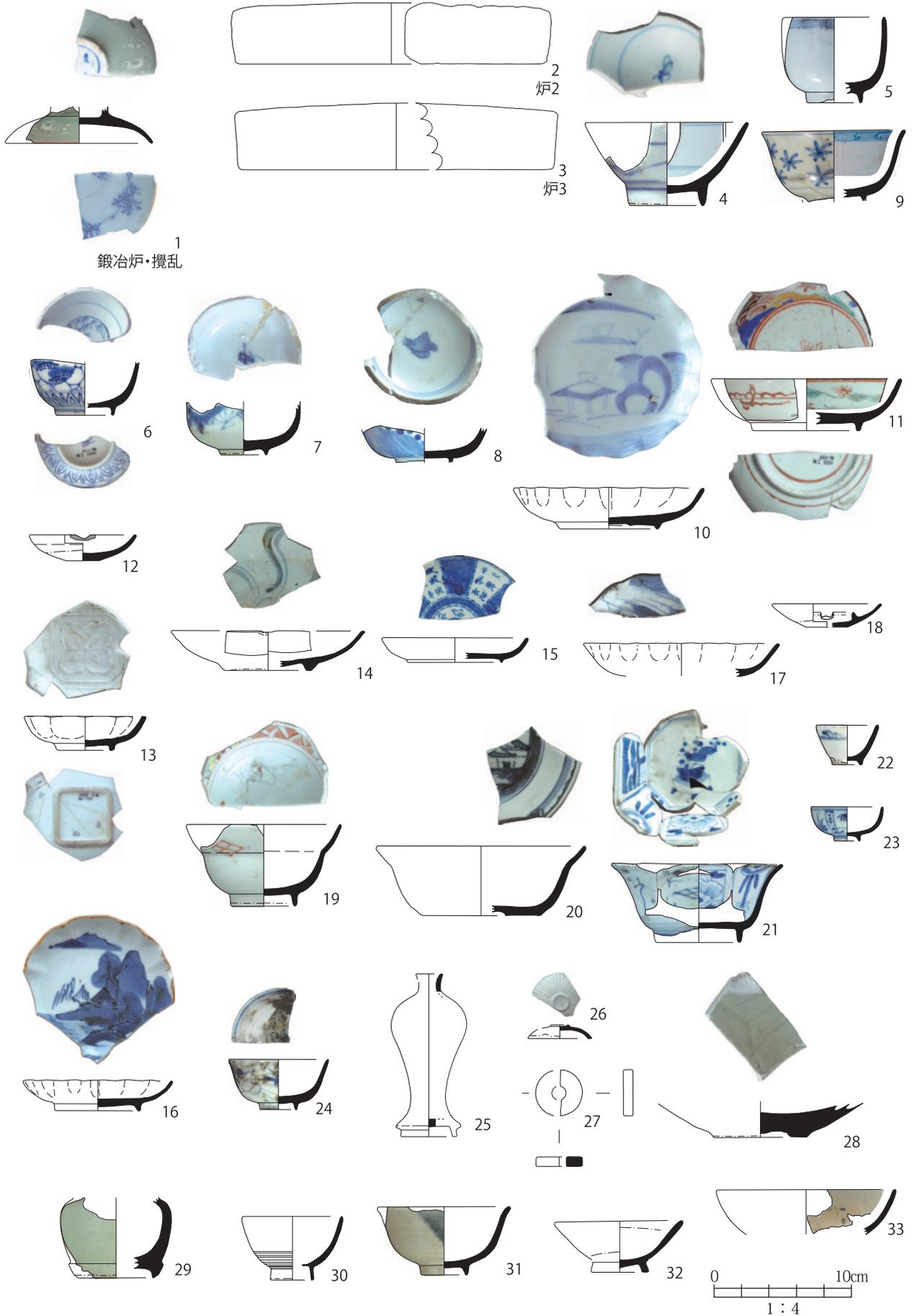


図 13 土器・陶磁器 (1)

I 検



図 14 土器・陶磁器 (2)

I 検

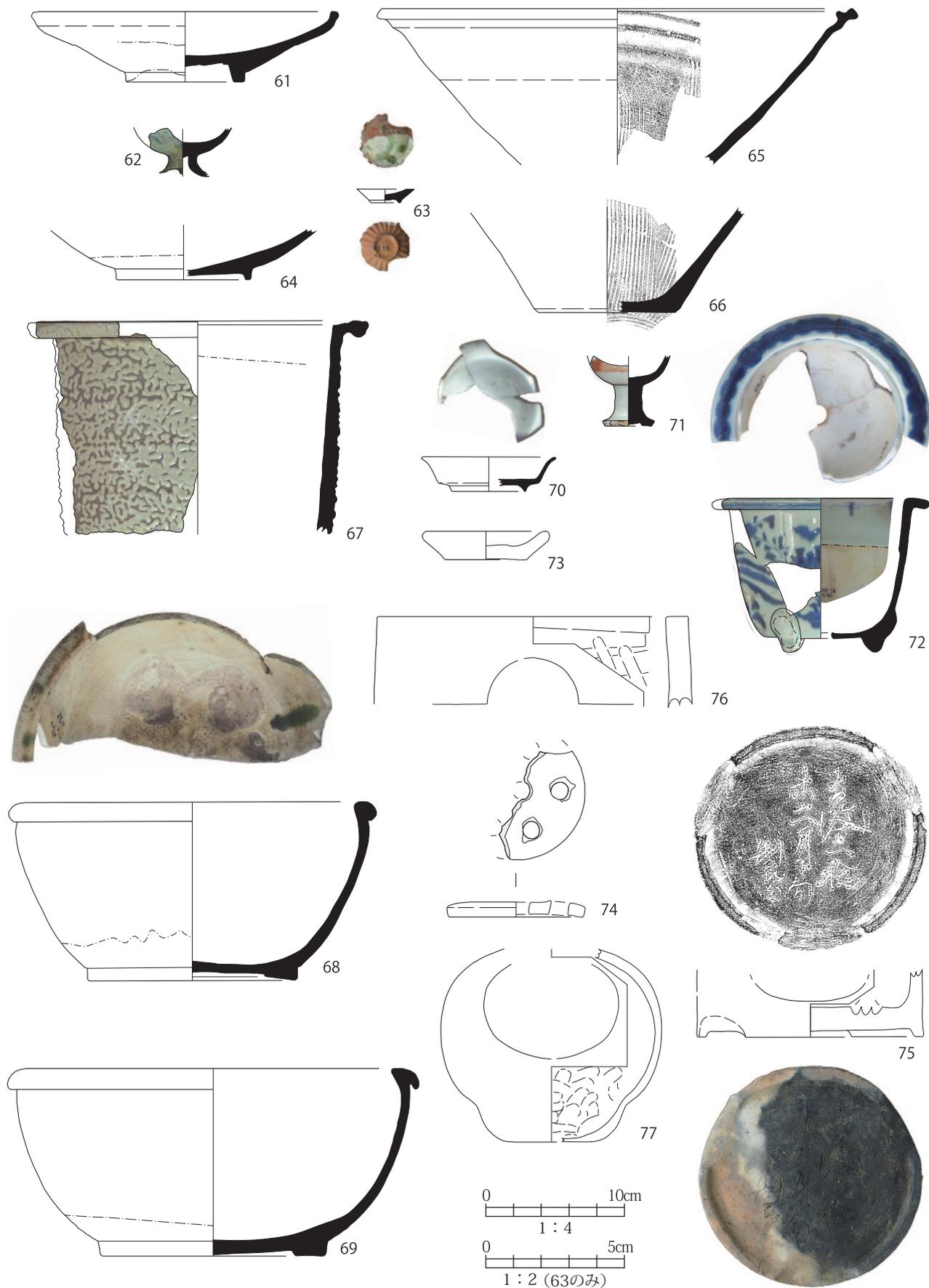
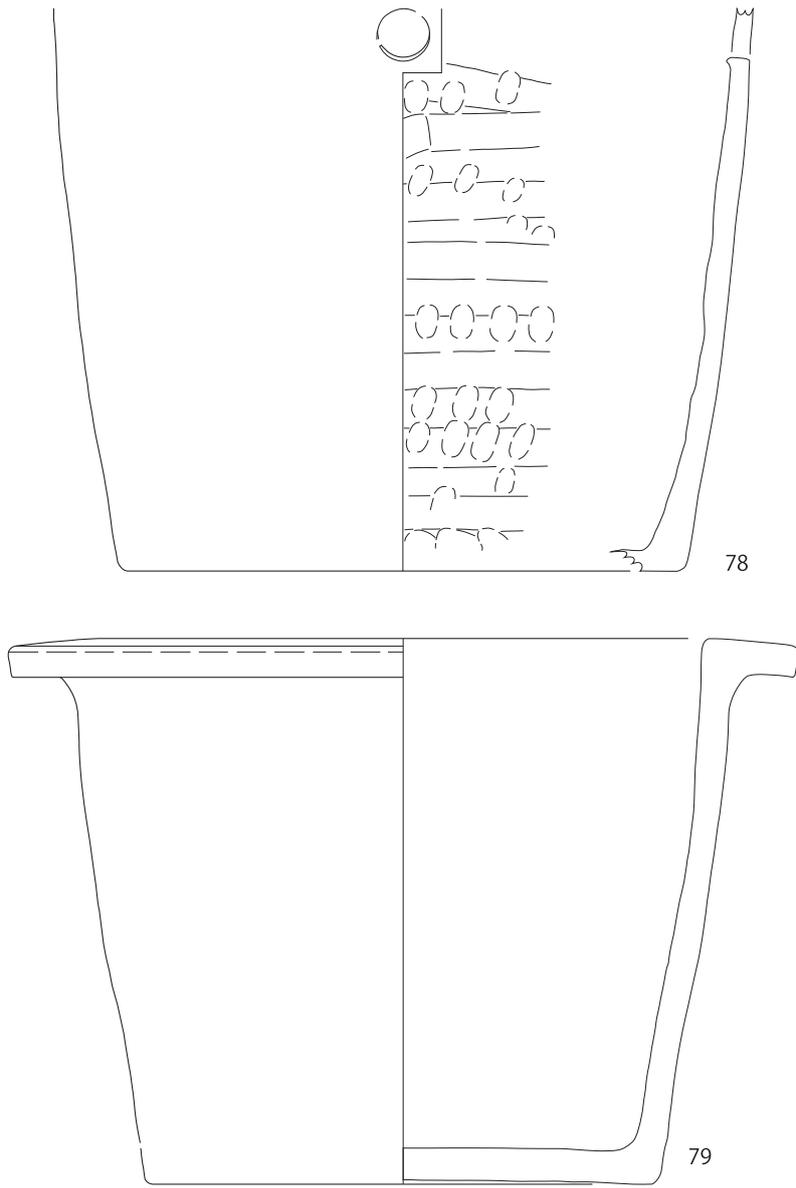
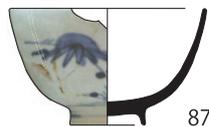
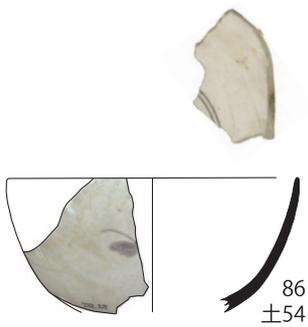
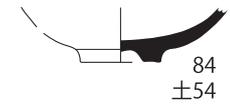
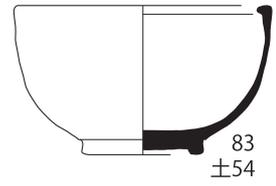
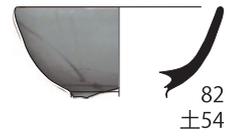
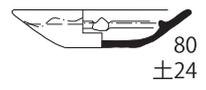


図 15 土器・陶磁器 (3)

I・II 検



II 検



88

90

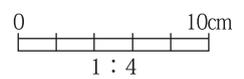


図 16 土器・陶磁器 (4)

III 検



図 17 土器・陶磁器 (5)

III 検

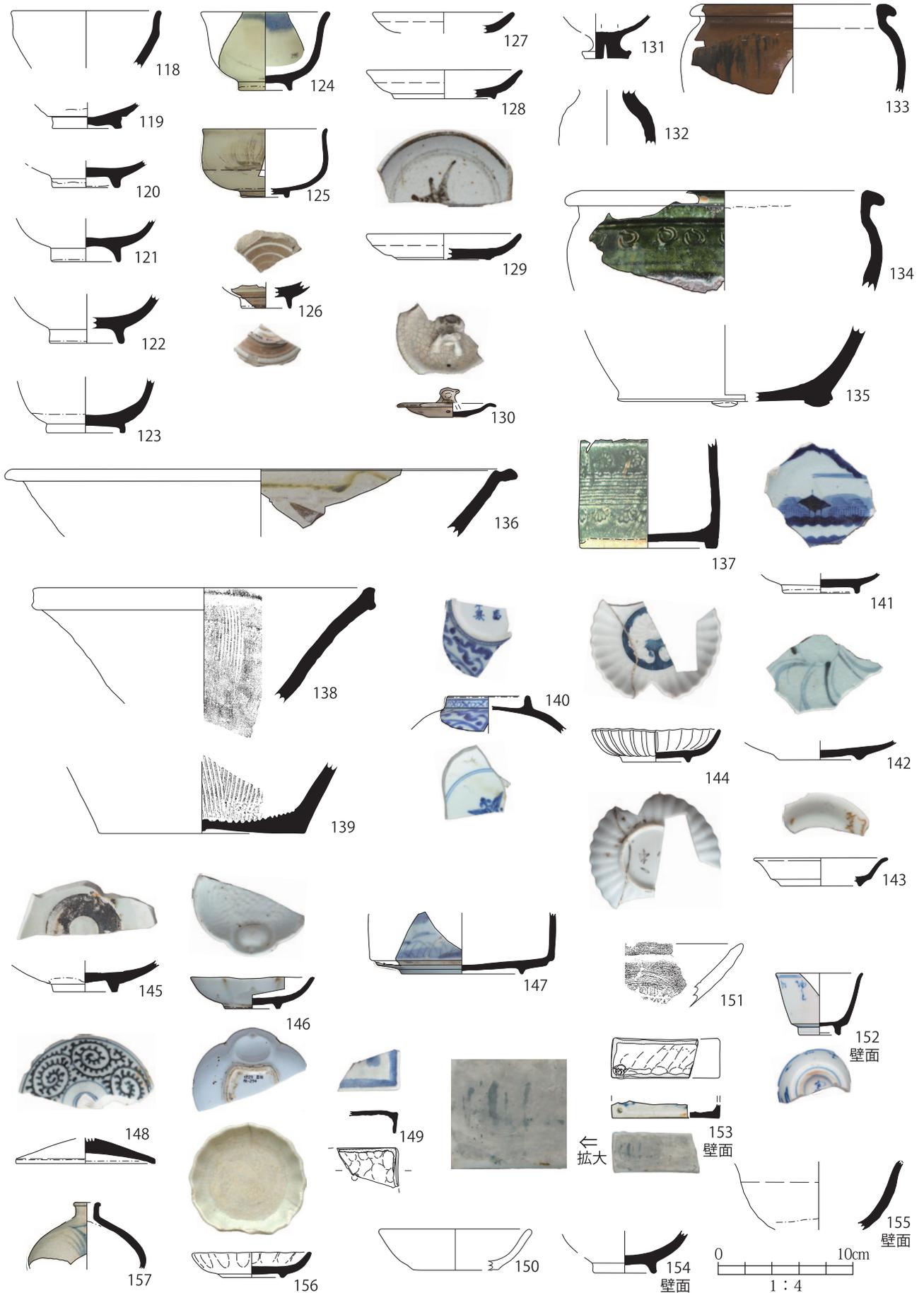
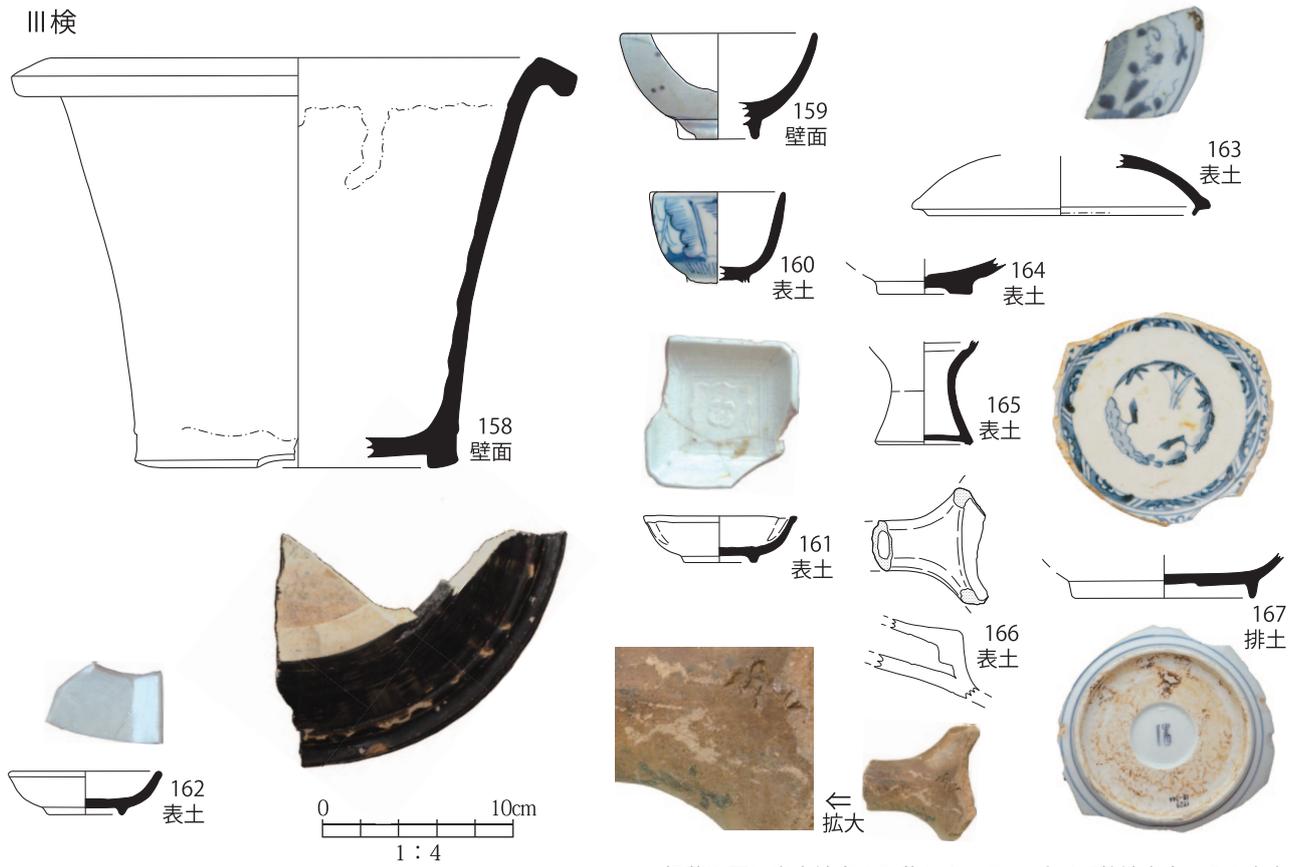


図 18 土器・陶磁器 (6)



※掲載No.下に出土地点の記載なきものは、すべて整地土中からの出土

図 19 土器・陶磁器 (7)

## 2 瓦 (表 6・7、図 20)

出土量は少なく、7 点を図化提示した。内訳は軒丸瓦の瓦当面 3 点 (1～3)、棧瓦の瓦当面 2 点 (4・5)、平瓦 2 点 (6・7) である。

1・3 は、藩主水野氏の家紋である立沢瀉紋が入った軒丸瓦である。周囲に珠文が入らないタイプである。2 は、連珠三つ巴文である。巻き方向は不明である。4 は連珠右巻三つ巴文、5 は木葉文が入る棧瓦の瓦当面である。6・7 は、文字が刻書されている瓦であるが、文字の判読はできない。出土点数が少ないため、町屋の建物に使われていた可能性は低いと考えられる。

表 6 軒丸瓦一覧表

掲載番号	実測番号	注記番号	出土地点	文様	珠文の数	長さ (cm)	瓦当面厚 (cm)	径 (cm)	丸瓦部内面調整	その他
1	瓦-1	検-069	I 検・検出面	立沢瀉	無		1.9	15.0	無	外縁から裏面に不定方向ナデ
2	瓦-2	土 42-239	III 検・土 42	連珠三つ巴文	有り・個数不明		1.6	17.6	無	外縁横から瓦当面裏端部にかけてヨコナデ
3	瓦-3	土 57-259	III 検・土 57	立沢瀉	無	(16.0)	1.7	14.8	布目圧痕、不定方向ナデ	外縁横から瓦当面裏端部にかけてヨコナデ
4	瓦-4	検-287	III 検・検出面	連珠右巻三つ巴文	有り・16		2.0	9.0	無	棧瓦、不定方向ナデ
5	瓦-5	表-321	III 検・検出面	木葉 (檜の葉か)	無			9.2	無	不定方向ナデ

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

表 7 平瓦一覧表

掲載番号	実測番号	注記番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	特徴・調整等
6	瓦-6	検-025・027	I 検・検	27.0	(17.0)	1.6	上面に刻書あり、釘穴 1 カ所あり端部角は面取り仕上げ
7	瓦-7	土 25-151	II 検・土 25	(13.9)	(16.8)	2.1	上面に刻書あり、釘穴 1 カ所あり端部角は面取り仕上げ

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

## 3 鍛冶関連遺物 (表 8・9、図 21)

### (1) 鞆の羽口

今回の調査で出土した鞆の羽口は、実測可能な 17 点を提示した。すべて破片資料で、大部分が送風口であるが、鞆接続部が 1 点 (2) ある。送風口部分は、羽口が熱で溶解しており、溶融物の付着が顕著に観察でき、被熱も著しく認められる。溶融物の中で、微弱ではあるが磁石に付く反応があるため、鉄分が僅かに付着していることが考えられる。羽口の全形は筒状で、中心部分には送風のための円孔がある。羽口の製作は、おそらく棒状の心棒に粘土を巻き付け、心棒を抜いて作ったものと推定される。本体径は、8.5～11.0 cm、送風の円孔径は、2.0～2.6 cm を測る。

外面の調整痕を観察すると、指ナデで仕上げられるもの (1・2・11・17)、縦方向あるいは不定方向のケズリ調整が施されるもの (3・4・6・8・14・15) と、刷毛目状のナデ調整で仕上げられているもの (5・13・16) の 3 種がみられる。

### (2) 鉄滓

鉄滓は土嚢袋 68 袋、重量 180,760.0g が出土したが、出土箇所には偏りが見られる。最も多いのは II 検土 56 で、III 検土 54、III 検土 56、III 検土 74 と続く。

表 8 韃の羽口一覧表

No.	検出面	実測番号	出土遺構	法量 (cm)		調整・形態の特徴	胎土
				口径	内孔径		
1	I	羽口-1	検出面	(10.2)	—	外面指ナデ、鉾滓附着	褐、黒褐
2	III	羽口-2	土坑 7	(9.2)	—	不定方向指ナデ、指頭圧痕	褐、黒褐
3	III	羽口-3	土坑 50	(8.5)	2.0	鉾滓附着、縦方向のケズリ調整	暗褐
4	III	羽口-4	土坑 54	(10.5)	2.6	鉾滓附着、縦方向のケズリ調整	淡褐
5	III	羽口-5	土坑 54	(10.3)	2.3	鉾滓附着、横方向の刷毛目状のナデ調整、指頭圧痕	淡褐
6	III	羽口-6	土坑 54	(11.0)	3.4	鉾滓附着、縦方向のケズリ調整	灰褐
7	III	羽口-7	土坑 56	(10.8)	2.4	鉾滓附着	淡褐
8	III	羽口-8	土坑 56	(9.9)	2.1	鉾滓附着、縦方向のケズリまたは指ナデ	淡褐
9	II	羽口-9	土坑 56	(11.6)	2.3	鉾滓附着、不定方向ナデ	淡褐
10	II	羽口-10	土坑 56	(9.7)	2.0	鉾滓附着、縦方向ナデ、全体的に摩滅	淡褐
11	II	羽口-11	土坑 56	(8.8)	2.2	鉾滓附着、指頭圧痕、不定方向ナデ	灰褐
12	II	羽口-12	土坑 56	(11.0)	2.0	縦方向ナデ	淡褐
13	II	羽口-13	土坑 56	(8.9)	2.0	鉾滓附着、縦方向刷毛目状工具ナデ、不定方向の指ナデ	淡褐
14	—	羽口-14	壁面	(10.7)	2.2	鉾滓附着、縦方向のケズリ、指ナデ	淡褐
15	—	羽口-15	壁面	(8.9)	2.1	不定方向指ナデ、ケズリ痕	淡褐、黒褐
16	—	羽口-16	壁面	(9.7)	—	縦方向にケズリ痕および刷毛目状ナデ	淡褐、灰褐
17	—	羽口-17	表土	(9.8)	2.2	鉾滓附着、指頭圧痕	淡褐、暗褐

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

表 9 鉄滓出土地点一覧表

検出面	出土地点	重量 (g)
I 検	検出面	22,893
	トレンチ	152
II 検	± 12	148
	± 36	913
	± 37	407
	± 43	291
	± 45	52
	± 46	889
	± 54	141
	± 56	72,826
III 検	検出面	422
	± 23	845
	± 24	7
	± 30	54
	± 37	402
	± 39	463
	± 42	666
	± 54	61,683
	± 56	6,775
	± 61	22
	± 69	791
	± 74	4,278
	溝 1	117
	検出面	2,796
	壁	1,808
その他	表土	333
	攪乱	586

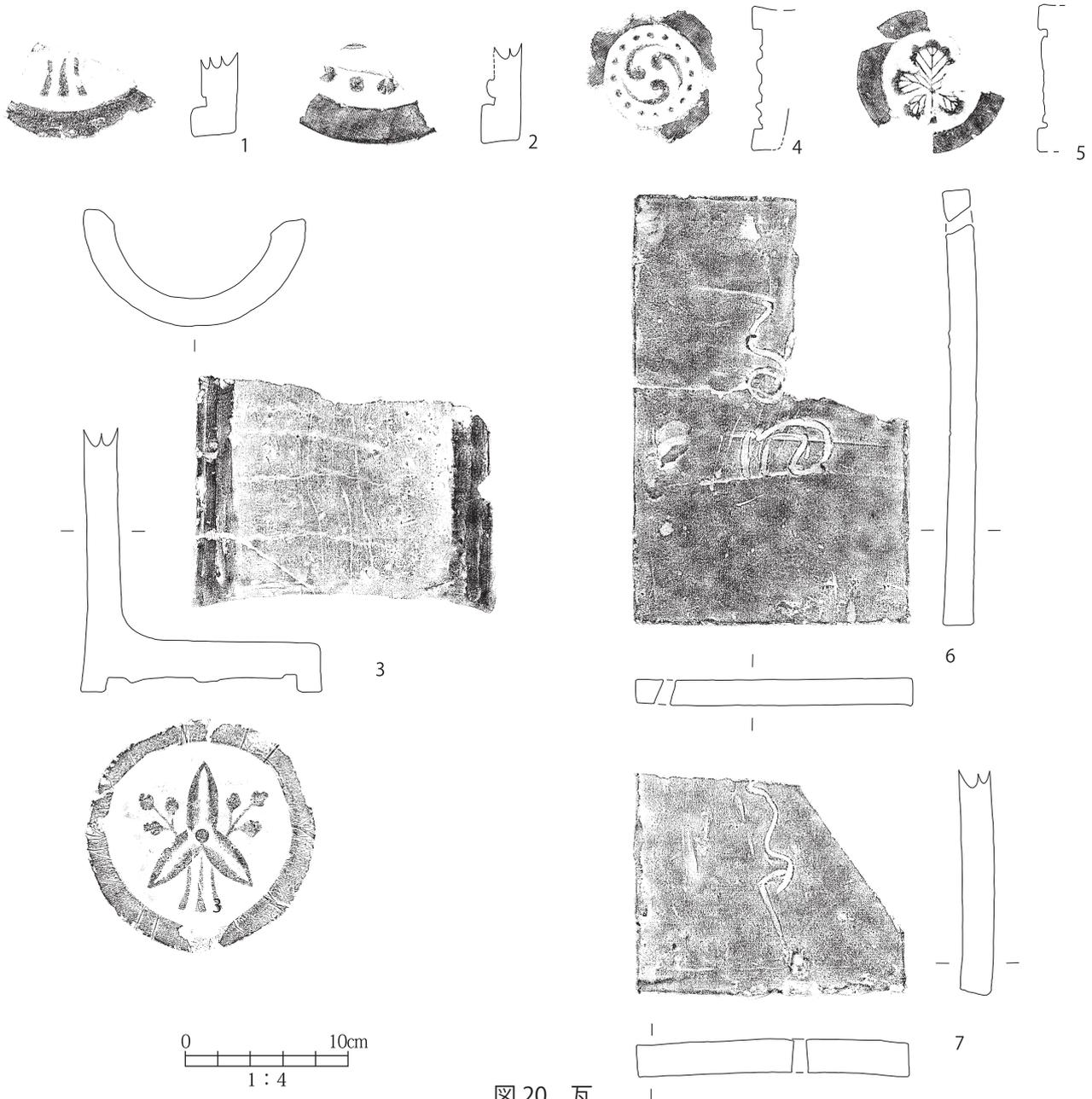


図 20 瓦

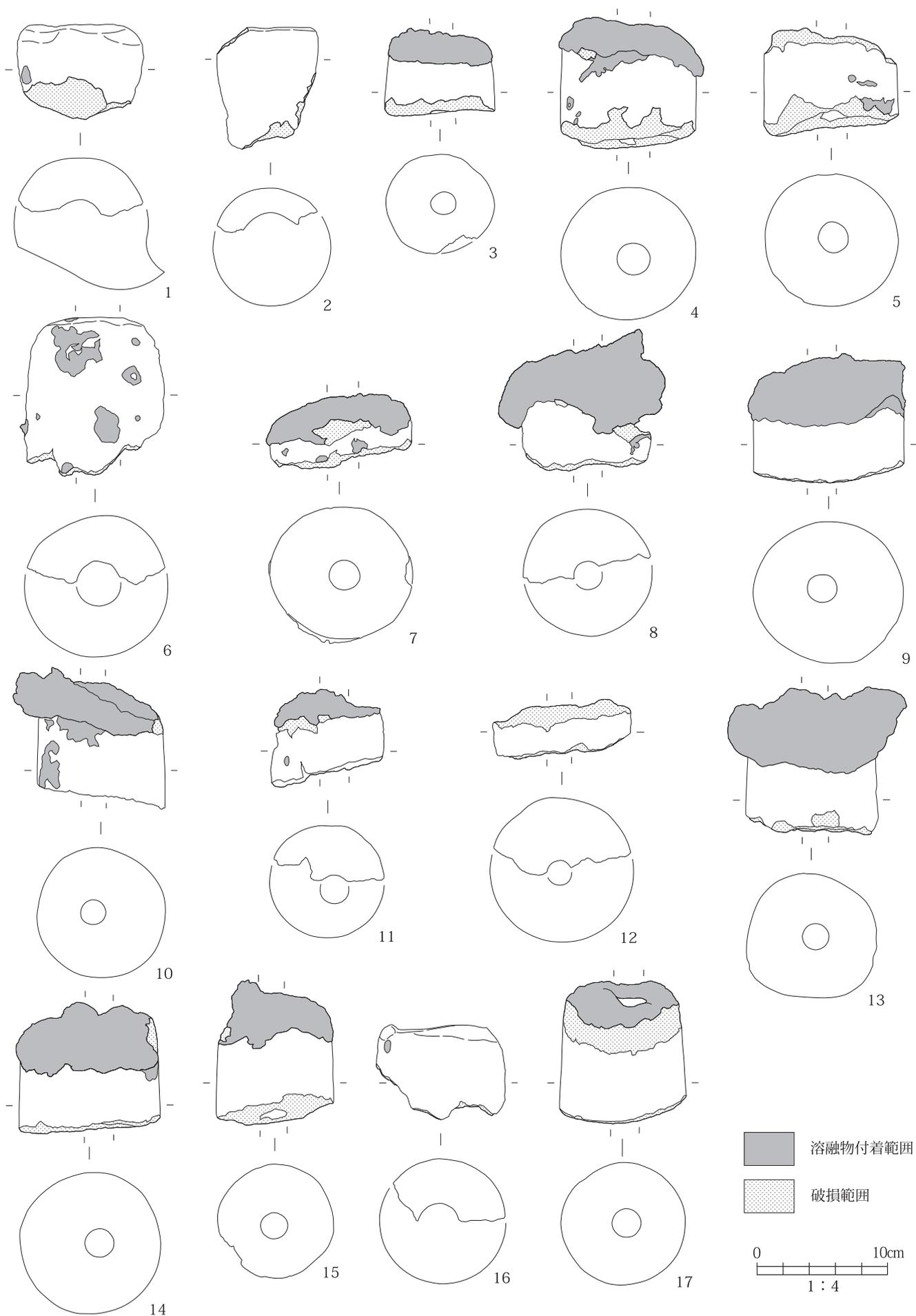


图 21 羽口

#### 4 木製品 (表 10、図 22、写真図版 8)

今回の調査では、調査区全体から 50 点の木製品が出土し、その内訳は下駄 9 点、漆製品 7 点、農耕具 5 点(うち 3 点は鍬先、2 点は柄)、円板 4 点、箸 4 点、指物 3 点(うち 2 点は同一個体)、建築部材 2 点、栓 1 点、楔 1 点、付木 1 点、桶 1 点、樽 1 点、三弦 1 点、不明品 10 点である。2 点を除く全ての出土資料がⅢ検から出土しており、大半が土坑に伴う。帰属時期は相伴する陶磁器に準じるものである。本報告では、遺存状態の良好な下駄 6 点と漆製品 3 点を図示し、詳細を述べる。遺物の記載にあたっては図番号を使用している。他製品については表 10 を参照されたい。

##### (1) 下駄 (1～6)

本調査地で出土した 9 点の下駄はいずれも歯が垂直に下りる連歯下駄であり、指頭圧痕が残る。連歯下駄は本遺跡の第 1 次調査のほか、本町第 8 次調査や三の丸跡土居尻第 1・2 次調査で出土した下駄のうち約 8～9 割を占めており、松本城下では広く使われていたことがわかる。

1 は、長方形で、末広の歯をもつ。後歯は木目に沿って大きく剥離し、台の周縁は使用痕とみられる摩滅・欠損が目立つ。2 は、台の四隅を切り落とす隅丸長方形で、歯の付け根や台部背面には複数のノコギリ痕が見られる。ほかの下駄の台は板状に加工しているが、2 は丸みを帯び断面はやや楕円で厚みがある。また、歯は低く安定感がある。台部前面には指頭圧痕のほか明瞭な指腹圧痕が残る。3 は、長方形で、台の背面前後にのめりのような加工が施される。両歯とも左側が著しく摩滅する。4～6 は、長円形で、末広の歯を持つ。本調査地で出土した長円形の下駄は台長に対して台幅が狭い傾向にあるが、6 は、子供用であるためか、台幅は広く安定感がある。4 は、指頭圧痕のほかにも複数の圧痕が見られ、左後部を大きく欠損する。5 は、台部から後歯に向けて鉄釘が 3 本刺さる。歯を補修しようとしたと思われる。松本城跡・松本城下町跡の過去の調査で出土した下駄は、台長の寸法から概ね長方形が男性用、長円形が女性用としているが、5 の長円形の下駄は台長 23.3cm と長く、また、前後の鼻緒の間隔が 10.5cm と広いため、持ち主は男性、あるいは体格の大きな人物であったと推測する。

##### (2) 漆製品 (7～9)

7 点の漆製品のうち、椀が 6 点、椀蓋が 1 点である。いずれの椀も横木取りのロクロ挽きで、下地処理を施している。木取りの特徴として、縦木取りの椀は木地に歪みが生じにくく丈夫であるため、ロクロによる薄挽きにも十分に耐えうる強度をもつ。しかし、製材・加工時の木材の廃棄部分が多いため一本の木から生産できる量は限られ、また、高度な技術を要するため高価な製品となる。対して、横木取りの椀は木地に歪みが生じやすいものの、製材・加工効率が良く、より多くの椀を生産することができるため大量生産・低価格での販売が可能となる。松本城下で出土したほとんどの漆椀が横木取りを採用しているが、土居尻第 1 次調査ではわずかに縦木取りの椀が確認されている。

7 は、浅型の椀で、高台裏は最も薄い箇所 1.6mm と非常に薄く挽かれている。内面朱漆・外面黒漆塗りで、外面のみ呂色仕上げ(ツヤ出し)を施したのち、胴～腰部にかけて 3 カ所に黄色漆による漆絵で「丸に木瓜」紋を描いている。漆絵部分は使用による摩滅により器面との境界部に痩せが見られる。口縁は欠損しており、高台は付け根のみ残存する。木地収縮のため、内面一部に漆膜の浮き上がりが生じる。

8 は、腰部の器厚が厚く、胴部はほぼ垂直に立ち上がる。内外面とも黒漆塗りの堅牢な椀で、下地処理は非常に丁寧な施される。高度な技術をもった塗師が良質な漆を使用して塗漆したのであろうか、漆膜は非常に薄く仕上がっている。外面のみ呂色仕上げを施し、高台際には漆溜りが見られる。内面にはわずかにロクロ目が残る。高台には朱漆で「フ」の文字が書かれる。胴部には明瞭な凸帯が廻るが、木地・漆膜内部には

およんでいないため、呂色仕上げののち、蒔絵の技法を応用して施されたものと推測する。口縁と高台の一部を欠くが、残存部は木地・漆膜ともに非常に状態が良い。

9は、底部・腰部の器厚が厚く、口縁に向かうにしたがって薄くなる。内面朱漆・外面黒漆塗りの椀で、外面のみ呂色仕上げを施す。胴部全体に七枚葉の竹と蘇鉄に似た植物の葉、流水文が蒔絵によって描かれる。使用された金属粉は錆化が激しく、粉の種類は判別不可能である。また、一部使用による摩滅によって金属粉が剥落し、絵漆が露呈する。口縁は一部を残して欠損し、高台は付け根のみ残存する。

表 10 木製品一覧表

ID	図 No.	検	遺構	器種	手法	長・口径 (cm)	幅/底径 (cm)	厚・高 (cm)	破損状況	備考
1		I	壁	栓	角材・四方桁	4.4	—	2.8	完形	
2		III	土 24	連歯下駄	角材・四方桁	(10.2)	(5.3)	2.3	5/6 欠	指頭圧痕あり、歯の摩耗著しい
3		III	土 27	付木	棒材 (削り出し)	23.8	0.7	0.6	完形	箸からの転用
4	7	III	土 27	漆椀	横木取り	(9.4)	(5.1)	(3.0)	1/3 欠	外面黒漆塗 / 内面朱漆塗、下地処理、外面に黄色漆で「丸に木瓜」紋の漆絵あり
5		III	土 29	不明	縦木取り	不明	11.3	8.3	1/2 欠	内面にロクロ目あり
6		III	土 30	桶	板材・板目、柁目	不明	不明	(16.6)	不明	側板と竹製のタガが残る
7		III	土 37	建築部材	板材・追柁目	19.1	7.1	1.7	不明	
8		III	土 37	円板	板材・柁目	—	16.8	0.7	1/4 欠	
9		III	土 37	不明	板材・柁目	(15.7)	(4.4)	(0.6)	不明	
10		III	土 37	連歯下駄	角材・四方桁	(21.0)	8.8	3.5	ほぼ完形	前後で歯の厚さ異なる
11		III	土 39	不明	板材・柁目	(22.2)	(0.9)	(0.6)	不明	全体的に炭化
12-1		III	土 39	指物	板材・板目	(9.2)	4.5	(0.8)	不明	12-2 と同一個体 (組接 + 木釘)、釘穴 3 カ所 (うち 2 カ所木釘刺さる) あり、柁の側板
12-2		III	土 39	指物	板材・柁目	(8.0)	4.4	(0.7)	不明	12-1 と同一個体 (組接 + 木釘)、釘穴 3 カ所 (木釘刺さる) あり、柁の側板
14		III	土 47	円板	板材・柁目	—	(30.0)	(1.8)	1/2 欠	
15		III	土 47	不明	板材・柁目	(8.5)	3.7	0.6	ほぼ完形	中央に $\phi$ 1.8mm の穿孔あり
16		III	土 47	不明	板材・柁目	(23.5)	1.5	—	不明	
17		III	土 47	不明	板材・板目	67.7	6.8	2.4	不明	先端に $\phi$ 0.5mm の穿孔あり、側面に手斧痕か
18	1	III	土 47	連歯下駄	角材・二方桁	24.2	10.3	5.6	ほぼ完形	未広の歯、歯の摩耗著しい
19		III	土 50	鍬先	板材・追柁目	(22.8)	(6.1)	(3.1)	1/2 欠	先端使用による欠損
20		III	土 50	連歯下駄	角材・二方桁	14.7	(6.4)	5.5	2/3 欠	未広の歯、前歯欠損、後歯半分欠損、鼻緒のほかに $\phi$ 0.9mm の穿孔 2 カ所あり
21		III	土 50	箸	棒材 (削り出し)	(16.2)	0.7	0.4	不明	両端欠損、面取り
22		III	土 50	箸	棒材 (削り出し)	(11.7)	0.6	0.6	不明	両端欠損、八角形に面取り
23		III	土 50	箸	棒材 (削り出し)	(9.2)	0.6	0.5	不明	両端欠損、面取り
24	2	III	土 50	連歯下駄	角材・二方桁	21.0	9.3	3.9	ほぼ完形	指頭圧痕・指腹圧痕あり、歯の摩耗著しい
25	3	III	土 50	連歯下駄	角材・四方桁	22.1	8.8	3.7	ほぼ完形	指頭圧痕あり、両歯とも 2/3 程度欠損
26		III	土 50	鍬先	板材・柁目	30.1	(6.5)	(3.2)	1/2 欠	刃の側面面取り
27		III	土 50	箸	棒材 (削り出し)	(9.1)	0.8	0.5	不明	両端欠損、八角形に面取り
28	4	III	土 50	連歯下駄	角材・二方桁	(21.0)	9.0	4.4	ほぼ完形	指頭圧痕あり、未広の歯
29		III	土 50	漆椀	横木取り	不明	(6.5)	(7.1)	1/3 欠	内面朱漆塗 / 外面うのみ漆塗、下地処理、胴部に草花の蒔絵 (金属粉剥落) あり
30		III	土 54	楔	角材・二方桁	7.1	4.6	1.2	ほぼ完形	
31		III	土 56	三弦	角材・二方桁	34.6	3.4	2.0	完形	上棹か、継手部 (ホゾ穴) 残る、糸倉に糸巻きの穴 ( $\phi$ 6mm) あり
32		III	土 74	不明	板材・板目	(4.5)	5.0	1.6	不明	中央の穴に鉄釘刺さる
33		III	土 74	樽	板材・板目 / 柁目	側板高さ:32.4	円板径:27.6	円板:1.2 側板:0.9	1/2 欠	円板:木釘で接合、周開面取り、被熱痕あり 側板:タガ・蓋・底板痕あり
34	5	III	土 74	連歯下駄	角材・二方桁	23.3	9.0	4.1	ほぼ完形	指頭圧痕あり、後歯に 3 本の鉄釘刺さる、未広の歯
35		III	土 74	農耕具の柄	丸太材	(32.0)	(3.6)	—	不明	一端欠損
36		III	土 74	農耕具の柄	角材・二方桁	(32.0)	(2.6)	—	不明	両端欠損、断面楕円
37		III	土 74	不明	板材・板目	(17.5)	(7.2)	(1.4)	不明	片面刃物痕あり
38		III	土 74	不明	丸太材	(13.2)	(3.8)	—	不明	農耕具の柄か
39		III	土 74	指物	板材・柁目	26.2	2.4	0.7	不明	4 カ所に木釘刺さる
40		III	土 74	建築部材	丸太材	(41.0)	(11.0)	—	不明	先端にホゾあり、側面 3 カ所に約 25mm 四方のホゾ穴あり
41		III	土 74	円板	板材・柁目	—	13.4	1.1	完形	中央に $\phi$ 約 10 × 7mm の穿孔あり
42		III	土 74	円板	板材・板目	—	(26.9)	(0.9)	3/4 欠	桶の底板か、楕円形、表面に刃物痕あり、側面に穴 1 カ所あり
43		III	土 74	漆椀の蓋	横木取り	(3.3)	(2.0)	(0.4)	高台一部残	内外面朱漆塗
44	6	III	土 74	連歯下駄	角材・四方桁	13.9	6.8	3.4	ほぼ完形	指頭圧痕あり、未広の歯、子供用
45		III	土 74	漆椀	横木取り	不明	13.0	(3.7)	1/2 欠	内外面朱漆塗 / 外面黒漆塗、下地処理、胴部に朱漆による漆絵あり
46	8	III	検出面	漆椀	横木取り	(12.2)	5.6	(4.7)	1/3 欠	内外面黒漆塗、下地処理、高台に朱漆で「フ」と書かれる、胴部に凸帯
47	9	III	検出面	漆椀	横木取り	11.0	6.0	6.1	1/2 欠	内面朱漆塗 / 外面黒漆塗、下地処理、外面に蒔絵あり
48		III	検出面	漆椀	横木取り	不明	(6.0)	(4.4)	1/2 残	内面朱漆塗 / 外面黒漆塗、下地処理、口縁・高台欠損
49		III	検出面	不明	板材・板目	27.1	14.7	1.3	不明	
50		南西隅 tr	検出面	鍬先	角材・四方桁	(19.6)	(8.7)	2.8	1/4 欠	柄孔部に柄の一部刺さる、全面被熱による炭化

※ ( ) 内数値は残存値を表す。

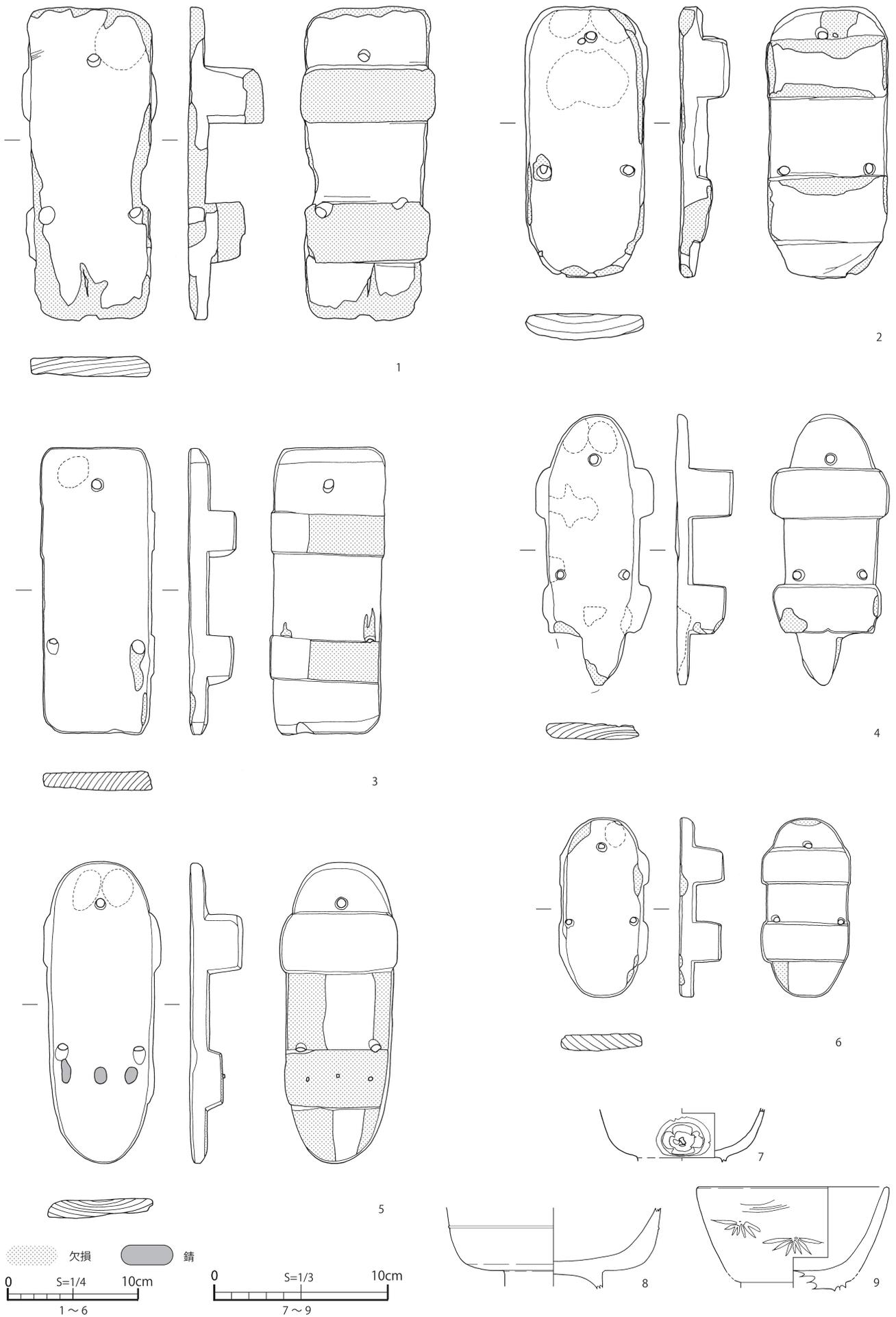


图 22 木製品

5 石製品 (表 11、図 23、写真図版 8)

今回の調査で、合計 58 点の石製品が出土した。内訳は、碁石 7 点、砥石 43 点、硯 2 点、石臼 2 点、火打石 1 点、凹石 1 点、不明石製品 2 点がある。遺存状態の良いものを中心に 11 点を図示し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表を参照されたい。

**碁石 (1～5)** 5 点図示した。石材は、粘板岩 (1・2・5)、流紋岩 (3)、砂岩 (4) がある。2 は、丁寧な整形研磨が施されており、真円に近い平面形を呈し、正・裏面は平らに仕上げられている。3 は、石質が白色に近い色味をしていることから、白碁石として使用されたものと推定できる。5 は、被熱により全体的に赤色化している。

**砥石 (6～10)** 砥石は 43 点出土しており、全体の 7 割以上を占める。伊勢町は近世をとおして鍛冶職人が多くいたことがわかっており、砥石の出土量の多さは、鍛冶業の一端を示す良い資料となった。完形品を中心に 5 点図示した。6 は、長軸の両端部が使用により擦り減り、縦断面が山型になっている。側面と裏面に、整形時にできた溝状研磨痕のような加工痕が認められる。7 は、扁平な長方形を呈し、正・裏面に方形に溝が彫られている。8・9 は、小形で手持ち砥石と考えられる。砥面は使用により内湾している。10 は、泥岩製の砥石で直方体を呈している。砥面は、幅の広い面ではなく、狭い面に認められる。

**硯 (11)** 11 は、粘板岩製の硯である。内・外面の平面形は長方形を呈す。海部と陸部の境目付近が極端に凹み、凹みの中に線条痕が多く残る。度重なる墨磨りによる使用痕と想定される。陸部に V 字形の溝状研磨痕が複数規則的に並んでいる。用途は不明だが、意図的に付けられた可能性がある。また、裏面に刻書が確認でき、「本町」や「本」、「鈴」と読めるものが含まれている。

表 11 石製品一覧表

ID	図 No.	器種	検出面	遺構	出土地点 ほか	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
1		砥石	I 検	検出面	No 13	頁岩	(9.17)	3.81	1.58	(103.2)	1/4 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 2、荒砥、両側面櫛目あり
2		砥石	I 検	検出面	No 20	頁岩	(12.82)	(7.85)	(1.66)	(202.3)	1/4 欠	平面:長方形、断面:扁平な長方形、砥面数 4、中砥
3	11	硯	I 検	検出面	No 34	粘板岩	15.27	6.27	1.62	(241.4)	左上一部欠損	平面:長方形、断面:長方形、裏面に刻印あり
4		砥石	I 検	検出面	No 35	頁岩	(7.12)	(3.43)	(1.03)	(20.2)	表面の一部のみ残	砥面数 1
5		砥石	I 検	検出面	No 35	頁岩	(13.32)	6.89	2.11	(258.7)	1/4 欠	断面:長方形、砥面数 4、仕上げ、線条研磨痕あり
6		砥石	I 検	検出面	No 49	頁岩	(9.65)	6.82	0.89	(88.9)	1/4 欠	平面:長方形、断面:扁平な長方形、砥面数 2、仕上げ、線条研磨痕あり
7	6	砥石	I 検	検出面	No 76	流紋岩	13.82	2.93	2.50	143.0	完形	平面:不定形、断面:不定形、砥面数 4、中砥、弓形に中心部が起伏
8		砥石	I 検	検出面	No 110	頁岩	(9.65)	4.22	0.88	(74.6)	1/4 欠	平面:長方形、断面:扁平な長方形、砥面数 5、仕上げ、線条研磨痕あり
9		砥石	I 検	火災層	東	頁岩	(6.01)	(3.16)	(0.44)	(8.3)	小破片	断面:扁平な長方形、砥面数 2、中砥、線条研磨痕あり
10	1	碁石	I 検	火災層	東	粘板岩	2.91	2.44	0.72	7.8	完形	平面:楕円形、断面:扁平な楕円形、黒石
11		砥石	I 検	火災層	南東スミ	頁岩	(12.50)	(7.31)	(3.26)	(304.0)	1/3 欠	砥面数 2、中砥
12		砥石	I 検	火災層	南東スミ	泥岩	(10.87)	(5.44)	(1.55)	(156.9)	1/4 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 4、中砥
13		砥石	I 検	火災層	南東スミ	頁岩	(11.31)	(9.55)	(2.40)	(282.7)	1/3 欠	平面:方形、断面:長方形、砥面数 4、中砥、線条研磨痕あり
14		砥石	I 検	火災層	南東スミ	頁岩	(5.48)	(2.27)	(0.51)	(6.6)	小破片	砥面数 1、仕上げ、線条研磨痕あり
15		砥石	I 検	検出面	南西	頁岩	(2.66)	(2.19)	(0.56)	(4.4)	小破片	砥面数 2、中砥
16		砥石	I 検	検出面	西	頁岩	(4.60)	(4.15)	(1.03)	(37.7)	1/2 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 4、仕上げ、線条研磨痕あり、剥離して 2 個体に割れ
17	2	碁石	I 検	検出面	西	粘板岩	2.21	2.20	0.40	3.8	完形	平面:円形、断面:扁平な楕円形、黒石
18		砥石	I 検	検出面	北西	頁岩	(5.61)	(3.16)	(3.03)	(94.0)	3/4 欠	平面:長方形、断面:方形、砥面数 4、仕上げ、線条研磨痕あり
19		砥石か	I 検	火災層	西	頁岩	(5.04)	(2.17)	(0.34)	(4.9)	小破片	砥面数 1、仕上げ、剥離して 2 個体に割れ
20		砥石	I 検	火災層	西	頁岩	(5.07)	(5.60)	(0.45)	(22.6)	側面のみ残	砥面残存していないが砥石と判断、剥離して 2 個体に割れ
21		碁石か	I 検	火災層	西	砂岩	2.14	1.93	0.76	4.5	完形	平面:円形、断面:扁平な楕円形、白石
22		砥石	I 検	火災層	西	頁岩	(3.23)	(2.48)	(0.42)	(4.2)	1/2 欠	断面:扁平な長方形、砥面数 2、仕上げ、手持ち砥石
24		砥石	I 検	検出面	西	頁岩	(4.07)	(2.43)	(1.41)	(28.0)	3/4 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 2、中砥、線条研磨痕あり
25		砥石	I 検	検出面	西	頁岩	(2.90)	(2.25)	(0.70)	(6.9)	2 面残	断面:扁平な長方形、砥面数 2、仕上げ
26	3	碁石	I 検	検出面	中央	流紋岩か	2.17	2.15	0.42	3.4	完形	平面:円形、断面:扁平な楕円形、白石
27	7	不明石製品	I 検	検出面	中央	頁岩	8.50	5.67	1.17	121.3	完形	平面:長方形、断面:長方形、刻印あり
28		砥石	I 検	火災層	中央	頁岩	(5.98)	(3.27)	(1.66)	(66.5)	1/2 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 4、中砥、線条研磨痕あり
29		不明石製品	I 検	検出面	中央	砂岩	5.17	4.71	1.00	42.5	完形	平面:八角形、断面:扁平な長方形
30		砥石	I 検	検出面	中央	頁岩	(6.30)	(4.68)	(1.19)	(37.2)	1/2 欠	砥面数 2、仕上げ
31		砥石	I 検	検出面	中央	頁岩	(6.50)	(5.55)	(0.36)	(10.7)	3/4 以上欠	平面:長方形?、断面:扁平な長方形、砥面数 1、仕上げ、3 個体に割れ
32		砥石	I 検	火災層	中央	頁岩	(22.60)	(8.40)	(1.71)	(454.0)	1/2 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 1、仕上げ、線条研磨痕あり
33	8	砥石	II 検	土坑 31		頁岩	8.15	1.75	2.10	37.5	完形	平面:不定形、断面:不定形、砥面数 3、仕上げ、線条研磨痕あり、手持ち砥石
34		砥石	II 検	検出面		結晶片岩	(6.90)	(3.45)	(2.41)	(109.3)	1/2 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 1、中砥、線条研磨痕あり、砥面以外の面に櫛目痕
35		砥石	III 検	土坑 7		頁岩	(17.80)	(9.01)	(6.15)	(1244.0)	1/2 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 4、仕上げ、線条研磨痕あり、中心部にかけて磨り減りが顕著に見られる
36	4	碁石	III 検	土坑 27		砂岩	2.45	2.20	0.67	(5.0)	表面の一部剥落	平面:円形、断面:扁平な楕円形、黒石
37	9	砥石	III 検	土坑 29		片岩	6.67	6.39	2.39	116.7	左下一部欠損	平面:方形、断面:長方形、砥面数 2、中砥、線条研磨痕あり
38		砥石	III 検	土坑 54		片岩か	(8.99)	3.04	1.84	(71.1)	1/4 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 2、仕上げ、線条研磨痕あり、全面被熱
39		火打石	III 検	土坑 57		石英	2.32	1.83	1.70	9.9	完形	ツブレ 4 縁辺
41		石臼	III 検	土坑 57		安山岩	(12.52)	(10.94)	(7.11)	(1104.0)	3/4 以上欠	上臼、推定径 31.6(cm)
42		凹石	III 検	土坑 57		安山岩	11.45	9.87	6.71	1034.0	完形	平面:楕円形、断面:楕円形、凹みφ 44.6mm・深さ 6mm、裏面に敲打痕
43		砥石	III 検	検出面	東	頁岩	(8.27)	(4.51)	(2.25)	(144.9)	1/4 欠	平面:長方形、断面:長方形、砥面数 2、仕上げ、被熱により劣化激しい

ID	図 No.	器種	検出面	遺構	出土地点 ほか	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
44	10	砥石	Ⅲ検	検出面		泥岩	13.59	4.22	5.64	562.0	完形	平面：長方形、断面：長方形、砥面数 2、荒上砥、線条研磨痕あり
45		砥石		北壁	東半	砂岩	(11.38)	(9.65)	(8.43)	(1668.0)	3/4 以上欠	平面：長方形か、断面：5 角形、砥面数 4、荒砥
46		砥石		東壁		頁岩	(5.42)	(4.07)	1.15	(26.5)	3/4 以上欠	平面：不明、断面：不明、荒～中砥
47		砥石か		東壁		頁岩	(2.46)	(2.44)	0.28	(2.9)	3/4 以上欠	平面：不明、断面：不明、中砥
48		硯か		東壁		粘板岩	(14.13)	(7.53)	(1.62)	(200.6)	3/4 以上欠	不明、1 側面のみ残
49		碁石	I 検	壁面		不明	2.16	2.02	0.68	3.8	完形	平面：円形、断面：柳葉形、白石、被熱、現代品か
50		砥石か	I 検	壁面		頁岩	(5.43)	(4.18)	(2.06)	(51.2)	3/4 以上欠	1 側面のみ残
51		砥石		表土		泥岩	(10.45)	(3.35)	(1.13)	(53.5)	3/4 以上欠	2 側面のみ残
52		砥石		表土		頁岩	(10.84)	(5.14)	(3.49)	(250.7)	3/4 以上欠	剥離して 2 個体に割れ、中砥
54		石臼	Ⅱ検	攪乱		安山岩	(21.00)	(10.62)	(12.08)	(2970.0)	3/4 欠	上臼、ものくぼりあり、推定径 25.68(cm)
55		砥石	Ⅲ検	検出面		頁岩	(5.33)	(4.70)	(0.71)	(21.7)	1/4 欠	平面：方形、断面：扁平長方形、砥面数 2、仕上げ砥
56		砥石	I 検	表土		頁岩	(10.90)	(8.60)	(3.78)	(502.0)	3/4 欠	平面：長方形、断面：不明、剥離して 4 個体に割れ、荒～中砥
57		砥石	I 検	表土		頁岩	(19.20)	(7.60)	(2.33)	(384.0)	3/4 欠	平面：不明、断面：不明、2 端部のみ残、中～仕上げ砥
58		砥石	I 検	表土		頁岩	(16.10)	(9.25)	(3.42)	(412.0)	3/4 欠	平面：不明、断面：不明、1 端部のみ残、中砥
59		砥石	I 検	表土		頁岩	(14.27)	(8.22)	(5.79)	(702.0)	3/4 欠	平面：不明、断面：不明、中砥
60		砥石	I 検	表土		頁岩	(10.43)	(7.76)	(4.98)	(660.0)	3/4 欠	平面：不明、断面：不明、中砥
63	5	碁石	I 検	検出面	西	粘板岩か	2.04	1.80	0.44	2.5	完形	平面：円形、断面：扁平な楕円形、被熱により全面赤色化

※ ( ) 内数値は残存値を表す。  
※ 300g 未満は 0.1g 単位、300g 以上は 1g 単位。

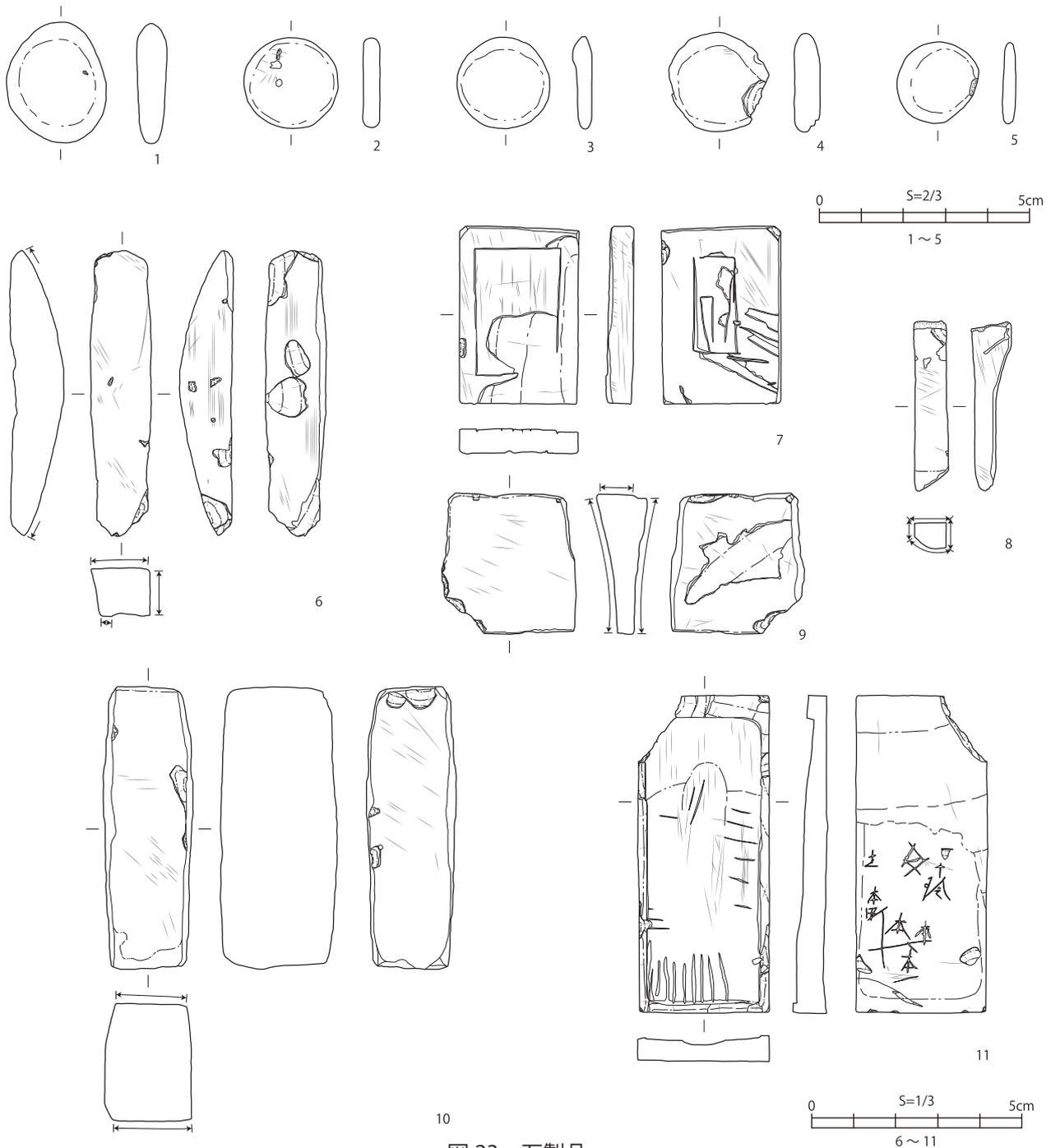


図 23 石製品

## 6 金属製品（表 12、図 24・25、写真図版 9）

### (1) 概要

金属製品は 86 点出土し、その内訳は鉄製品 29 点、銅製品 21 点、金属種別不明 2 点、銭貨 34 点である。それぞれの出土地点・器種・寸法等については一覧表を参照されたい。

器種は、鉄製品が釘・瓶の王冠・その他不明品、銅製品が小柄・煙管・簪・その他不明品、金属種別不明が不明品、銭貨である。その内、比較的残存状態の良好なもの、特徴的なものを中心に 35 点を図示している。遺物の記載にあたっては図番号を使用している。また、遺物の形状等については、X 線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

### (2) 鉄製品

**釘(1・2)** 4 点が出土し、2 点を図示している。2 点は断面が方形もしくは長方形の和釘、2 点は丸釘である。1 は、頭部の一部が欠損しており形状の特定はできないが、折り返しが若干認められることから頭巻釘の可能性が考えられる。2 は、基部上端を叩き潰し、折り返して頭部とした頭巻釘である。

**不明(3)** 21 点が出土し、1 点を図示している。3 は、円板状製品である。端部は湾曲し、皿のような形状をしている。

### (3) 銅製品

**小柄(4)** 1 点が出土し、図示している。4 は柄のみで、刃部は残存しない。片面には 4 本一組の斜線が 4 カ所に陰刻される。

**煙管(5～10)** 15 点が出土し、6 点を図示している。いずれも羅宇煙管である。5・6・8 は吸口で、6 は小口付近に 3 本の陰刻が施される。7・9・10 は雁首で、いずれも脂返しの湾曲が小さい。7・10 には外面に金鍍金が施される。9・10 には羅宇の木質が残存する。また、10 は、陰刻が施されるが、判読できない。

**簪(11)** 1 点が出土し、図示している。11 は頭部に耳搔きが付き、髪に差す部分が二股に分かれる形状をしている。頭部の両面には文様が陰刻される。

### (4) その他

**不明(12)** 2 点が出土し、1 点を図示している。12 は、2 カ所に膨らみを持ち、中央が空洞になる製品である。両端が欠損しているため詳細は不明であるが、燭台のようなものか。

### (5) 銭貨

**銅銭(13～35)** 34 点が出土し、23 点を図示している。内訳は元豊通宝 1 点、寛永通宝 29 点、一銭 2 点、不明 2 点である。13 の元豊通宝は初鑄 1078 年の宋銭である。14～35 は、寛永通宝である。19・20 は、裏面に「背」が陽刻される背文銭である。

表 12 金属製品一覧表

図 No.	ID	検出面	遺構	出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属 種別	備考	
	1	I 検	検出面	No.03	寛永通宝	23.8	23.8	1.0	2.5	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	2	I 検	検出面	No.05	煙管	51.3	13.6	9.8	3.9	Cu	吸口	
	3	I 検	検出面	No.10	煙管	75.0	15.2	23.1	5.9	Cu	雁首	
	4	I 検	検出面	No.12	不明	208.0	16.2	0.4	5.4	Cu	薄い板状製品	
14	5	I 検	検出面	No.15	寛永通宝	23.2	23.2	1.0	1.7	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	5	6	I 検	検出面	No.22	煙管	57.0	9.6	9.0	4.4	Cu	吸口
15	7	I 検	検出面	No.23	寛永通宝	22.7	22.2	0.9	1.5	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
16	8	I 検	検出面	No.24	寛永通宝	24.8	224.8	1.3	3.0	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
6	9	I 検	検出面	No.26	煙管	39.5	11.2	4.6	2.6	Cu	吸口	
	10	I 検	検出面	No.32	寛□□宝	23.9	23.8	1.1	1.5	Cu	わずかに欠/寛永通宝か/錆化が著しい	
17	11	I 検	検出面	No.47	寛永通宝	21.9	21.9	0.9	1.4	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	12	I 検	検出面	No.56	不明	29.0	10.2	9.3	34.5	不明	断面円形の輪状製品	
18	13	I 検	検出面	No.57	寛永通宝	24.8	24.7	1.3	3.1	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
4	14	I 検	検出面	No.61	小柄	96.3	14.4	5.6	22.6	Cu	柄/片面に線状の文様あり	
19	15	I 検	検出面	No.62	寛永通宝	25.2	25.2	1.2	3.0	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正) / 背文	
13	16	I 検	検出面	No.67	元豊通宝	23.3	23.2	1.0	1.7	Cu	完形/初鑄 1078 年(栄)	
20	17	I 検	検出面	No.68	寛永通宝	25.4	25.4	1.1	3.0	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正) / 背文	
	18	I 検	検出面	No.68	寛□□□	23.9	23.7	2.1	3.2	Cu	完形/寛永通宝か/錆化が著しい	
	19	I 検	検出面	No.81	不明	115.2	2.8	1.6	5.7	Cu	断面長方形の棒状製品/L字に曲がる	
	20	I 検	検出面	No.82	銭貨	25.2	24.8	1.6	2.0	Cu	1/3 残存/錆化が著しい	
	21	I 検	検出面	No.84	銭貨	24.6	24.6	1.3	1.9	Cu	完形/錆化が著しい	
21	22	I 検	検出面	No.85	寛永通宝	24.5	24.3	1.2	1.9	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	23	I 検	検出面	No.89	寛永通宝	24.7	24.5	1.4	1.9	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
22	24	I 検	検出面	No.90	寛永通宝	23.2	23.0	1.2	2.1	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
12	25	I 検	検出面	No.95	不明	103.1	40.4	40.1	123.0	不明	両端欠損	
	26	I 検	検出面	No.98-1	不明	77.9	30.3	11.7	33.2	Fe	断面長方形の棒状製品/中空/L字に曲がる	
	27	I 検	検出面	No.98-1	不明	71.8	27.3	13.7	18.0	Fe	断面長方形の棒状製品/中空/コ字に曲がる	
	28	I 検	検出面	No.98-1	不明	43.1	31.1	16.0	19.1	Fe	断面長方形の棒状製品/中空/L字に曲がる	
	29	I 検	検出面	No.98-1	不明	54.6	24.4	18.8	14.9	Fe	断面長方形の輪状製品に板状製品が付く	
	30	I 検	検出面	No.98-1	不明	44.4	41.7	35.1	21.8	Fe	断面円形の輪状製品に湾曲した板状製品が付く	
	31	I 検	検出面	No.98-1	不明	20.6	18.0	10.4	4.2	Fe	断面長方形の棒状製品/中空	
	32	I 検	検出面	No.98-1	不明	36.3	9.1	5.3	3.7	Fe	断面長方形の棒状製品/やや湾曲する	
	33	I 検	検出面	No.98-1	不明	31.2	6.2	5.6	1.6	Fe	断面円形の棒状製品	
	34	I 検	検出面	No.98-2	不明	67.0	31.0	3.0	11.2	Fe	板状製品	
	35	I 検	検出面	No.98-2	不明	35.7	15.3	6.5	5.0	Fe	板状製品/L字に曲がる	
	36	I 検	検出面	No.98-2	不明	25.9	13.0	2.1	2.5	Fe	板状製品	
	37	I 検	検出面	No.107	不明	63.8	15.9	5.0	5.6	Fe	板状製品	
	38	I 検	検出面		寛永通宝	25.1	25.0	1.2	2.4	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正) / 錆化が著しい	
23	39	I 検	検出面	中央	寛永通宝	24.8	24.8	1.5	4.2	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
24	40	I 検	検出面	中央	寛永通宝	23.4	23.4	1.0	2.4	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	41	I 検	検出面	中央	寛永通宝	25.0	24.4	1.8	2.5	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正) / 錆化が著しい	
	42	I 検	検出面	中央	煙管	18.2	17.8	12.0	3.3	Cu	火皿	
	43	I 検	検出面	中央	不明	56.5	12.4	7.7	17.0	Fe	断面長方形の棒状製品	
	44	I 検	検出面	中央	不明	63.7	10.8	5.0	8.4	Fe	棒状製品/錆化による破損が著しく断面形不明	
3	45	I 検	検出面	東	不明	47.3	44.9	2.3	13.5	Fe	円板状製品/湾曲する	
25	46	I 検	検出面	西	寛永通宝	24.6	24.6	1.4	3.6	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
26	47	I 検	検出面	西	寛永通宝	23.2	23.0	1.4	2.7	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
7	48	I 検	検出面	南西	煙管	71.7	13.5	13.2	9.6	Cu	雁首/金鍍金	
	49	I 検	検出面	攪乱	瓶の王冠	33.7	33.7	7.4	2.6	Fe	1/4 欠/カネモ醬油 上高地みそ株式会社	
	50	I 検	検出面	中央	不明	82.6	9.3	8.4	8.2	Fe	断面円形の棒状製品	
	51	I 検	検出面	中央	煙管	55.3	9.6	9.4	3.2	Cu	吸口	
	52	I 検	検出面	西	煙管	14.8	14.3	10.4	2.3	Cu	火皿	
	53	I 検	検出面	西	不明	38.5	11.7	5.6	0.7	Fe	断面長方形の棒状製品/中空/片面は平らな板状	
	54	I 検	鍛冶付付近		煙管	63.9	9.2	11.2	3.5	Cu	雁首/火皿欠	
27	55	I 検	鍛冶炉	整地土	寛永通宝	23.6	23.3	1.2	2.4	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
8	56	I 検	攪乱		煙管	52.6	11.0	10.9	3.5	Cu	吸口	
28	57	I 検	攪乱		寛永通宝	24.5	24.3	1.0	2.3	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
29	58	I 検	攪乱		寛永通宝	23.3	23.3	1.0	2.2	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
30	59	I 検	攪乱		寛永通宝	23.0	22.8	1.0	2.0	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
9	60	I 検	表土		煙管	59.6	10.7	8.5	5.8	Cu	雁首/火皿欠/羅字の木質が残存する	
	61	I 検	壁		不明	132.5	100.8	5.3	243.0	Fe	板状製品/4つの孔をもつ/湾曲する	
	62	I 検	壁		不明	149.0	18.7	3.7	24.0	Fe	板状製品	
	63	I 検	壁		不明	66.0	20.8	4.0	10.1	Fe	板状製品	
	64	II 検	土 6		不明	67.7	10.1	9.1	13.6	Fe	棒状製品/錆化による膨張で断面形不明	
	65	II 検	土 12		煙管	48.0	16.8	24.5	3.9	Cu	雁首	
31	66	II 検	土 16		寛永通宝	24.3	24.2	1.5	3.2	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
1	67	II 検	土 25		釘	35.1	7.9	2.2	0.5	Fe	頭部の一部、脚部先端わずかに欠/断面長方形	
	68	II 検	土 52		煙管	57.8	11.3	10.4	3.6	Cu	吸口	
	69	II 検	土 54	No.01	□永□□	20.0	12.3	1.2	1.1	Cu	1/3 残存/寛永通宝か/背十一波	
32	70	II 検	検出面		寛永通宝	22.8	22.6	1.1	2.3	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	71	II 検	検出面	中央	不明	32.1	25.7	3.0	3.5	Cu ?	薄い板状製品/湾曲する	
	72	II 検	攪乱		一銭	28.0	28.0	1.4	5.6	Cu	完形/錆化が著しい	
	73	II 検	攪乱		一銭	23.0	23.0	1.5	3.2	Cu	完形/大正 5 年鑄造/錆化が著しい	
33	74	III 検	土 27		寛永通宝	224.5	24.5	1.2	2.7	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
34	75	III 検	土 29		寛永通宝	22.7	22.6	0.9	1.8	Cu	わずかに欠/初鑄 1636 年(明正)	
10	76	III 検	土 32		煙管	50.7	13.5	14.1	11.0	Cu	雁首/刻印あり/金鍍金/羅字の木質が残存する	
11	77	III 検	土 32		簪	106.0	7.9	1.8	4.9	Cu	完形/頭部に耳掻きが付く/文様あり	
2	78	III 検	土 39		釘	34.5	7.6	3.5	1.4	Fe	脚部先端わずかに欠/断面長方形	
35	79	III 検	検出面	西	寛永通宝	24.6	24.6	1.5	3.4	Cu	完形/初鑄 1636 年(明正)	
	80	III 検	検出面	西	煙管	66.2	9.8	9.9	7.2	Cu	雁首/火皿欠	
	81	III 検	検出面	西中央	瓶の王冠	32.8	23.4	7.5	1.5	Fe	半欠/カネモ醬油 上高地みそ株式会社	
	82	III 検	検出面	中央	丸釘	87.8	9.4	8.3	7.2	Fe	完形/断面円形	
	83	III 検	検出面	中央	丸釘	38.1	9.0	8.3	3.3	Fe	脚部先端欠/断面円形	
	84	III 検	南壁		不明	20.8	20.2	0.3	1.1	Cu	薄い円板状製品	
	85	III 検	南西壁	攪乱	瓶の王冠	34.9	32.7	6.0	2.8	Fe	わずかに欠/カネモ醬油 上高地みそ株式会社	
	86	III 検	南西壁	攪乱	瓶の王冠	34.9	32.7	7.2	2.7	Fe	一部剥落/静岡県大仁町 東洋醸造株式会社	

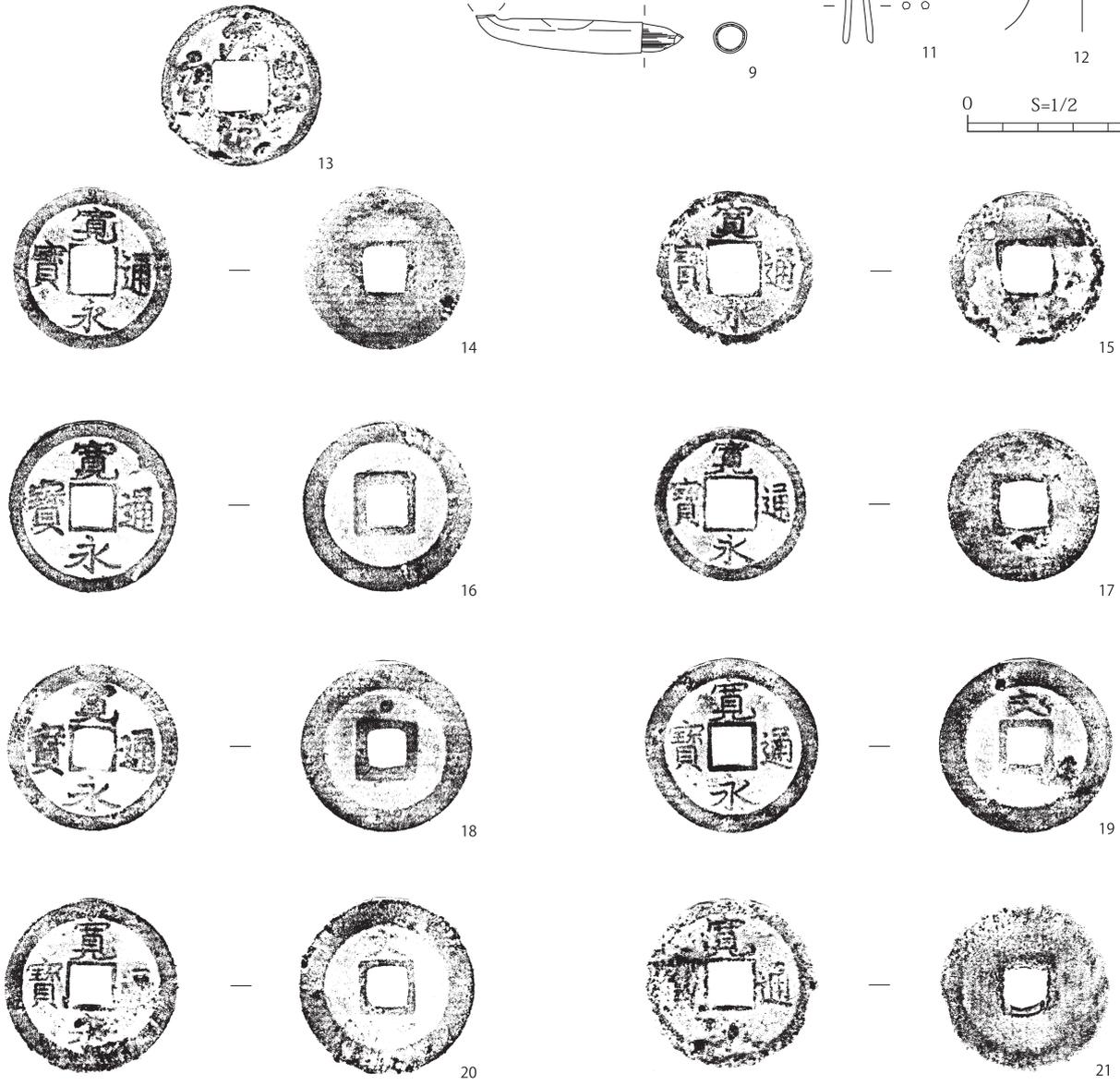
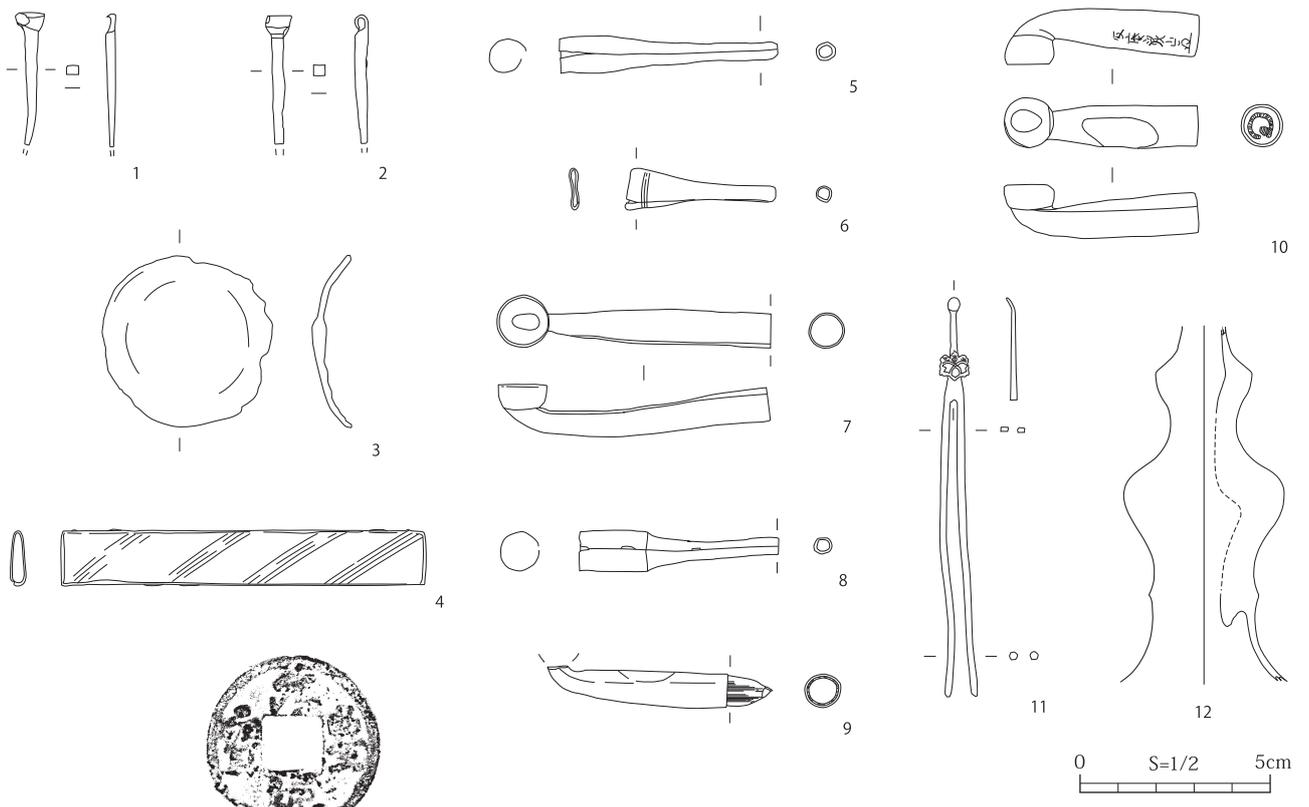


图 24 金属製品 (1)

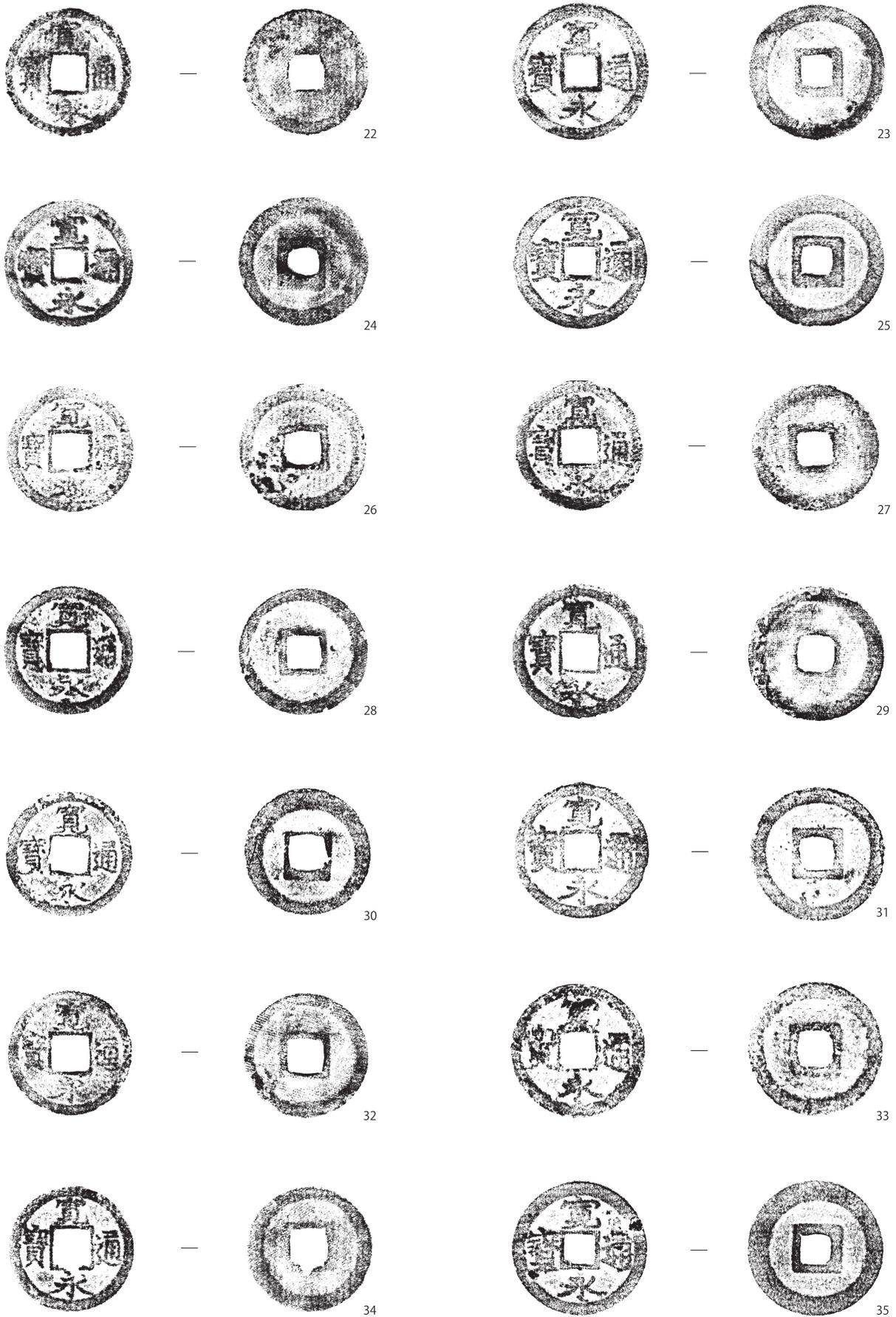


图 25 金属製品 (2)

## 第IV章 調査のまとめ

平成6年度から13年度にかけて行われた、松本市中央西土地地区画整理事業に伴う伊勢町の発掘調査は28カ所にのぼり、町の中心部である本町付近から農村部の接点である西端部まで各地で様々な成果を挙げている。今回の調査は、第5次調査のすぐ西側に位置し、過去調査成果に追従するような成果を得ることができた。

これまでの調査でわかってきた町屋の構造は以下のとおりである。母屋が通りに面して建ち、その内部は通り側に店兼作業場が、その奥に日常生活の空間が造られている。母屋の奥には裏庭があり、廃棄場が掘られたり、土蔵や工房小屋等が設けられている。このような成果を基に今回の調査をみると、調査区は母屋から裏庭にかけての範囲と推定される。検出された遺構は、母屋側に炉跡や建物の柱穴跡、裏庭側に鉄滓を廃棄した土坑が検出された。

今回の調査では、鍛冶炉跡や鍛冶関連の遺物がⅠ～Ⅲ検で多く出土していることから、当地は近世から近代にかけて鍛冶職人がいた町屋敷と考えられる。鍛冶関連遺物として、精錬に関わる羽口や鉄滓や、金属製品の仕上げに関わる砥石の出土が挙げられる。当地で鍛冶に関わる一連の行為が行われていた裏付けとなった。また、過去の調査から鍛冶炉は短期間で作り直していたことがわかっている。今回、鍛冶炉跡が3基切り合うように検出されたため、十数年の間に2回以上同じ場所で作り直していることがわかった。

城下町では近世・近代をとおして幾度も火災を経験している。小規模な火災もあれば、町の大半を焼け払うような大火も起きている。今回の調査で検出された火災の痕跡から、「安政6年（1859）」と刻印された涼炉や、被熱した18世紀中頃～19世紀中頃の陶磁器が見つかったことから、この火災はそれ以降と考えられ、文献上に見られる元治元年（1864）や明治21年（1888）の大火が関連すると想定される。

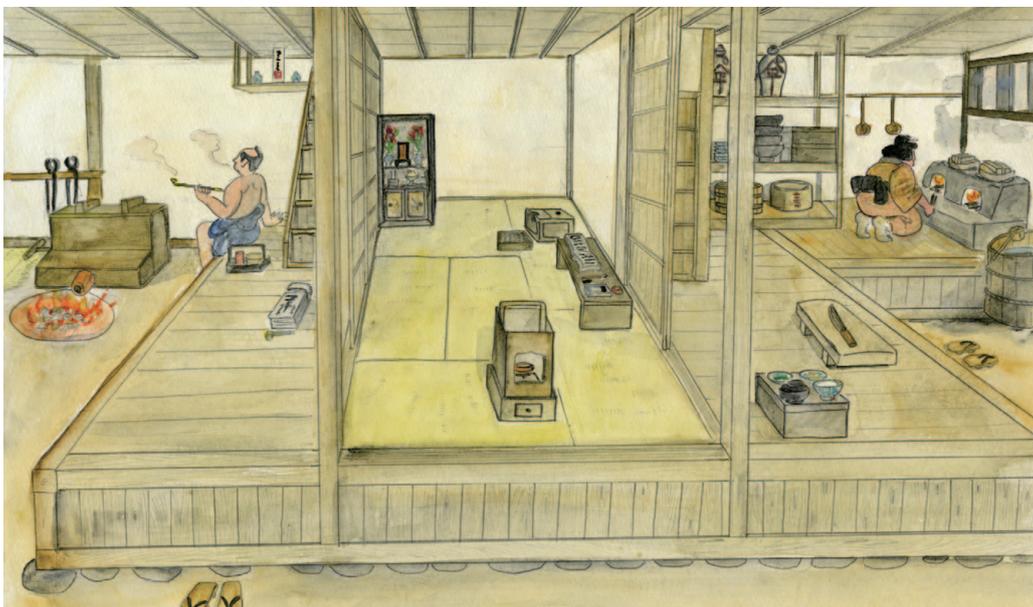


図 26 これまでの発掘成果から復元した鍛冶屋の様子（引用：松本市教育委員会『わたしたちの松本城』）

### 結語

本調査の実施と報告書作成にあたっては、上高地みそ株式会社から多大なご理解とご協力をいただきました。現場作業に際しては、伊勢町2丁目の各町会の皆様、各町会長の皆様にはご理解とご支援を承りました。記して深甚なる謝意を表すものです。

## 参考文献

- 1 江戸遺跡研究会 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房株式会社
- 2 長野県史刊行会 1974 『長野県史』近世史料編 第5巻(2) 中信地方
- 3 中藤 淳 1986 『近世松本城下町における変遷過程』東京学芸大学大学院修士論文
- 4 松本市教育委員会 1995 『松本市史』 第2巻歴史編Ⅱ近世
- 5 松本市教育委員会 1995 『松本市史』 第4巻旧市町村編Ⅰ
- 6 松本市教育委員会 1996 『松本城下町跡伊勢町～近世・町屋跡の発掘調査～』
- 7 松本市教育委員会 1996 『松本城下町跡伊勢町第2～7次試掘調査報告書』
- 8 松本市教育委員会 1997 『松本城下町跡伊勢町第8・9・12次、本町第1・2次試掘調査報告書』
- 9 松本市教育委員会 1998 『松本城下町跡本町第3・4次、伊勢町第14～17次試掘調査報告書』
- 10 松本市教育委員会 2000 『松本城下町跡本町第5次、伊勢町第19・21・22次、中町第1・2次、宮村町第1次試掘調査報告書』
- 11 松本市教育委員会 2001 『松本城下町跡伊勢町第23・24・25次試掘調査報告書』
- 12 松本市教育委員会 2002 『松本城下町跡伊勢町第26・27・28次試掘調査報告書』
- 13 松本市教育委員会 2003 『松本城三の丸跡土居尻第1次発掘調査報告書～遺物編2(木器編)～』
- 14 松本市教育委員会 2006 『松本城下町跡東町第3次発掘調査報告書』
- 15 松本市教育委員会 2019 『わたしたちの松本城』



第1号鍛冶炉跡の調査風景



I 検全景 (南東から)



調査区北壁中央 (南から)



I 検出土遺物① (南から)



I 検出土遺物② (南から)



I 検出土遺物③ (南から)

写真図版 2



I 検鍛冶炉 1 (北西から)



I 検鍛冶炉 2 (南から)



I 検鍛冶炉 3 (南から)



I 検鍛冶炉 3 土層 (南から)



II 検全景 (南東から)



II 検土 3 (南から)



II 検土 8 (南から)



II 検土 10 (南から)



II 検土 10・11 (南から)



II 検土 14 (西から)



II 検土 35 (東から)



II 検土 52 (北から)



II 検土 52 土層断面 (東から)

写真図版 4



Ⅱ 検土坑列 (北から)



Ⅱ 検土 38・39 (東から)



Ⅲ 検全景 (南東から)



Ⅲ 検溝 1 周辺 (西から)



Ⅲ 検土 7 (南から)



Ⅲ検土 12 (北から)



Ⅲ検土 27 遺物出土 (北から)



Ⅲ検土 27 木桶検出 (北から)



Ⅲ検土 42 (北から)



Ⅲ検土 43 (北から)



Ⅲ検土 47 (北から)



Ⅲ検土 50 (北東から)



Ⅲ検土 54 (北から)



Ⅲ検土 61 (北から)



Ⅲ検土 74 (北から)



Ⅳ検全景 (南東から)



Ⅳ検土 4 (北から)



Ⅳ検土 11 (北から)



I 検 (1)



I 検 (2)



I 検 (3)



I 検 75 底裏刻書



II 検



III 検 (1)



III 検 (2)



III 検 (3)



木製品 (1 ~ 6 : S=1/4、番号は実測図と同じ)



石製品 (番号と縮尺は実測図と同じ)



金属製品（番号と縮尺は実測図と同じ）

# 報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうかまちあといせまち だい29じはつつちょうさほうこくしよ							
書名	長野県松本市 松本城下町跡伊勢町 第29次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.237							
編著者名	小山奈津実、竹内靖長、原田健司、壬生量子、宮下亮、吉澤せり子							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	令和2年(2020)3月27日(令和元年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
まつもとじょうかまちあと 松本城下町跡 伊勢町	ながのけんまつもとし 長野県松本市 ちゆうおう 中央1丁目 109-2 ほか	20202	157	36度23分 29秒	137度96分 54秒	2018年6月7日 ～ 2018年7月30日	のべ1,048㎡ (I～IV検 の合計)	ホテル 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松本城下町跡 伊勢町	屋敷跡 (町屋)	戦国 ～ 近代	I 検 (18c 中～19c 中、近代) 火災層、鍛冶炉跡 3 基 II 検 (18c 中～19c 中) 土坑 43 基 III 検 (17c 前～中または 18c 後～19c 前) 溝状遺構 1 条、土坑 54 基 IV 検 (戦国時代か) 土坑 18 基		土器 灯明皿、内耳鍋、ほか 陶磁器 肥前産、瀬戸・美濃産、 京都産、輸入磁器ほか 鍛冶関連遺物 羽口、鉄滓 木製品 漆器、下駄、箸ほか 石製品 基石、砥石、硯、石臼ほか 金属製品 釘、煙管、銭貨ほか			
要約	<p>松本城下町跡伊勢町は、経済の中心である本町から西の飛騨国に向かう野麦街道沿いに発展した町で、商家の他、鍛冶屋等の職人が多く住む町屋の跡が残る。</p> <p>今回の調査では町屋跡に関わる火災の跡や生活面を3面、中世以前の生活面を1面の計4面を確認した。I 検は、調査区の特に北半で広範囲に火災層が認められた。「安政六 未六月下旬 製之」と刻印された陶器(涼炉)片が見つかったことから、幕末期以降の火災の跡と推測できる。北東端では鍛冶炉跡3基が検出された。II 検はI 検の火災を受けた生活面であることから、同時期に帰属される。III 検は出土遺物から18世紀末頃の生活面と考えられ、鉄滓を大量に含んだ鋳造に関連する廃棄土坑が複数基見つかった。地山面のIV 検では、18基の土坑を検出したが、出土遺物は無く帰属時期は不明である。</p>							

---

松本市文化財調査報告 No.237

長野県松本市

松本城下町跡 伊勢町

—第29次発掘調査報告書—

発行日 令和2年3月27日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 川越印刷 株式会社

---

